

---

# 8人の創造者

神崎はやて

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

8人の創造者

### 【Nコード】

N0572L

### 【作者名】

神崎はやて

### 【あらすじ】

世界を創造した8人の人間がいた。

彼らは世界の意思に導かれ、やがて集結する。

今、彼らによる新たな物語がまた1つ、幕を開ける……………。

作者参加型企画作品です。企画に参加しておられない作者様も、ぜひご一読下さいませ。

## プロローグ「創造者の旅立ち」

真っ黒な空間。

果てしなく広がる闇。

そこに点々と無数に輝く光。

様々な形容の仕方はあれど、今自分がその光景に対し抱く感想は、  
たった1つ。

「どこだ、ここ……………」?

おかしい。

つい先ほどまで、自分は気の合う大学の友人とともに談笑しながら、  
教授が教鞭を振るいに来るのを教室の前列にて待っていたはずだ。

頬を抓ってみる。

「……………痛い」

有り触れた確認方法ではあったが、どうやら効果は抜群だったらし  
い。なるほど、夢ではないようだ。

ということとは、あの日常の方が夢だった、とでもいうのだろうか？

あの、家族とともに食事をし、学校に行って、友達と談笑する。

あの日常が？

その可能性も十分にある。どこぞの学者も、普段の日常が真の日常であるのか、それとも夢の世界が日常であるのか。そんなことを考えるくらいであるのだから。

だが、この自分では確かにその行為に及んでいたと知覚させる感覚は、夢などでは到底得ることは出来ないだろう。もしそれでもこの日常が夢だとするならば、夢とはなんと精巧な世界であろうか。

「ということとは、これも現実？」

そう誰ともなく呟いて、青年は辺りを見回す。見渡す限り、夜空のような空間が一面に広がっている。

あの日常を現実だと仮定したとして、今自分が置かれている状況もまた、現実ということになる。しかし、今までの日常からはあまりに非常識な状況に、頭が追いついていかない。

ああ、なんと堅い頭だろうか……などと嘆いている場合ではないが、事実、青年の意識はあまりの出来事に軽く混乱していた。

と、それまで何の変化もなく穏やかであったその空間に、1つの変化が生まれた。

銀の靄が現れる。オーロラのようにうねるそれがやがて消滅すると、中から1人の青年が現れた。首にマゼンタに塗装されたトイカメラを提げ、ふてふてしい笑みを向けてくる。

それだけで、自分にこの青年が何者か気付かせるには十分だった。

「門矢……士……!？」

そう、自分のよく知る特撮ヒーローの主人公。

信じられないという顔見つめる青年に、件の人物、門矢士は相変わらずふてぶてしい笑顔を向けたまま切り出した。

「ほう。俺のことを知っているのか」

「よく知ってるさ。ヒーローさん？」

「ふっ、そのとおり。俺こそ全世界のヒーロー、士様だ」

その傲慢不遜な態度。改めて、彼が門矢士その人なのだと理解した。

「で？ 僕はなんでこんなところにいるの？」

「……………変な奴だな、お前。普通はもう少し混乱するものだろ」

「混乱なら、もう十分過ぎるほどしたさ。いつきなりこんな場所に来て、物語の世界の住人と会話してるんだもん。混乱しない方が、どうかしてると思うけど？」

「それもそうか。なら、単刀直入に言おう。お前達には、とある世界の危機を救ってもらおう」

やはりか。

ある程度予想していた答に溜め息を吐きつつ、青年は土に尋ねる。

「君が行けばいいじゃないか、士。君にはその資格もあれば力もある。それを成す知恵もある。どうしてそれが、僕がやることになるっていうのさ？」

「生憎だが、俺は他の世界を救うのに忙しい。なら、手っ取り早くお前に頼むのが一番だろ。……………なあ、作者？」

「どっ、して……………それを!？」

「知らないとも思ったか？ これでも俺は、様々な世界を巡っているんでね。それが全てお前達作者が仕組んだ『物語』であることも勿論知っている。だからこそ、お前達にやってもらうわけだ。この世界に発生した『バグ』を、取り除く作業をな。それはお前達作者……………創造者が成すべきことだ」

「成すべきこと、か……………。解ったよ。作者の代表として、必ずその世界をバグから救ってみせる。だが、その前に幾つか質問したい」

「いいぞ。答えられる範囲ならな」

「じゃあまず1つ目。その世界の名は？」

そう青年が問うと、士は途端に意地の悪い笑みを浮かべ。

「リリカルでマジカルな3つ目の世界、と言えば解るか？」

「……………よく解りました」

心当たりがありすぎる。

「他には？」

「そこでの生活はどうなるの？ 僕、全くの無一文になるはずなん

「ただど……………」

「心配はいらん。ちゃんと弄ってお前の金、戸籍、経歴、果ては外見までお前の望むように改造しておいた」

「……………ねえ、それってやばいんじゃないの？」

つまりは、世界の常識を弄って、いかにも自然に入り込めるようにしたというのである。

世界を救おうという者が、世界を弄っていいのだろうか？

「構わねえよ。この程度の誤差、1つの星の一生に比べれば微々たる物だ」

「そういうものかね……………」

「そういうものだ」

そう言っつて、士はにっつと笑った。

その笑顔は、いくつもの戦いを潜り抜けてきた戦士の物。

幾多の戦いの果てに勝利を掴み取った英雄の笑顔だ。

何故か解らないが、こうして見ているとこの男なら何でも出来てしまつのではないか？ という気になってしまう。

「さて、じゃあそろそろ行ってもらおうか。……………準備はいいか？」

「うん。また、会えるかな？」

「ああ。旅を続けていれば、いつか必ずな。こいつは餓別だ。受け取れ」

そう言って士が差し出したのは、数枚のカード。

絵柄はまだシルエットのままで、そのままではどんなカードなのか判別することは出来ない。

「ありがとう」

「ああ。……じゃあな。また、どこかで会おう。ああ、そうだ。お前の名前は？」

「僕の名は………」

本名を口にしかけるも、やめた。創造者として介入する自分が、本名を名乗るなどと野暮なことはするまい。

ならば、創造者の名を語ろう。

「僕の名は、神崎龍也」

「龍也か。頼んだぞ。この世界を、俺の代わりに………」

士。の言葉を最後に、青年の意識は白く塗りつぶされていった。

## プロローグ「創造者の旅立ち」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい、というわけで、作者参加型新規作品企画、まずはプロローグです！ いかがだったでしょうか！」

リオス「この作品には登場しませんが駆り出されました。皆様こんにちは！ リオスです」

神崎「ふう、とりあえずは導入してみたつもりなんだけど………どうだったかな？」

リオス「なんか、意外な人が案内人だったね？ 普通はこういうの、神様とか死神様とかが多いけど………」

神崎「普通じゃつまらないので、土君に出ていただきました。せっかく世界を渡る旅人というオイシイ（？）設定なんだから、こういうところで使わなきゃ損でしょう！」

リオス「まあね。で？ この先はどうなるの？」

神崎「僕がリリカル世界に飛ばされて、そこでラモン先生のエディットキャラに出会います」

リオス「へえ、もう出すんだ？」

神崎「うん。まあ、なんとか書いていこうと思うんで、応援してください！」

リオス「では、記念すべき第一話まで、」

神崎「さようなら!」

## 第1話「創造者、魔法の世界へ」

「う……ん……」

頬を撫でる風の感触に、青年は目を覚ました。

むくっ、と起き上がり、眠気眼を擦る。

「あ……れ？ 僕、何してたんだっけ？」

寝ぼけた頭をフル回転して、これまで起こったことを思い浮かべてみる。

学校へ行つて、教室に入り、友人と談笑して、気がついたら

真っ黒な世界にいた。

「……………っ!？」

全てを思い出すと、一気に意識が覚醒した。

「そっだ、ここはっ……………!」

気付くと、辺りは一面鬱蒼と緑が茂る森の中だった。

「……………本当に、異世界に来ちゃったのか」

自嘲気味にそう呟く。

そもそも、先ほどまで英知の宝庫である大学という建物の中にいた自分が、こんな自然溢れる森の中でいきなり目覚めるところに、「今までのことは全て夢でした」と片付けるには無理が生じる。そんなことを考えていると。

『Master・(マスター)』

自分しかいないと思っていた静寂の中に、何者かの声が響き渡った。

「だ、誰!？」

思わず立ち上がり、身構える。

だが、続けて聞こえてきた音声の出所が解ると、警戒する気持ちも失せた。

『Here is・(ここです)』

「もしかして、このペンダント?」

『Yes・(はい)』

胸元に提げられたペンダントが点滅し、音声が発せられていた。

「しかもこの形……もしかしてグロリアスか!？」

『Yes・How do you do? My name is

glorious・(はい。初めまして。グロリアスと申しま

す)』

グロリアス。

自分が現実世界にて書いていた小説の主人公が使用する、インテリジェントデバイスと呼ばれる武器の名称である。

形状を見てまさかと思ったが、どうやら本物らしい。

「本当に、何でもありません……」

『……………? What do you say? ( ? 何か言いましたか? )』

「あ、否、何も」

この世界を救え、というくらいだ。

何かしら戦闘手段が与えられるものと思っていたが、まさか自分の小説からそれがとられるとは思ってもみなかった。

『But, I was surprised, too. You take after in another master Rios very well. (しかし、私も驚きました。あなたはもう1人のマスター、リオスに瓜二つです)』

「……………は?」

はて、何だか「へえ、そうなんだ」で片付けられない言葉が聞こえてきた気がする。

訳の解らない、といった様子で首を傾げる青年に、グロリアスは続けた。

『Did you not notice it? You should confirm your face at the lake. (気付いていなかったのですか？ その湖で顔を確認してみてください)』

青年は近くにあった湖に駆け寄り、言われたとおり湖の水面に映る自分の姿を確認した。

中性的で、僅かに幼さの残る顔。肩の辺りまで伸びた短髪は、流れるようにサラサラと風に揺れる。

唯一、髪の色が空色であるという相違はあったが、金の瞳で湖を覗き込んでいる青年、神崎龍也は、龍也自身が生み出した物語の主人公、リオス・コーネルドそのものであった。

『The form is that you hope. (その姿はあなたが望んだものです)』

「僕が、望んだ？」

『Yes. (はい)』

自分が、自分の生み出した主人公となることを望んだ？

ありえない話ではない。

良きにしろ悪きにしろ、物語の登場人物とは最低でもある程度、生み出した作者の趣味が反映されるのも珍しいことではない。

それも主人公ともなれば、尚のことである。

事実、龍也もそんな1人だった。

「なんか……………驚きっぱなしだな」

『If you want to know more, ……  
(もっとよく知りたければ……………)』

「あ、そうそう。これからはさ、日本語で出来るだけ喋ってくれないかな？ 解らないわけではないけど……………やっぱり慣れてた方がいいしさ」

『そうですね。了解しました』

さすがデバイス。話が早い。

『そして話の続きですが、詳しくはそのバッグの中に入っているマニュアルを読んでください』

グロリアスに言われたとおり、龍也はバッグを開けて中身を確認する。

すると、片側がホチキスで閉じられた極めて簡素な冊子を発見した。

表紙に、大きな字で『介入マニュアル』と書かれている。

「どれどれ……………？」

冊子には、こんなことが書かれていた。

1つ。自分のこの世界での能力について。

デバイスは3つ。グロリアスの他に、2つのストレージデバイスがあるようだ。

バッグを漁ると、あった。

1つは、左前腕に装着するタイプの盾状のもの。そしてもう1つは、四角形の濃い青の色をした物体だった。

名を、順にナイトドライバー、バトルブッカーというらしい。

自分の見知ったものに激しく酷似している。というより、後者は配色以外はほぼ現物に等しい。

(おいおい、まさか……………！)

はやる気持ちを押さえ、次のページをめくる。

そこには、予想していたとおりの内容が書かれていた。

まず、バトルブッカー。言わずもがな、かの門矢士が愛用する武器を兼ねたカード収納器、ライドブッカーと同様の代物である。

しかし、能力にもちゃんと違いはあった。

1つは、主役クラスの仮面ライダー以外の、即ちサブライダーと呼ばれるライダー達にも変身できるという事。そしてもう1つは、ガンダムやコードギアスといった、所謂メカアニメの類に登場するメカにも変身出来るという点だ。試しに何枚かカードを取り出してみると、確かに『ガンダム』のカードを取り出すことに成功した。

そして、もはや言うまでもないだろうが、ナイトドライバーはそのカード達を読み込む盾だ。驚いたのはその表装に施された術式で、なんと、かの某学園都市最強の男の能力、ベクトルの操作能力が備わっているらしい。自分で言うのもなんだが、つくづく滅茶苦茶である。

以上が、現在の龍也の戦闘能力だ。所謂希少技能レアスキルと呼ばれるものもあるらしいが、今は封印されているようだ。

しかし、たとえこれだけでも龍也にとっては十分感動に値する。

「おお、おおおおおお………」

『マスター。感動されているところ申し訳ないのですが、私の能力にも追加点がありますので、ご説明させていただきます』

感動に打ち震えていた龍也は、グロリアスの言葉に耳を傾ける。

『まず、あなたが描いておられた本編での技は全て登録されていますし、マルチウエポン機能も滞りなくご使用が可能です。追加点としましてはまず、マスターが知っておられる、所謂術や魔法に数えられるものはすべて登録されています。これらはマスターの魔力変換資質に関係なく、全てご使用が可能です。ただ、その場合は魔力とは別に体力を消費いたしますので、過度の使用はお控え願います』

「ちよっ！」

龍也はグロリアスの説明に驚愕した。

つまりは、自分の知るどんな魔術でも、このデバイスに掛かれば再

現が可能だというのだ。

体力消費というデメリットを考慮したとしても、なんとという反則な能力だろうか。

『まあ、マスターの本来の魔力変換資質である、氷系の術式であれば魔力での行使が可能ですが。それと、マルチウエポン機能にも追加点があります。それは、実際にマスターが知っておられる物語の武器にもなることが可能な点です。例えば、このように』

そう言うと、グロリアスは発光し形を変えていく。

光が収まると、そこにはかの死神代行が愛用する刀、残月の姿があった。

「す、凄い……………」

よくも、ここまで反則なデバイスに育ったものである。

龍也は、驚愕にぐうの音も出なかった。

『他にも様々な能力がありますので、後々お確かめ下さい』

「う、うん……………」

龍也は相槌を打ち、気を取り直して続きを読むことにした。

他に書かれていたのは、生活に関することがほとんどだった。

貯金は遊んで暮らせるほどの金額が入っていたし（通帳がバッグの中に入っていた）、住むところも自動的に何とかなるシステムにな

っているらしい。何がどうなるのかはさっぱり書かれていないところは不審だが、とりあえずは寢床が確保できるらしいことは解ったので、保留とした。

そして最大の目的とは、この世界に紛れ込んだバグを取り除くことらしい。

バグというのはたまたまこの世界に発生してしまった悪意を持ったイレギュラーのことで、それを排除し世界を守ることこそが、創造者に与えられた使命のようだ。

他は、成り行きに任せると、何故かそれだけ少し汚い字で書かれていた。

「これで全部、か。しかし、土君もまめだね。こんな本まで書いていてくれるなんて」

そう呟き裏表紙を見ると、そこには小さな字で『光夏海 著』と書かれていた。

「……………苦労してるんだね、夏海」

おそらくは無理矢理押し付けられたのだろう。そう思うと、同情の念が湧いてきた。

自分も同じであることにはあくまでも気がつかない。

「さて、これで少し置かれた状況は解ったし、少し歩いてみようかな」

そう言って、立ち上がろうとした、その時

「！ うわっ！」

いきなり閃光が飛来し、龍也のすぐ近くの地面を抉る。

「何だ！？」

龍也が閃光の飛来した方向を見やる。

そこには、1人の青年が浮遊していた。

黒の短髪をオールバックにした青年の釣りあがった紅い目が、真っ直ぐにこちらを見つめてくる。

「いきなり何をするんだ！」

「五月蠅い。バグ、覚悟しろ！」

「ええっ！？」

青年の手に握られた鞭が唸る。

振り下ろされた鞭をかわそうとするも、その不規則な動きについていけず、打ち付けられる。

「うあっ！！！」

地面を転がり、止まったところでグロリアスと2つのストレージデバイスを拾い上げる。

やるしか、ない。

「くそっ、ぶつつけ本番だけど、仕方ない！」

立ち上がり、グロリアスを握り締め。

「グロリアス、セットアップ！」

『All right. Stand by ready, set up! (了解。準備完了、構築します)』

体が、大きな光に包まれる。

やがて光が晴れ、そこにいたものは。

「騎士………!？」

純白の騎士甲冑を身に付けた騎士が、悠然と佇んでいた。

## 第1話「創造者、魔法の世界へ」（後書き）

（神の黄昏）

リオス「ちよつと待って。これで終わり!？」

神崎「うん」

リオス「ほとんど説明にしか使ってないじゃん!」

神崎「いや、創造者がどんな経緯でリリなの世界に来たのか、詳しく解ってた方がいいかなっておもって。能力の説明も出来たし、あとは戦わせるだけ! ただ……」

リオス「? ただ?」

神崎「すみません、ラモン先生っ! 最後にちよつとしか出せなかつたばかりか、なんか知らないうちに敵っばい感じになってました」

リオス「次回しつかり活躍させますので、どうかお許しを」

神崎「では、何かリクエストありましたらお待ちしてますのでどしどしお寄せ下さい」

リオス「まだプロローグしか書いていなかったにも関わらず感想をくださいました綾崎先生、Hagaia先生、水玉先生、ありがとうございます」

神崎「それでは、また次回を、」

リオス「ご期待下さい」

## 第2話「対峙する創造者」（前書き）

呼び名の関係上、少し前を書き換えますので、読んだ方はあとで確認してみてください。

それでは、遅くなつてすみませんが、本編どうぞ。

## 第2話「対峙する創造者」

「純白の……騎士？」

青年は、目の前の凜々しく、かくも神々しい姿を顕現させた騎士に、ただただ見入っていた。

一方の騎士、神崎龍也はというと。

「これが……グロリアス……」

まさか自分で創造したものを自ら身にまとうこととなるとは夢にも思わなかった。

だが、これで戦える。

「……………はっ、いかんいかん。バグに見とれてどうする。しっかりしろ、俺！」

そう言っただけ頬をびしゃりと叩き、鞭を構えなおす。

「行くぞ、アルテミシア」

『了解』

鞭の根元のあるコアが点滅し、デバイスには無機質でない女性の高音が響き渡る。

そして、青年はそのまま鞭を龍也へ振り下ろした。

「うおわあっ！」

鞭が胸甲に直撃し、火花が上がる。

「くそっ！」

吹き飛ばされ、地面を転がり体勢を整えると、龍也は考え込む。

まだ、魔法の使い方はよく解らない。使うことが出来れば強力な力だが、これでは戦力としては数えることは出来ない。

と、するならば、答えは1つだ。

戦うならば、使用法をよく知るものの方がいい。

「よし！」

龍也はバトルブッカーからカードを引き抜くと、左腕のナイトドライバーの上部、剣の柄のような突起を引き、まるでコウモリの翼を模したそれを広げるように、カードリーダーの挿入口を露出させる。

龍也はカードをナイトドライバーに挿入し、突起を押し込み挿入口を閉じる。

『MACHINE RIDE………EXIA!』

そうカードが読み込まれた音声が鳴り響き、龍也の体が緑色の粒子に包まれる。

眩いほどの光芒。それを一息に振り払い、青き機神、ガンダムエク

シアの姿に変身する。

「何っ!?!」

「おおお、本当に変身した!」

驚きに目を見開く青年とは逆に、感動に今にも小躍りしそうな龍也。しかし、ガンダムが飛び上がったたりしている様は、実にシユールである。

「あれ、グロリアスは?」

冷静になると、グロリアスがいない。

『ここですよ、マスター』

眼下より、グロリアスの声。

そこを見ると、右手にはまったGNソードの根元にあるコアが点滅している。

「もしかして、グロリアス!?! なんでGNソードに?」

『マルチウエポン機能ですよ。元のままでもいいであろうとも思いましたが、この方がマスターが戦い易いと思ひまして』

なんと主思いのデバイスだろうか。

………などと感動している暇はなかった。

「はあっ！」

我に返った青年が、再び鞭型のデバイスを振り下ろす。

龍也はGNソードをソードモードにしてそれを迎え撃つ。

普通に迎撃すれば剣を絡め取られる可能性があるが、生憎鞭の細身を撃ち抜けるほどの腕前は持ち合わせていない。

「ほっ、はああっ！」

鞭を、斬るのではなくあくまでも弾くことを目的に、剣の腹を横薙ぎに叩きつける。

「ぐっ、重っ……………！」

魔力が込められていたのか、鞭の一撃は予想以上に重く、びりびりという振動が剣を通して手に伝わってくる。

それでも押し負けるようなことはなく、こちらも単純に魔力を込めて押し返す。

「くっ、このっ……………！」

青年は鞭を弾かれたことに驚愕しつつも、巧みにそれを操り確実に龍也を追い詰める。

変幻自在な鞭の攻撃が、龍也の肩を、腰を、脛を打ちつける。

「ぐっ、あっ、ああっ！」

直撃するも、エクシアの装甲のおかげでダウンは免れた。  
しかしダメージが大きくなったためか、エクシアへの変身が解けもとの騎士甲冑に戻る。

「く……そ………」

「大人しく捕まれ！ バグ！」

「誰がつ！」

激昂した勢いで新たなカードを引き抜き、ナイトドライバーに挿入した。

『K A M E N R I D E …… R Y U K I !』

銀色のメカニカルなベルトが反転しながら、龍也の腰に収まる。

そして手には、金色の龍の紋章が描かれた、漆黒のカードデッキ。

「変身！」

右手を左上方に突き出し、そう叫んでデッキをベルト、Vバックルのバックル部に装填する。

赤いボディースーツに銀の胸甲。頭部には、西洋騎士を思わせる仮面。

そんな騎士 仮面ライダー龍騎の姿が、ベルトと同様反転しながら龍也の体に重なった。

「またっ……………！」

青年は憎憎しげにそう口にする、鞭を振り上げ、頭上に数十個の魔力球を発生させる。

「うええ！？」

龍也はその数に驚愕した。

いくらなんでも、あれほどの数の魔力球を捌ききることは無理だ。

「行けえっ！」

青年が、まるで猛獣使いのようにびしっ、と鞭を振り下ろすと、一斉に魔力球が龍也へと殺到する！

「くそっ！」

龍也は寸前で、バツクルのカードデッキからカードを2枚引き抜いた！

「遅い！ くらええっ！」

青年の魔力球が龍騎に次々と着弾する。

あまりの衝撃に、辺りを土煙が覆った。

「やったか……………？」

青年は安堵の声を漏らし、且つ注意深く土煙の向こうを凝視する。

そこには。

「へへっ、そう簡単にやられてたまるか、ってね！」

「なっ……………！」

龍の腹を模したような盾を装備した龍騎の姿があった。そして彼の周囲には、主を守護するかのようにとぐるを巻いた、紅き龍。

龍也が寸前で引き抜いた2枚のカード、ガードベントとアドベントの効果により召喚された盾、ドラグシールドと、無双龍ドラグレッダーである。

ギヤオオ、と、威嚇をするようにドラグレッダーが咆哮した。たったそれだけで、びりびりと空気が振動する。

「今度はこっちの番だ！」

そう言つて、龍也は新たなカードをデッキより引き抜き、左の二の腕に装着された、ドラグレッダーの頭部を模したカードリーダー、ドラグバイザーに装填した。

『SWORD VENT』

天空より、ドラグレッダーの尾を模した剣、ドラグセイバーが綺麗に回転しながら召喚される。

それを手に取り、既に右手に持ったグロリアスとともに二刀流の構えを取った。

「行くぞっ！」

ギヤオオ、と一層雄雄しく咆哮し、ドラグレッダーが頭を低く構え、まだ飛行魔法を使いこなせない龍也をその背に乗せる。そのまま龍也は2本の剣を構え、青年に突撃した。

「くっ！ アルテミア、レイピアモード！」

『ええ。レイピアモード』

長く伸びていた鞭が収縮し、ぴん、と張る。それは、まるで細身の剣のようであった。

「はっ！」

グロリアスとドラグセイバーを構え、2本を交差させるように両袈裟より振り払う。

青年はその斬撃をレイピアとなった鞭の刀身を利用して、受けるのではなく流すことでやり過ごした。

そしてすかさず、神速の突きを無数に繰り出す！

「ぐうっ……………！」

直撃を受け、龍也は吹き飛ばされそうになるも、なんとかドラグレッダーから振り落とされぬよう踏みとどまる。

突きを主体とし、敵の攻撃は風のように受け流す。それこそが、レ

イピア使いとしてのセオリーであり、またフェンシングの技法でもある。剣技という剣技のド素人である龍也にとって、剣で切りあうには明らかに不利であると言えた。

龍也はドラグセイバーを放り投げると、新たにデッキからカードを引き抜いて、ドラグバイザーに装填した。

『STRIKE VENT』

天空より、ドラグレッダーの頭部を模した籠手が召喚され、龍也の右手に収まる。

龍也はそれを腰だめに構え、気合一発、突き出した。

「はあああああああつ！」

それと同時にドラグレッダーがその獰猛なる口を開き、瞬間、超威力の火炎放射が放たれる！

「ぐっ、クロスファイア、シュート！」

頭上にまだ残っていた魔力球を飛ばし、火炎放射を迎撃する。

しかし、それだけでは威力を殺しきれず、直撃する。

『プロテクション！』

鞭、アルテミシアが咄嗟にシールドを張り受け止めるが、それでも勢いは止まらず青年は吹き飛ばされた。

「ぐっ、あああああああああああつ！」

最後の最後でとってあった最後の魔力球が寸前で放たれ、技を放った直後で隙のあった龍也の胸を薙ぐ。

「がはっ……………！」

今度こそバランスを崩し、ドラグレッダーから落下する。同時に龍騎への変身も解け、ドラグレッダーは消滅した。

「ぐ、うう……………」

腹に受けたダメージと、落下の衝撃に呻く。

敵側を見ると、青年は既に立ち上がりかけていた。

「くっ、グロリ、アス……………。決め手がない。何か、砲撃のようなものはないのか？」

ライダーやガンダムの力は強力だが、この世界の砲撃に比べると攻撃力や汎用性の面で見劣りする。

まあ、使いこなせるほどの腕がまだ龍也にないことも影響しているのだが。

そして、決め手不足は青年側もそう判断したようで、周囲に散らばった魔力を集束し始めていた。

おそらくは、集束砲。それも、相当大きいものが来る。

それを感じ取ってか、主の問いに、グロリアスは極めて簡潔に答え

た。

『魔法、魔術の類があります。想像してください。私がそれを魔力に乗せ、術式を構成します』

なんと優秀なデバイスだろうか、と改めて感じる。

立ち上がり、想像するべく目を閉じた。

想像するは、かの超砲撃。

「これで終わりにしてやる！」

「それはこっちの台詞だ！」

互いに魔力を溜め続ける。

それは、2人の間に凶らずも一時の静寂をもたらした。

「来よ、古の魔王の力。大気を震わせ、全てを薙ぎ払う凶刃と化せ！」

龍也の詠唱とともに、彼の背後に身の丈よりも大きい巨大な魔法陣が出現する。

そして青年の目の前にも、魔力チャージが完了したことを示す巨大な光の円環が出現していた。

準備は、整った。



「うああああああああああつ！」

爆心地の近くにいた龍也はその爆風に吹き飛ばされる。青年も、あまりの衝撃に必死にその場に踏みとどまっている。

やがて、煙が晴れると、そこにはボロボロになって倒れた龍也と、傷を負いながらも未だ立っている青年の姿が残った。

「く……………そ……………」

今度こそ終わったか、と呟く青年が近づいてくるのを感じ、逃げようとするもあまりのダメージに体が動かない。なんとか力を振り絞り、立ち上がるうとするも膝をついてしまう。

すぐ近くまで近づいてきた青年が、鞭に戻った得物を振り上げる。

死を覚悟した。その時。

《待ってください》

悠然とデスクに座る金の長髪をした女性の声が、モニター越しに響き渡った。

## 第2話「対峙する創造者」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「漸くUP出来ました、第2話！ 神崎です」

リオス「早く僕の方も進めてね。どうも、リオスです」

神崎「氷翼の天使は明日になるかな」

リオス「期待して待つてよう」

神崎「さて、今回は漸くかけました、バトルシーン！」

リオス「ラモン先生ってこんなに強い設定だったっけ？」

神崎「作者権限で強くなっていた。それほど特筆すべき強力技は持ち合わせていないけど、経験と魔力量、希少技能レアスキルで敵を圧倒するナイスなキャラとなっております」

リオス「なるほど。まあそうじゃないと、あれほどチート能力を持った作者さんには勝てないか」

神崎「まあね。でもそれだけではちょっとあれなので、僕も弱体化してます。ていうか、突然飛ばされといて魔法の使い方とか知ったり、戦闘慣れしてるのって可笑しいと思うんだ」

リオス「まあ、それは確かに」

神崎「だからこそ、今回は敢えて魔法は使わず、ガンダムとライダーを主に組みました。最後のスーパーダオスレーザーは仕方なく出したけど」

リオス「なるほどね。では、本日の感謝コーナー！」

神崎「ラモン先生、綾崎先生、水玉先生。感想ありがとうございました」

リオス「はい、では次、本日の設定のコーナー。でも、今日はほとんど版權設定の説明だよね？」

神崎「うん。他は戦闘描写で粗方解るだろうし。というわけで、スタート」

NAME：ガンダムエクシア

登場作品：機動戦士ガンダム00

種別：ガンダム（メカ）

概要：元作品では、主人公刹那「F」セイエイの駆る青きガンダム。接近戦を主眼に置いて開発されており、開発コードはセブンスード。その名のとおり、大剣、ブレード、短剣、ビームサーベル2本、ダガーの計7本の剣を装備している。また、GNドライブと呼ばれる、GN粒子を発生させる半永久機関により、飛行はもとより、半永久的に活動が可能。本作品では、魔力によりGN粒子を発生させ戦闘する。

NAME：仮面ライダー龍騎

登場作品：仮面ライダー龍騎

種別：仮面ライダー

概要：仮面ライダー龍騎の世界に存在する13人のライダーの1人。原作では見習いジャーナリストであり主人公、城戸真司が変身する。仮面ライダーとしては初の、カードを用いて戦う作品である。契約モンスターは紅き無双龍、ドラグレッダー。

NAME：スーパーダオスレーザー

登場作品：ティルズオブヴェスペリア

種別：技

概要：Wii、及びPSS3ソフト、ティルズオブヴェスペリアにてある一定の条件を満たすと登場するボス、ダオスの使用する秘奥義（最終必殺技）。背後に光の円環が出現し、左右上下にある4つの輪から砲撃が発射される、超威力の技。ダオス自身はヴェスペリアオリジナルではなく、初代ティルズであるファンタジアからの特別出演である。

神崎「以上！ 大雑把ですが、説明です」

リオス「もっと詳しく知りたい方は、実際に見るか、Wikipediaを参考にしてね！ それでは次回、『創造者、聖王教会へ』も、」

神崎「ご期待下さい！」

### 第3話「創造者、聖王教会へ」

《待つてください》

モニターで現れた人物の声に、今まさに鞭アルテミアを振り下ろさんとする青年の動きがぴたりと止まった。

あと少し止めるのが遅かったら、びしり、といていたかもしれない。

「騎士カリム。どうして止めるのですか？ アンノウンは排除する命令だったはずですが」

当然のように言う青年だが、モニターに移る金の髪をした麗しい女性、カリムは声を荒げる。

《よく見なさい！ その方こそ私達が探していた、神崎龍也さんですよ！》

「ふ〜ん、へえ。この人がねえ……………つて、ええええええええええええええええー！」

青年が、とんでもない声量で驚きの叫びを上げる。

少々大袈裟すぎやしないか？ とも思ったが、青年にとってはそうでもなかったらしい。むしろ、驚き足りない様子だ。

《え〜〜〜っ、て……………まさか、忘れていたとは言いませんよね、ラモン？》

ラモン、と呼ばれた青年は、カリムの横からモニターに割り込んできたピンクのおかつば髪の女性　　おそらく、この人がシスターシャツ八だろう　　のじとつとした視線に、思わず「うっ……………」と言葉を詰まらせる。どうやら、凶星だったらしい。

「そ、そりゃ、忘れるわけじゃないか！　嫌だなあ、シャツ八さんは！…」

白々しくわざとらしい台詞を吐く青年ラモン。それが精一杯の虚勢であることは、誰の目にも明らかだった。

《……………まあ、いいでしょう。お久しぶりですね、龍也。元気にしていましたか？》

「は、はあ……………」

勿論、龍也は先ほどこの世界に来たばかり。

カリムとの面識どころか、この世界に知り合いなど一人もいないはずである。

しかし、忘れてはならない。この世界が、既に改変された世界であることを。それならば、介入する創造者の過去が捏造されていたとしても、不思議な話ではない。

そんな風に状況を勝手に解釈し、龍也は話に耳を傾ける。

《会って話したいのですが。教会にいらしてくれませんか？　案内はそちらの方がして下さいますので。よろしいですね、ラモン？》

「了解しました」

先ほどの不甲斐無さから打って変わり、きりつとした表情で敬礼するラモンに満足そうに頷くと、カリムは龍也に微笑みかけた。

《では龍也、お待ちしていますよ》

「は、はい」

緊張した面持ちの龍也の目の前で、モニターは消えた。

「さて、と……………」

モニターが消えるのを見計らったように、ラモンは龍也に向き直る。

「さっきはすまなかった。俺はラモン。ラモン＝ミストレスだ」

「僕は龍也。神崎龍也」

「そっか。じゃあ早速だけど、単刀直入に訊くぞ？」

「はい……………」

急に真剣な表情になるラモンに、自然と龍也も居住まいを正す。

「君、創造者だろ？」

「……………！！？」

龍也は驚愕した。

原作世界の住人であれば、たとえ世界にイレギュラーが入り込んだとしても、それをそうと認識する知識がないため、それはあくまでも『この世界の中の存在』として捉えられる。

つまり、もしこの男が原作世界の住人であるならば、創造者のことを知っているはずがない。となれば、この男がそれを知る手段は当事者か、龍也や他に創造者のことを知っている人物がこの男に情報を提供することではかありえない。

「やっぱりな」

「あなた、一体……………!？」

「おっと、そう警戒しないでくれ。俺も創造者だ。よろしくな」

「あなたも？」

「そう。こんな吸血鬼みたいに紅い目だが、元はバリバリの日本人だ。今は、ペンネームから名前を取って、ラモン＝ミストレスって名乗ってるけどな」

そう言って、ラモンは自分の目を指差した。  
真紅の瞳が、真っ直ぐに龍也を捉えている。

「そ、そっか。僕も、元々は日本人だったんだ。今は、あんたと同じ様にペンネームからとって、神崎龍也って名乗ってる」

「ふむ、神崎君ね。……………あれ？ 確か、ネットで神崎って名乗ってた人がいたような……………気のせいかな？」

「あ、僕もそれ思った！ ラモンって人、ネットで見たことある……！」

2人は顔を見合わせた。

こんな偶然があるのだろうか？

確かに、門矢士は物語を描く人間達を集め、創造者としてこの世界に送り込んだ。

だが、膨大な数の世界中の作家から、つながりのある2人が選ばれるなど、それこそ天文学的な確率だろう。

だからこそ、確かめずにはいられなかった。

「もしかして、神崎さんか!？」

「ラモン先生!？」

答えは、もはや言うまでもなかった。

数十分後。

龍也はラモンに連れられ、壮麗な建造物の目の前にいた。

これこそ、全世界に誇る聖王教会である。道中、龍也はラモンから創造者、とりわけ、龍也のこの世界における『役割』について説明を受けた。

創造者には、この世界で生きていくのに不自由のないように、様々なものが与えられる。

その1つが、記憶なのだという。原作世界に接し、原作世界で生きた記憶だ。

しかしこの記憶、残念なことに創造者自身には与えられない。元々龍也らのいた現実世界は記憶の制御が難しく、記憶を無理に与えようとすれば、その人間は過度の情報受容に対処できれず死亡してしまう。

それこそ、どこぞの禁書目録のように。創造者によって変化する年齢は様々だが、ほとんどは最低でも10代後半である。それほど記憶を一度に内包するのは危険だ。

しかし、この原作世界のように『作られた世界』であれば話は別だ。世界の記憶そのものを操作することで、あたかもそうだった事実が

あつたかのように改竄できる。

もはや、次元神の如き所業。門矢士の力もここまでになったかと、我が身の行く末も他所に感心してしまう。

いろいろと突っ込みたいところがないわけじゃないが、兎にも角にも、こういった理由から、創造者の過去は原作キャラクターの記憶に残っているということらしい。ただ、細かい記憶までは持ち合わせておらず、精々『その人物が何をしていた、どんな人物なのか』というレベルの記憶であるため、「こんなこともあつたね」などという会話になることはまずないらしい。つくづく都合主義だ。

そして、ここからが本題。

どうやら龍也の位置づけは、カリムの幼馴染。

昔から影より彼女を支え、今の立場になってからは側近としてもに歩むも、数年前の任務中急に消息を断ってそれっきり、という。

なんとも、大層な役回りである。

ちなみにラモンはというと、シスターシャツハの友人兼同僚という位置づけで、彼女とともにカリムの直属の部下、ということだった。

そんなこんなで建物の中を歩いていくと、1つのドアに行き当たった。

ラモンはそれをこんこん、と軽くノックして、失礼します、と言って開けた。

中では3人の女性が、窓際に設置されたテーブルを囲っていた。

1人は、モニターで見た金の長髪をしたお淑やかな女性、カリム  
グラシア。

その隣に、ピンクおかつぱ髪のシスター、シャツハ「又エラ。

そして、シャツハの反対側、シャツハとともにカリムを挟むように、  
茶髪のショートカットの女性が座っていた。

「お帰りなさい、ラモン」

「ただいま、シャツハ。騎士カリム。神崎龍也をお連れしました」

「ご苦労様。久しぶりね、龍也」

「あ、どうも……………」

微笑むカリムに、照れたように頭を掻く。

すると、

「へえ〜、この子がカリムが言ってた子かあ。なかなか可愛いやん」

と、茶髪のショートカットの女性のカリムをからかう。

「ちょっとはやて。そんなじゃありません!」

明らかに慌てるカリム。

その様子に苦笑しながら、カリムの台詞から、この茶髪の女性こそ  
が、かの八神はやてなのだと理解した。

「神崎龍也です。宜しく申し上げます」

設定どおりならそれほど歳は離れていないはずだが、一応敬語を使い、手を差し出す。

「ご丁寧にも。八神はやてといいます。よろしゅう」

そう言って握手を交わすと、

「ほな、邪魔しちゃ悪いし、私はこれで帰るわ。カリム、龍也君と仲良うするんやで〜〜」

「だから！ そんなんじゃありませんってば！！」

顔を紅くしてそう反論するカリムを無視し、はやてはにんまりとした笑みを浮かべながら去っていった。

「……………嵐のようだったね」

「……………ああ」

去っていくはやての後姿を眺め、龍也とラモンの呆れたような声が部屋に響いた。

一方場所は移り、ミッドチルダ森林部。

そこでは、1人の青年が必死に疾走していた。

時々振り返っているところを見ると、何かから逃げているらしい。

やがて、青年が逃げる『何か』が、樹をなぎ倒しながら姿を現した。

青と白のカラーリングに特徴的な頭部のアンテナとカメラアイ。そして背中には、コーン型の機関が突出しており、そこから緑色の光の粒子が噴出している。

青年ラモンとの戦いで、龍也が変身したガンダムエクシアである。

青年は振り返り、ラモンと同じ真紅の瞳でエクシアを睨み付ける。

手に持った刀を斜に構え、魔力を込めて振り上げた！

「蒼破刃！」

青い軌跡がごう、と空気を切りエクシアに直撃する。

しかし、それでもエクシアの巨体に傷をつけることは叶わない。

「ちつくしょう！ 何でいきなりガンダムに襲われなきゃいけないんだよ！ おかしいだろ！」

青年は再び一目散に逃げ出した。

後ろからエクシアがガンモードのGNソードを向け、ライフルを連射してくる。

桃色の閃光が着弾するたび、地面には幾つもの小さなクレーターが出来ていった。

『主、後方よりバルカン接近！』

「んだとっ！？ ぐおおおおお！！」

既にユニゾン済みの融合騎からの警告を受け、すぐさま回避行動に移る。

すぐ横、先ほどまで青年がいた場所に幾つもの細かな桃色のエネルギー弾が着弾、草地を一瞬にして荒地に変える。

「おいおいおい、洒落になんねえな！ 大体何だよ！ 異世界に来たと思ったらいきなりこれか！？ ついてないにもほどがあるだろうよ、うわっと！？」

また一つ、ライフルの閃光がすぐ近くの空間を掠める。

『このまま逃げていても埒が開きません。反撃に出しましょう!』

「どっやって!?!」

『どっやって、です!』

ユニゾンしていた融合騎が、突然ユニゾンを解除した。

髪は緑の蛍光色、真紅のバリアジャケットのようなものを身に纏う淑やかな女性は、青年とエクシアの前に割り込む。

そして、右手を突き出すとそこに魔法陣が現れ、エクシアの周囲に円環を出現させ、縛り上げた。そこからさらにロープのように光が周囲の樹に伸び、しっかりと固定する。

「主っ! 時間がありません。攻撃を!」

「よっしゃ、でかした!」

青年は刀を構え、足元に魔法陣を出現させる。

「雷雲よ! 我が刃となりて敵を貫け! サンダーブレード!」

頭上に振り上げた刀の先に巨大な雷の刃が出現し、振り下ろすと同時にエクシアへ飛んでいく。

バインドで縛られたエクシアはそれを避けることが出来ず、直撃した。

密度の濃いエネルギー体と化した剣本体が機体を貫き、電撃が機体

中を駆け巡り、システムをダウンさせる。

「うっし、決まった！」

動かなくなった巨体を確認すると、ガッツポーズする青年。

「やりましたね、主」

それを見て、バインドを展開していた融合騎も嬉しそうに寄ってくる。

だが。

「へえ、あれを倒すんだ。自分で操縦しなくて正解だったね」

「なっ……………！」

突然聞こえてきた声に身構えると、そこには青年が1人、浮いていた。

髪は茶の長髪を後ろでポニーテールとしてまとめ、翡翠色の瞳がこちらを面白いものを見るように見下ろしている。

「誰だ、お前は！」

「バグに名乗る名前はないよ。さ、無駄話はやめて、そろそろ始めようか」

「ちっ、仕方ねえ。クロム！」

「了解です、主！」

「ユニゾン、イン！」

青年と女性の姿が重なり、ユニゾンが完了する。

「へえ、融合騎だったんだ。じゃ、行きますか」

そう言って、相手もまたサブマシンガン型のデバイスを構えた。

「俺の名は、天道隼人」

「僕は、黒野 修斗」

「いざ、参る！」

重なる声とともに、2人は激突した。

### 第3話「創造者、聖王教会へ」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「さて、そんなわけで最新話でした〜！」

リオス「おかしいよね？　なんで綾崎先生いきなり追われてるの？  
しかも笑う男先生なんて何アレ。完全に敵役じゃん」

神崎「すみませんでした〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
〜！！！」

リオス「しかも目立たないけど、ラモン先生だって何、あのポケキ  
ヤラ！　なんかハヤト君に似てるよ!？」

神崎「すみません！　ほんつとうにもうしわけない！　なんか書いてたらいつの間にかあんななってます！　やはりハヤト君のイメージが強いのかな………?」

リオス「いいのかな、そんなんで。じゃ、感想感謝のコーナー」

神崎「水玉先生、ラモン先生。ありがとうございました。さて、ここで1つ訂正があります。思惑があり7人の創造者と名づけ、スタートした本作品ですが、設定の変更とともにタイトルを見直す必要に迫られたため、今回より8人の創造者へ変更します。大変失礼致しました」

リオス「引き続き、本企画を宜しく願います」

神崎「それでは！ 次回、『創造者、機動六課へ』に、  
リオス」ご期待下さい！」

#### 第4話「創造者、激突」

2人の戦いは、魔力弾の撃ち合いにより幕を開けた。

修斗はマシンガンから強烈な連射を繰り出し牽制する。

対して隼人は、

「フォースフィールド！」

前面に展開するバリアを展開しそれを防ぐと、すかさず反撃を開始する。

「デルタレイ！」

雷球が三角形を描く位置を保ったまま回転し、修斗に真っ直ぐに襲い掛かる。修斗はそれにも慌てることなく、マシンガンの連射で対応する。

無数に放たれた微小な魔力弾がデルタレイの雷球に次々と直撃し、爆発とともに霧散させる。

「くっ………まだまだあ！」

隼人は一気に接近するべく、雷の魔力変換を利用して雷化し肉迫する！

「……………！」

虚をつかれた修斗はサブマシンガンで威嚇しつつ、代わりにマシンガンを持っていない方の手を前に突き出し、唱えた。

「我請うは創造の力。出でよ錬鉄！」

掌の先に光が宿り、徐々に収束し1振りの剣の形を模る。

それは、歴代ガンダムが使ってきた由緒正しき格闘武器、ビームサーベルだった。

「何っ！」

雷化して光速で移動していた隼人もまた、突然の出来事に驚愕で彩られる。

「ちっ、雷神剣！」

「はああっ！」

雷を纏った隼人の剣と、ビームサーベルがぶつかり合い、エネルギー同士が大きなスパークを起こして辺りに閃光を迸らせる。

少しの間鏢迫り合いを続けていた両者だが、修斗が隼人の腹を蹴り飛ばし、無理矢理距離をとった。

「がはっ……………！」

肺から空気が吐き出され、痛みに苦悶の表情を浮かべるが、またすぐに体勢を立て直し、綺麗に地面に着地する。

「驚いたな。まさか僕に近接武器を使わせるとは。褒めてあげるよ」  
「ちつくしょう……………」

隼人は毒づいた。

一見すると、彼の武装はあのマシンガン型のデバイス一機のみ。

しかしそのマシンガンの攻撃を掻い潜るのは至難の技で、もしそれが出来たとしても、今度はビームサーベルの斬撃が待ち構えている。

そして、あのビームサーベルを出したのはおそらく何らかの希少技能<sup>キル</sup>。いくら初見でも、あれが普通じゃないことは感覚でわかる。おそらく先ほどのエクシアも、なんらかの力により作られたに違いはない。でなければ、この世界に存在しないはずのあの兵器を、あそこまで完璧に再現できるはずがない。

(で、何よりも……………)

隼人はちら、と、先ほどエクシアの攻撃によって抉られた大地と、マシンガンの魔力弾が掠めた木々を見やる。

(あの武器、殺傷設定になってやがる……………！)

デバイスには相手への致命的な傷害を自動で回避する、非殺傷設定と呼ばれる機能が付属している。それはこの世界を管理する組織、管理局の方針にも関係しているのだが、ここで語ることはないため割愛する。

一方、それとは逆に殺傷設定、即ち相手へ問答無用の殺しの一撃を

与えることが可能となる機能も存在する。その場合の威力は非殺傷設定のそれを上回り、急所に当たれば問答無用で命を奪う凶器と化す。

エクシア、マシンガン、そして雷神剣を受けとめたビームサーベル。修斗が使っている武器はどれも、明らかに殺傷設定の威力を持っていた。

「おい、てめえ！ 管理局の魔導師じゃねえのか！ なんで殺傷設定の魔法なんか使ってやがる！？ 誰の指示だ！」

そう怒鳴り散らすと、修斗ははぁ、と溜め息をついた。

「君、そんなこと言ってるの？ だから……………」

修斗の手のマシンガンが、再び隼人を狙う。

「だから、弱いんだよ」

「何っ……………！」

放たれる無数の光弾。

隼人は急ごしらえで魔力を練り、防壁の術を発動する。

「フォースフィールドッ！」

隼人の周囲を覆うようにドーム状の半透明な光の障壁が出現し、魔力弾を蹴散らす。

「へえ、堅い防御持つてるんだね。でも、いつまでもつかない？」

フォースフィールドの硬さに舌を巻きつつ、修斗はそのままマシンガンを連射した。

最初は魔力弾をはじめていた障壁が、殺傷設定の魔力弾の威力に、徐々に罅割れ始める。

「ぐっ……………」

「それ、壊れちゃえ！」

無邪気なる修斗の声とともにフォースフィールドは割れ、射殺す威力を秘めた凶弾が隼人を襲う！

「ぐ……………あああああああああああつ！」

隼人は致命傷こそ負わなかったものの、四肢を魔力弾が掠めたらしく、血を流して地に伏す。

「…あ……………ああ……………」

「割と呆気なかったね」

痛みに悶絶する隼人の下へ、ゆっくりと修斗が近づいてくる。

「てめえ……………」

「うん？」

「どうして……どうして殺傷設定なんかを！」

隼人は殺傷設定を平然と使う修斗に憤りを込めた目で睨み付ける。

それに対し修斗は、

「それがどうしたの？」

「なっ……………！」

「皆甘いんだよ。非殺傷だの何だの言ってるから犯人を取り逃がし、被害をもっと拡大させる場合だって少なくない。第一、敵に情けを掛ける必要がどこにあるの？ 非殺傷設定が役立つ場面なんて、精々人質が取られた場合くらいのものじゃないか」

「そ、それは……………」

修斗の言葉に、隼人は何も言えなかった。

実際、修斗が言っていることに間違いはない。非殺傷で倒していたと思っていた敵が突然動き出し、再び野に放たれる。そういった事態に必ずしもならないとは言えない。

だが。

「でもっ……………」

納得することは、出来なかった。

「でも。それでも俺は、人を殺す道具なんかを信じることは出来な

い！ こいつらは俺の仲間だ！ 俺はそいつらを、人殺しの道具に  
なんてしたくはない！」

『主……………』

弱弱しくも力強く立ち上がる隼人の決意に、彼の2つのデバイスは  
感動の声を漏らした。

彼の言葉で、にんげん デバイス 喩え戦士と武器であっても、心と心で繋がっているこ  
とが実感できたから。

「ふん。強がっちゃって、妙なバグだな。まあいいさ。僕がこの手  
で葬ればいい話だからねえ！」

そっぴいながら放たれるマシンガンをかわし、隼人は素早く指示を  
飛ばした。

「クロム、ユニゾン解除！」

『ええっ！？ しかし、それでは主が！』

「いいから聞け！ ユニゾンアウト後、俺の前に出て全力で魔力防  
壁！ やれるな？」

『……………はい！』

クロムがユニゾンを解き、隼人の目の前に現れ、魔力障壁を張る。

マシンガンがそれに阻まれていた隙を利用して、隼人は溜めに入っ  
た。

狙うは、マシンガンの銃弾ごと一瞬で蹴散らす、極大砲撃。

「くそっ！ あんな防壁、破ってみせろ！」

『Yes.』

修斗が吠えると彼のマシンガン型デバイスのコアが発光し、薬莖が排出される。

次の瞬間、マシンガンの放つ魔力弾が一回り強化された。

「ぐうつ……………まだですか、主!？」

「もうちょっとだ!」

苦悶の表情を浮かべるクロムに、そう叫び返す。

もう少し、もう少しだけでもってくれと祈りつつ。

「これで終わりだっ！ ベレッタ、アサルトモード！」

『All right, assault mode.』

マシンガンがアサルトライフルに変形し、その銃口に魔力が集束する。

「集束砲!? 主っ！」

「もうちょっとだけ……………よし、チャージ完了！ クロム、どけ！」



「はあ、はあ……………」

気力と体力を限界まで振り絞った一撃を放った後で、肩で息をしつつ隼人は修斗の様子を伺う。

激しい砲撃の衝突による影響で、辺りは土煙が覆い隠している。

やがて、土煙が晴れると。

「なっ……………」

バリアジャケットをぼろぼろにしてはいるが、未だに健在な修斗の姿があった。

「馬鹿な……………あれをくらって……………!？」

驚愕する隼人を他所に、修斗は首をバキボキと鳴らし、

「いや〜、参ったな。まさかここまでやるとは思わなかった。こいつがなかったらやられてたよ」

修斗はそう言うと、目の前に展開していた半球状の障壁を解除する。

「アルテミスの傘。うん、さすがに要塞防衛用の兵装は硬さが違うね」

「じよ、冗談だろ!？ あれを……………あれを防いだってのか!？」

フルパワーでないとはいえ、あれは自らの持ちえる最大砲撃。それを防ぐなど、並の防御力ではあるまい。

実際はアルテミスの傘だけでなく、ゲシュマイディツヒパンツァーによる砲撃の屈曲、ヤタノカガミの反射、ラミネート装甲を展開してのダメージの軽減など、防御兵装をフル稼働して漸く防ぎきっていた。それほど出鱈目な威力だったのだ。

面ではポーカーフェイスを保っているが、内心では修斗は安堵で一杯だった。

「あっ……………」

次の瞬間、力を使い果たした隼人は地面に倒れこむ。

もはや、立ち上がる気力はおろか、剣を握る体力すら残っていないかった。

「ちく、しょ……………」

「主!」

「さ、あとは君だけだよ……………」

近づきながら、アサルトライフルの銃口を突きつけられる。

「ここまでか。」

思えば短い人生だった。

こんな時でも、驚くほど自分の心は冷静で、事態に冷酷だった。

だが、人生とは時に想像の斜め上に行くことも珍しくないらしい。

「いい加減にせんかあああああああああ！」

「ぐぼあ！」

2つの頭突きが、修斗の腹を直撃した。

事の起こりは数十分前、聖王教会から八神はやてが去っていった頃に遡る。

茶を飲みながら他愛のない話を楽しんでいた4人の前に突如、モーターが1つ浮かび上がる。

《突然の通信お許し下さい、騎士カリム》

「あら、久住様ではありませんか。どうかなさいましたか？」

「どうやら知り合いのようだ。」

紅茶を啜りつつ、龍也はそっと隣のラモンに訊く。

「誰ですか？」

「ああ、どうも六課の設立に協力してる人らしいよ。」

ふうん、と曖昧な返事を返し、再び会話に耳を傾ける。

《はい。実は、黒野が突然、イレギュラーを見つけた！などと言って飛び出して行ってしまいました。……すみません、止められませんでした》

「解りました。こちらから誰か送れば宜しいですね？」

カリムはそう言って溜め息を1つ吐く。

対応が早いのは慣れているから、溜め息はそれにいつも手を焼いているからだろうか。

なるほど、彼女も苦勞しているらしい。

《よろしくお願いします。八神二佐には私のほうから伝えておきましたので。私もすぐ現場に急行します》

「了解です」

《それでは》

モニターの中の青年が一礼したところで、モニターは消えた。

「さてと、聞いた通りよ。龍也。帰って早々で悪いのだけど、出ていただけるかしら？」

「解りました」

イレギュラーということは、創造者である可能性が高い。迷わず返事を返すと、満足そうに、それでいてどこか寂しそうな顔をして、

「ありがとう。座標はグロリアスに入れておくから。宜しくね」

「はい。では」

敬礼し、龍也は部屋をあとにした。

そうして外へ出て、あることに気付く。

「僕、飛べないじゃん……………」

龍也はまだ、飛行魔法の使い方を知らない。

そうなれば当然飛ぶことは出来ないのだが、飛ばないければ目的の座標までは少し時間が掛かる。

ガンダムなど飛行できる武装のついているものに変身すれば飛ぶことは可能だが、まだ慣れていないのだから危険だ。

と、そこで、あることに気がついた。

「そうだ！ グロリアス、セットアップ！」

『All right・Stand by ready・set up・（了解しました。準備完了、構築します）』

騎士甲冑を纏い、紺碧のバトルブッカーからカードを抜き取る。

『どつなさるおつもりで？』

「決まってるさ。空から行けないなら、地面から高速で移動すればいい！」

龍也はカードをナイトドライバーに装填する。

『KAMEN RIDE……… KABUTO!』

龍也の腰にベルトが現れ、次元の壁を越えて紅の機械甲虫が滑らかな軌跡を描いて飛来し龍也の手中に収まる。

「変身！」

『HENSHIN』

機械甲虫、カブトゼクターをベルトのバックルに装填すると、ベルトから黒のライダースーツと銀の厚い装甲が形成され龍也の姿を覆い隠していく。

仮面ライダーカブト、マスクドフォーム。

だが、これで終わりではない。

「キャストオフ！」

『CAST OFF』

カプトゼクターの角部分、ゼクターホーンを反対側へ倒すと、銀の装甲が弾けとび、下向きになっていた大きく特徴的な一本角が上へゆっくりと上がっていった位置に収まる。

『CHANGE………BEE TLE!』

カプトムシを模した紅の仮面の戦士。

仮面ライダーカプト、ライダーフォームだ。

「クロックアップ！」

『CLOCK UP!』

ベルトの腰部分にあるプッシュボタンを押すことで、人の目で目視することは到底不可能なほどの超高速を可能にするクロックアップを発動し、一気に目的地へ向かって移動を開始する。

紅の戦士は一瞬で姿を消し、そのあとにはただ一陣の風のみが残された。

そうして龍也が高速で地上を移動していると、

「あれは………はやてか」

遠目からしか見えないが、騎士甲冑を身に纏ったはやてが空高くを

飛行しているのが見える。

おそらく、帰る途中で知らせを聞き、慌ててとんできたのだろう。

『CLOCK OVER』

「おう？」

と、丁度クロックアップの限界時間が来た。

惜しかったが、結構進んできたらしくもう少しで現在地なので、よしとすることにした。

龍也はカブトへの変身を解くと、走りながら高速で移動するはやてへ向かって叫ぶ。

「おお~~~~い、八神二佐~~~~!!」

すると、向こうもこちらに気付いたらしく、

「その声、もしかしてさっき会った人か!? 確か、龍也君」

「記憶力いいな……………」

苦笑していると、速度を落としてはやてがこちらへ向かって降りてきた。

「どづしたん？」

「ああ、おそらく八神二佐と同じ件です」

「ほんまか。じゃあ、もしかして教会から来る増援って」

「はい、僕です」

「そつかあ、頼もしいわ。カリムが鼻肩にしてたんや。きっと強いんやろ？」

「は、はい。たぶん」

カリムさん、一体どんなふう僕のこと話してたんだ？

そんな疑問が頭を過ぎるが、取り敢えずはそれ以上考えるのはやめておく。

「じゃ、頼りにしとるよ。もう座標はもうこの先やからな」

「はい！」

頷き返し、龍也ははやてとともに慎重に目的地へと近づいていく。

そして、そこには。

「おや、八神二佐。お早い到着で」

先ほどのモニターに映っていた男、久住がいた。

「祐治君か。……………けど、なんで隠れてるん？」

久住がいるのは鬱蒼と茂る茂みの裏。

その彼に背後から話しかけている格好になっているので、龍也とはやてがいるのも茂みの裏側なのだが、その先に一体何があるというのか。

「まあ、見てください」

「どれどれ……………？」

はやてが興味深げに茂みの奥を覗き込む。

そこでは、2人の青年が対峙していた。

片や刀を持ち防戦一方の男で、片やマシンガンでその男を攻め立てている。

「修斗君と……………あともう1人は誰や？」

「解りません。おそらくは、あいつの言っていたイレギュラーかと」

「ふむ……………ていうか、たぶんあの男の子は敵やないな。確かに魔力は半端ないみたいやけど、なんていうか、悪い人特有のオーラがあらへん」

「捜査官としての勘、ですか？」

「ま、そんなとこや。しかし修斗め。まさか問答無用で撃ちまくってるんやないやろな？」

そんなことを言っていると、その間にも謎の男と修斗との戦いは激しさを増し、否応なしに会話が耳に入ってくる。

それを聞いて、はやては確信した。

修斗は、話を聞こうとすらしていない。

おそらくは、ただ魔力の高い存在というだけで襲い掛かったのだらう。

あまり根拠ははっきりしていないが、結果的にはやての勘は全面的に的中していた。

「祐治君……………」

「解ってます。俺もいい加減止めに入らないといけませんね、あれは……………」

何故だろう。

2人から、とてつもなく黒いオーラを感じる。

そして次の瞬間、修斗が男と、ユニゾンデバイスと思われる女性に攻撃を加えようとした瞬間。

「いい加減にせんかあああああああああ!!」

「ぐぼあ!!」

はやてと久住は茂みから飛び出し、修斗の腹に見事な頭突きを決めていた。

一方、密かに突っ込む機会を伺っていた龍也はというと。

「……………あ、しまった」

完全に出遅れていた。

#### 第4話「創造者、激突」(後書き)

〔神の黄昏〕

神崎「内容がタイトルにあてはまらなくなってしまったため、タイトルを変更しました。ここに報告致します」

リオス「今回はなんか面白い展開だったね。これギャグ？ シリアス？」

神崎「両方。前半はよく進んだよ、バトルシーンだったし。後半はギャグにしようとしたつもりだったんだけど……正直微妙だな」

リオス「……………だね」

神崎「まあ次回の最初ら辺で笑う男先生とはやての漫才(?)を出すつもりでいるし、大丈夫かな。本当は今回載せるつもりだったんだけど、書いてたらなんかきりがよくなったのでここで一旦きりました」

リオス「まあ、何はともあれ次回だね」

神崎「そうさ。さて、そろそろいきますか。本日の設定コーナー！」

NAME:ライオットブレイカー

登場作品:魔法少女リリカルなのは 転生した主人公の軌跡

種:技

概要：綾崎先生著の二次創作に登場する技。主人公、影月ハヤト最強の砲撃。その威力は絶大で、全力で撃てば次元震を起こせるほど。そのため、大抵は威力を適度に落とす必要があり、癖のある技。

N A M E：アルテミスの傘

登場作品：機動戦士ガンダムSEED

種：兵装

概要：アルテミスの傘とは通称であり、正確な呼称は光周波防御シールド。アルテミスと呼ばれる宇宙要塞を傘のように覆うためこの呼称がついた。後にザムザザイモビルアーマーのようなMAのビームリフレクターや、ハイペリオンガンダム、ストライクフリーダムガンダム等のビームシールドにその技術が応用され、艦砲をも弾くほどの防御力を発揮した。

N A M E：ゲシュマイティツヒパンツァー

登場作品：機動戦士ガンダムSEED・機動戦士ガンダムSEED

D E S T I N Y

種：兵装

概要：ミラージュコロイド（特殊光学迷彩）技術の応用で、ビームを屈曲させることが出来る力場を発生させる兵装。本作品では、魔力体の進行方向を屈曲させる働きを持つ力場を発生させることができる。

N A M E：ヤタノカガミ

登場作品：機動戦士ガンダムSEED D E S T I N Y

種：装甲

概要：敵のビーム攻撃を弾き、相手に反射する。本作品では、魔力砲撃や魔力弾による攻撃を弾き、敵に反射するフィールドバリアを体表面に展開する。

NAME：ラミネート装甲

登場作品：機動戦士ガンダムSEED・機動戦士ガンダムSEED

DESTINY

種：装甲

概要：受けた熱を拡散することで、ダメージを最小限に抑える特殊装甲。本作品では、当たった魔力を直撃寸前に拡散させてダメージを軽減するフィールドバリアを体表面に展開する。

神崎「今回はこんなところでしょうか」

リオス「なんか、ガンダムSEED多いね」

神崎「ファースト時代の武装出しても良かったんだけど、その時代の防御用武装が思い浮かばなくて……………」

リオス「……………本音は？」

神崎「SEED大好きです、すみません！」

リオス「馬鹿……………」

神崎「ぐはっ、お、親父にもぶたれたこと……………」

リオス「そういうパロはいいから。さて、次回は？」

神崎「次回は、笑う男先生が……………」

リオス「せ、先生が……………」

神崎「これでもかというくらい漫才紛いのことをします」

リオス「うわぁ……………」

神崎「それでは次回、『創造者の憂鬱』に、」

リオス「ご期待下さい!」

神崎「……………最後に。笑う男先生。思いっきり悪人っぽくなりました  
みません」

## 第5話「創造者の憂鬱」

「いい加減にせんかあああああああああ！」

「ぐぼあ！」

2人の頭突きを喰らった黒野は、突然の事態を予測できず吹っ飛んだ。

その様子を、先程まで殺される寸前だった隼人とクロム、そして完全に茂みの影で出遅れていた龍也は啞然として見つめる。

龍也はともかく、隼人とクロムの方は正直、何が起こったのか解っていない様子だ。

「イタタ………いきなり何するんですか………つて八神二佐!?!………に、久住」

「アホ！ ぬわあくにが、何するんですか、や！」

「俺はついでか!?!………まあいい。お前、何やってる？」

「否、だからイレギュラーの討伐を………」

なんだかただならぬ雰囲気を感じ取ってか、黒野は数歩後ずさる。

「何が討伐や。ちゃんと確認したんか？ あれ、隼人君だって気付いとるか？ 思いつきり冤罪や。その辺ちゃんと解つとる？」

それをすかさず、はやてが距離を詰める。

「いえ、だから、それは、その……………」

黒野が後ずさる。

「ほう、この期に及んで言い訳するんか？ いいで、聞いたるから話してみい」

再びはやてがじり寄る。

後はもう、エンドレスである。

しかし、そんな無限ループも唐突に終わりを告げた。

黒野の背中が、硬い樹の幹に辺る。  
行き止まりだ。

「あ……………」

「さあて、たつぷり聞かせてもらおか。なあ、修斗君？　なあに、大丈夫や。痛みは一瞬やからな？」

「そこにいる人に襲い掛かりました！　話は聞いてません！」

涙目でそう暴露する修斗。

正直に話さなければ酷い目に遭う。そう本能が警鐘を鳴らしている。

そして。

「阿呆かあああああああああああ！」

「ぐぼっ！」

気合一発、右ストレート。

それは修斗の腹に見事にクリーンヒットした。

はやての手からは、煙が立ち上っている……… ような気がする。

「問答無用でぶっ放しよってからに！ どうやら、本気で消し炭にしてやるしかないようやな………！」

「わ~~~~っ、待て待て、僕が悪かったから！ だからもう一回は勘弁してくださいお願いしますっ！！！」

もはや、先程まで悪役全開だった青年の面影は微塵も残ってはいない。

そこにいるのは、悪鬼に進化した子狸と、それにへこへここと頭を下げるコミカルな青年の姿だけだ。

「それだけやない。この惨状見てみい！ ここは更地か！ 建築予定地か何かか！？ 勘違いの拳句に環境破壊までしよって！ 誰が始末書書くと思ってんねん！ やっぱり消し炭か！ 消し炭がお好みなんか！？」

「か、勘弁してくれ~~~~！」

と、涙目で辺りを見回すと、先程まで置いてきぼりをくらっていた

他の3人が目に入る。久住ですら、完全に間に入れず静観していた。そこで。

「だ、誰か助けて……………」

と、助けを求めろが。

「自業自得だ、諦めろ」

「すみません。アレを止める自信は僕にはないです……………」

「自分、被害者なんで」

「酷っ!?!」

上から順に、久住、龍也、隼人。

修斗の周りは、四面楚歌だった。

「さあ〜て、親切にもこのはやてさんが地獄に連れてってやるわ。なあに、安心し。金は取らんから」

「行きたくもないのにまさかの有料の可能性が!? 無料でもちっとも嬉しくないよ!」

「問答無用!」

「ひいあああああああああああ—————」

絶叫が、辺りに木霊した。

「ごめんなあ、隼人君。あの馬鹿が失礼なこととしてしてもて……………」

そう言つて、はやてはとりあえず近くの樹の根元に寄りかからせた隼人と呼ばれた青年に謝罪した。

相当ボロボロだったので、龍也が回復魔法をかけている。

後ろの方で伸びている黒いカタマリは……………見ないでおこう。

龍也がそんなことを考えていると、回復魔法が効き始め、みるみる内に傷が塞がっていった。

後は疲労だけだろう。

某超有名RPGゲームの完全回復魔法、ベホマ。

この世界の標準の人間では到底出しえない程の膨大な魔力を使用するが、その癒しの光は対象の傷を完全に癒す。

実のところラモンと戦った後にも一回使用していて、いかに魔力量EXの龍でももうかなりの魔力を消費してしまった。

魔力の操作が拙いために無駄な魔力を消費しているため、こうなるのも自業自得ではあるのだが。こんな状況で敵に襲われたら致命的だろう。

それでも、そこらの一般魔導師よりはよほどいい働きをすることは間違いないが。

「いいや、気にしないでくれ。説明しなかった俺も悪かったから」

「ほら見る！ やっぱあっちがいけな……」

そう言って飛び起きる修斗。

唐突だったためその場にいる誰もが驚いたが、

「やかましいわ！」

「ぶっ！」

はやての鉄拳がすぐさま飛んでいき、大きなたんこぶが出来上がる。

「イタタ……」

「阿呆なこと言うからや」

「ははは……………」

乾いた笑いを零す隼人に再びはやては向き直り、

「すまんなあ、本当」

「いや……………」

隼人は表面上は平静を保ちつつ、内心困惑していた。

先程まで、自分のことをどう説明しようか迷っていたのだが、口ぶりからして彼女は自分のことを知っているようである。

(そして……………)

隼人は、自分とはやてを囲うようにしている他の人間を見回した。

原作では、このような人物たちははやての近くにはいなかったはずである。

原作にも描かれなかった一般局員、という考え方もなくはないが、先程戦った修斗という男はどう考えても一般局員の戦闘能力ではない。

警戒しておいて損はないが、取り敢えずは味方らしいし、自分も怪我は治ったとはいえ手負いの身。隼人は、ここは大人しく従っておくことにした。

「で、隼人君はこれからどうするん？」

「どうするっ たって……………」

隼人は考え込む。

どうするかと言われても、自分はこの世界ではまだ右も左もわからない。

これでは今夜止まるところはおるか、食い扶持さえ満足には確保できないだろう。

「決まってないんか。相変わらずいい加減やなあ」

「ぐふう！」

隼人の心に、会心の一撃。

そんな隼人の様子を知ってか知らずか、はやては落ち込む隼人を他所に考え込む。

「そやなく、私はこれから久住君と修斗君と一緒に帰ってまうし。生憎新しく部屋を取るのは今からじゃもう無理やしなあ……………」

「じゃあ、<sup>ウチ</sup>聖王教会はどうですか？」

「おお、そうしてくれるか？ 悪いな」

「いえ。気にしないで下さい、久住さん」

「え、ええと……………」

なんだか自分のあずかり知らぬところでどんと自分の処遇が決まってきた気がする。

だが、宿が決まるのは正直ありがたい話だ。

「うん？ どうしたの？」

「否、何でもない」

「それじゃ、行こうか。着いてきて」

「あ、ああ」

「それでは八神二佐、皆さん。またお会いしましょう」

「ああ、またな」

そう言つてはやては笑顔で手を振った。

隣で他の2人が興味深げな目でしげしげとこちらを見ているが、今は気にしないことにした。

そうして、龍也に連れられるまま歩くこと数分。

突然、龍也が足を止めた。

「？ どうしたんだ？」

「！ 伏せろっ！」

「え？ うおあっ!?!？」

龍也に突き飛ばされる隼人。

先程まで隼人の頭があった空間を、黒い魔力弾が通り過ぎ、近くの地面に着弾して小さなクレーターを形作る。

「こいつは………攻撃？」

「誰だ!?!？」

龍也が怒鳴りつけた先。

そこには、1人の少女が浮かんでいた。

年齢は12程。

漆黒のマントに身を包み、背には三対の黒い翼を持っている。桃色のロングヘアは、ツインテールにされていた。

「初めましてだね、テトラ。私はルクスリア。七つの大罪の1人。業は色欲」

ルクスリア。聞いたことのない名前だ。

ということとは、イレギュラー。

しかも、いきなり攻撃してきたことから考えるに

。

「バグ、か？」

「それをあなた達に話す必要なんてないよ。でもお……………」

ルクスリアと名乗った少女はこちらを舐めるような視線で見つめると。

「へえ　殺せとか言われてたけどお、結構いい男じゃん！　うん、決めた！　あんた達、捕まえて私のハーレムに加えてあげる」

「悪いけど、むざむざやられるつもりはないよ。隼人君！」

「OK！　やってやるぜ！」

龍也と隼人はデバイスを手にも、構える。

この世界で初のバグとの死闘が、ここに始まった。

## 第6話「創造者、苦境」

ミッドチルダ、とある管理局施設。

そこは現在、炎に包まれていた。

無惨にも崩れた外壁からは、内部の惨状が垣間見える。

倒れた本棚から本が散乱し、机は木っ端微塵に破壊されたただの木片と化している。

しかし、それだけではない。

壁に立てかけられていたと見られる培養器が倒れて粉々に碎け散り、『内容物』共々無惨な姿を晒していた。

そう、ここは管理局の違法施設。

それを聞けば、培養器の内容物など容易に想像がつくだらう。

そんな、もはや廃墟と化した施設の中で唯一、生きて立っている一人の男がいた。

銀の長髪は燃え盛る炎に照らされ赤々とした照り返しを放ち、その身に浴びた返り血に勝るとも劣らないほどの狂気を孕んだ紅き目を持つその男は、何をすることもなく、ただじっと、かつて違法施設だった燃え盛る瓦礫の山を見つめている。

すると。

《黒曜》

突如、黒曜と呼ばれた青年の目の前にモニターが開き、厳格そうな顔をした初老の男性が映し出される。

「何の用だ？」

突然の通信にも全くうろたえず、それでいて少々の苛立ちを含んで、青年はモニターに映る男に眼をやる。

《……その様子だと、既に片付いたようだな》

「はっ。温過ぎんだよ、この連中。違法施設だって言うくれえだから、さぞ俺を楽しませてくれそうなくソヤロー共が集まってんのかと思って来たのに、拍子抜けだぜ」

黒曜はそう愚痴を言い、目の前に横たわる、もはや物言わぬ屍と化した白衣の男を足で小突く。  
まるで、虫けらを虫けらとして扱うように。

《その件だが。もしかしたら、楽しめるかもしれんぞ》

「あん？」

《やつらが……動いたようだ》

その言葉を聞き、黒曜の平坦だった横に伸びる口が、三日月のようにつりあがった。

「ククククク、まさかこうも早いとはな。サンキュー、クソ上司。」

これで少しは楽しめそうだ」

黒曜は高笑いした。

そうか、とだけ相槌を打ちモニターを切る男に背を向け、もう用はないとばかりに。

それはまるで、これからの戦いを楽しむかのように。

無慈悲に、完膚なきまでに敵を叩き潰す。

それに愉悦を感じるように。

「さあ、宴の始まりだア！」

次の瞬間、黒曜の姿が一瞬にしてその場から掻き消える。

そして。狂気の青年が去った後は、ただ燃え盛る火炎が雲が覆いつくす空を赤々と照らしていた。

「先手必勝だ！」

龍也はそう叫び、グロリアスを振りかぶりルクスリアへ肉迫した。

「ラウザルク！」

雷が龍也へ落ち、身体能力が大幅に強化される。

それにより強化された脚力で強く大地を蹴り、一気にルクスリアへと迫る。

一方のルクスリアはそれをかわすこともせず、その様子を余裕の面持ちで笑いながら見つめている。

やがて、グロリアスの刃が直撃コースに迫った時

「えっ!?!」

唐突に、まるで雷を斬るかのように、ルクスリアの姿が揺らぎ、掻き消えた。

「これは一体……………!?!」

目標を見失い、きよろきよろと辺りを見回す。

すると。

「こつちだよ」

無邪気な声が背後から聞こえ、咄嗟にグロリアスを後ろへ振りぬく。キーン、という金属音が聞こえ、ルクスリアの持つ刀とグロリアスの刃とがぶつかり、鏢迫り合いになる。

「へえ、よく反応したね。じゃあ……………」

ルクスリアが、刀を持っていない方の手を振り上げ

「これはどうかな？」

4本の刀が彼女を取り囲むように出現し、その1つ1つが龍也へ切っ先を向け、照準を合わせる。

「……………っ!？」

回避しようとするが、少女の刀を受け止めているおかげでそれが出れない。

この鏢迫り合いをやめた途端、少女が持つ刀での猛追が来る。そんな気がした。

「さあ、これで1人」

あくまでも無邪気に、ルクスリアは振り上げた手を下ろす。

刀が龍也へ突き刺さる、その瞬間

「サンダーブレード！」

右方より雷の刃が迸り、地面に着弾して爆発を引き起こす。

「わっ!？」

「ぐっ……………」

電撃の余波が体に走る。

しかし、おかげで致命傷を受けずに下がることが出来た。

「ごめん、助かった！」

「いいけど、2人でやるうぜ。たぶん、この敵は1人じゃ無理だ」

「そうみたいだね」

顔も見ずに2人はそう言い交わす。

否、見れないのだ。

目の前の、どう見てもまだ13そこらといった風にしか見えない少女は、それほどの力を持っている。

彼女から漂う只ならぬ雰囲気が、そう本能に警鐘を鳴らしている。

だからこそ。

「全力で仕留める！」

「フッフ、元気がいいね。元気がいいのは大好きだよ。でも残念…

……………」

嘲るような笑みを浮かべたままのルクスリアの姿が、再び屋気楼のように揺らいでいく。

そして。

「な、何だこれ!？」

驚愕する、龍也と隼人。

それもそのはず、彼らが目にしている光景は、とてもではないが普通とは言い難いものだった。

2人の周囲を取り囲む、数十人はいるだろうかというルクスリアと、その数倍はあろうかという浮遊する刀。

刀の方は、その全ての切っ先が刃を地の赤に染めようと2人の喉笛を狙って規則正しく並んでいる。

「さあ、幻惑のショーをお楽しみにっ」

そうどこからか聞こえてきたルクスリアの無垢なる声と共に、2人を取り囲む全てが一斉に襲い掛かる!

「ぐっ、うおおおおおおおおおおお!？」

どちらが叫んだかも定かではない絶叫。2人の周囲は一瞬にして、まるで2対多数の戦いをしているような大乱戦の様相を呈していた。

しかし、その実態は。

龍也のグロリアスが迫ってきたルクスリアの一体を捉えると、それは先程と同様塵埃楼のような揺らぎを残して消え去る。

その直後、背後にぞくりとした感触を感じ、咄嗟にグロリアスを振りかぶる。

背後で真っ直ぐに飛んできた刀をグロリアスが弾き、カランという音を立てて刀が地に落ちる。

そして、続けて正面から飛んできた刀2本へ向けて再び刃を振るうが、その2本共が、刃に当たった途端またしても揺らいで消えた。

「これって……………！ 隼人君！」

「ああ、解ってる。こいつら、幻影の中に本物が混じってやがる……………」

背を合わせるようにして、自分たちを取り囲んでいる凶器の群れを睨み付ける。

「こっぴなったら、見分けるか……………」

「出来るのか？」

「任せて！」

そう言い交わし、龍也はバトルブッカーからカードを。隼人はユニゾン済みのクロムに解析を命ずる。

『KAMEN RIDE………KIVA!』

カードを挿入して待つこと数秒。

「よっしゃあつ！ キバって、行くぜーっ！」

という声とともに、人造モンスター、キバット族の末裔である黄色の機械蝙蝠、キバットバット3世（以下、キバット）が飛来して龍也の手に収まる。

そして。

「ガブツ！」

手を噛ませた。

体内で魔力が増幅され、顔にステンドグラスのような紋様が浮かび上がる。

そして、腰には紅き変身ベルト、キバットベルトが現れる。

そのバックル部分へ、キバットを止まり木に止まらせるように装填した。

「変身！」

魔力が波紋のように広がっていき、鎧の姿を形作る。

紅い胸部に這う黒は血管。銀の拘束具カテナは、強すぎる力を抑制する具足。

そして、特徴的な黄色の複眼、ペルソナが発光し、変身の完了を告げる。

仮面ライダーキバ。それが、この姿の名である。

「キバ……………！」

後ろで隼人が呟いているのが聞こえる。

何故知っているのかと問い詰めたくなるのを堪え、キバは腰に常備された笛型のツール、フエツスルの一つを手に取る。

キバはそれを、キバットの口に銜えさせ吹き鳴らさせた。

「ドツガハンマー！」

重厚な笛の音が鳴り響く。

すると、その笛の音に引き寄せられ、どこからか紫の彫像が飛来した。

その彫像はキバの目に前に来ると、展開して1つの大きな槌に変形する。

キバはそれを手に取る。

途端、その腕に鎖が巻かれ、肩当て、胸部の装甲を覆い隠し、紫の重厚な装甲へ塗り替えていく。複眼部分も、紫色に変色していた。

仮面ライダーキバ、ドツガフォーム。パワーと防御力に優れるその

形態の力は果たして、それだけではない。

「ドツガバイト！」

「はっ！」

龍也は槌、ドツガハンマーの柄をバツクルのキバツトに噛ませ、地面に突き立てると、その真の力を解放した。

握る拳のようになっていた槌の先端部分が開く。

そこには、全てを見通すかのような目が1つ、描かれていた。

それは、全てを見通す目。たとえ幻術だろうと、姿を消す光学迷彩であろうと、キバのこの力に捉えられぬものなど存在しない。

ドツガハンマーの目がみている光景が、感覚が、キバの目にシンク口する。

「おい、まだか!？」

後ろで、迫り来る刀の群れを捌き続けている隼人が問う。

ユニゾンでスピードも反応速度も上がっているはずだが、それでも厳しい理由は一撃一撃の重さにある。

1つ1つが、馬鹿みたいに重いのだ。

しかもそれぞれが寸分変わらず心臓や首などの急所を狙ってくるし、本物と区別が付かないほどに精巧な幻術と入り混じっているので、余計に厄介である。

「もうちよつと……………捉えた！」

ドツガハンマーが、肉眼や魔力反応ではほとんど見分けの付かない幻術を見破る。

勿論、一つ一つ蹴散らすつもりはない。

狙うのは　　。

「本体、頂きっ！」

ドツガハンマーを両手に構え、可能な限りの速度で走る。

元々パワーと防御力に重点を置いたドツガフォームは、その代わりに速さが落ちる。

だからこそ、逃げられない内に勝負をつけてしまいたいのだ。

そんなキバの目の前から、刀が襲い掛かる。

(あれは……………本物っ!?)

見破るも、反応が遅れたおかげで直撃する。

大きく火花が上がり、キバは自身の胸へ視線を落とす。

「ええっ!?!」

見て、キバは驚愕した。

このドツガフォームは、パワーと防御力だけなら最高級の強さを誇る形態。

並大抵の力では、傷一つ付けることも出来ない。

だが。

そんなドツガフォームの重厚な装甲へ、刀が突き刺さって煙を上げていた。

「おいおい、冗談じゃないぞ！」

龍也は毒づき、尚も走る。

幸い胸には届いていないようだが、こんなものを通常状態で何発も喰らっては洒落にならない。

ドツガフォームが維持できている今の内に、勝負をつけねばならない。

キバの鎧のそこらじゅうに刀が刺さるのもお構いなしに、ただ我武者羅に本物のルクスリアへと向かってドツガハンマーを振り下ろした！

「うおおおおおおおおおっ！」

キバの咆哮とともに、ルクスリアが僅かに驚きの表情を見せる。

だが、次の瞬間には、それは凶器の笑みに早変わりしていた。

「へえ〜、凄いな。これを見破ったんだ。けど……………」

ルクスリアは両手に刀を顕現させる。

それは、見た目何の変哲もないただの刀。  
その2本を交差させ、

「パワーが足りないね」

ドツガハンマーの重い一撃を、

「う、嘘っ……………!？」

弾き返した。

「くっ……………!？」

体勢を立て直し、再び打撃を試みようとする眼前の敵を見据え、そこで見てしまった。

自分を取り囲むように何十もの  
100にも届きそうな刀  
の光沢が、真っ直ぐに自分を狙っているのを。

「本物出すのしんどいから、いくつかは幻術だよ。でも」

その白い、幾人の血に汚れてきたのか想像もつかない指先を天高く掲げ。

「  
これだけの数、見分けられるかな？  
見分けられたら、  
ハーレム候補に加えてあげる」

「龍也っ！」

遠くで、ユニゾンを解いたクロムとともに刀を迎撃している隼人が、その光景を見て悲鳴を上げる。

「くっ……………！」

バトルブッカーからカードを取り出し、しかしそれを装填し終える前に。

「遅いよ」

どこまでも無邪気な声とともに、その狂気なる指先が、振り下ろされる。

刀が空気を裂く風切り音が、幾重にも木霊した。

## 第6話「創造者、苦境」(後書き)

〔神の黄昏〕

神崎「……………(チーン)」

リオス「ああ、作者さんが物言わぬ屍に……………」

神崎「ならんわー!」

リオス「あ、復活した」

神崎「本編でどうなるうとも、この後書きには元気に登場してみせるさー!」

リオス「まあ、後書き空間だからね。さて、今回はいよいよ出てきたバグとの対戦のわけだけど。強すぎじゃない、こいつ?」

神崎「まあ、水玉先生に投稿いただきましたキャラですからね。いっつもいい感じにチートなキャラを考案してくださいます」

リオス「……………勝てるの?」

神崎「……………サア、ドウデシヨウ?」

リオス「……………頑張ってね」

神崎「善処しよう。さて、今回の感想感謝のコーナー!」

リオス「前回忘れてたからって急遽復活させんでも……………」

神崎「覚えてたら感謝する。それが僕のポリシー」

リオス「忘れてたらしらないのか……………」

神崎「まあてなわけで、久住祐治先生。水玉先生。笑う男先生。感想ありがとうございます。そして次、本日の設定解説のコーナー！」

リオス「では、どうぞ」

NAME：仮面ライダーキバ

登場作品：仮面ライダーキバ

種：仮面ライダー

概要：キバットバット3世の力を借りて変身する、ヴァンパイアをモチーフとしたライダー。3体のアームズモンスターと呼ばれるモンスターを使役し、武器に変形させて戦う。ドッグハンマーもその1つで、フランケン族の末裔である。

神崎「今回はこんなものかな」

リオス「少ないね」

神崎「あまり出さなかったからねえ」

リオス「でも、何気に水玉先生最初に出たね。どうなるの?」

神崎「それはまだ内緒。それでは次回、『異端の創造者』も、」

リオス「ご期待下さい！」

## 第7話「異端の創造者」

「龍也っ！」

隼人の叫びと共に、キバを取り囲む刀が一斉に風を切り、殺到する。

「くっ！」

キバは焦りながらも迅速に、ナイトドライバーへ、カードを装填しようとするが。

「無駄だよ！」

ルクスリアの声があるのとほぼ同時に、凶刃の切っ先が次々と彼がいた空間に勢いよく突き刺さり粉塵を巻き上げる。

「龍也……………！」

「主！ 前です！」

「ちいつ、霸王一閃！」

『Explosion』

刹那から薬莢が排出され、膨大な魔力エネルギーが纏わり付いたそれを縦横に振るう。

それだけで、今まさに彼を貫かんとしていた刀と幻影が碎け散り掻き消える。

「さあて、後は君だけ……………えっ!？」

ルクスリアが何かの気配を感じ、その場から慌てて飛び退く。

次の瞬間、今まで彼女がいた地面に空色の魔力弾が幾重にも着弾し、焦土と化す。

「……………まさか、あの状況でまだ生きてたなんてね。驚きだよ」

そう言っただけに妖艶な笑みを浮かべるルクスリアの視線の先には、漆黒の全身鎧を纏った龍也の姿があった。

「塵気楼の絶対守護領域。咄嗟だったけど、なんとか間に合っ……………  
…っ!」

途端、頭に激痛が走る。

頭がくらくらし、吐き気が込み上げてくる。

塵気楼の絶対守護領域を制御するには類稀なる計算速度と、それに順ずる膨大な量の演算を必要とする。

本来ならばキーボードを叩き機械の高演算能力によりなんとか処理するそれが、どうやらこの能力では脳でその一部を処理する仕組みになっていいるらしい。

つまり、使えば使うほど脳に多大な負担がかかってしまうのである。

加えて、ルクスリアの放った攻撃は大きな破壊力を秘めていたのだ。龍也はあまりの痛みと目眩に耐え切れず、その場で膝を折り、頭を

抱えた。

同時に、蜃気楼への変身も解ける。

蜃気楼の障壁を以ってしても防ぎきれなかった刀の数本が足に、腕に、脇腹に突き刺さり、純白だった騎士甲冑を赤黒く染め上げていた。

「でも、もうボロボロみたいだね。そこで、君の相方が刀の串刺しになるのを見ているといいよ」

そう言い捨て、ルクスリアは標的を隼人へと移したらしく、ゆっくりとした足取りで近づいていく。

「くっ！ クロム、もう一度ユニゾンだ！」

「了解です！ ユニゾンインッ！」

クロムが隼人の中に入ると同時に、数本の刀が3方向から襲い来る！

「しゃらくせえ！」

ユニゾンにより反応速度が上昇している隼人にとって、この程度は大した数ではない。

すぐさま刹那を的確な軌道で振りぬき、3本の刀を叩き落した。

「へえ、やっぱりこの程度じゃ無理なんだ？　じゃあ、これならどうっ？」

ルクスリアが手を挙げる。すると、現れたのは不意打ちとはいえ龍也を一発で下した、刀と幻惑の多重包囲。

「これならさすがの君でも、防ぎきれないんじゃない？」

確かに、隼人の技には直線的な攻撃が多い。

威力は馬鹿みたいに大きいけど、その分多方向への対処には向かない技が多いのだ。

だが、ルクスリアは知らない。

彼には、最後の切り札　彼の能力の下となった人物すら普段は封印している、秘技があることを。

「上等だよ……………」

刹那を下段に構えつつ、隼人は下を向く。

髪影に隠れてその表情を伺い知ることが出来ない。

が、唯一見ることが出来るその口元に浮かんでいたのは、不敵な笑み。

「いいぜ……………全てを破壊してやる！」

振り上げられた刹那が大きく発光する。

そして、次の瞬間　。

「な、何!？」

目の前で起こっている現象に、ルクスリアですら驚きを禁じえない。隼人を取り囲んでいたはずの刀の存在が感じられない。

否、存在しているであろうことは目視している。

だが、刀達の『存在』という点のみに関しては、まるで感じ取るこ  
とが出来ないのだ。

そう。まるでその空間だけが、この世界そのものからすっぱりと切り離されたような、そんな感覚だ。

やがてその空間に取り込まれるようになっていた刀は大きな音を立てながら凍り付いていき。

「さあ……………砕け散れ!」

粉々に砕け散り、灰燼に帰した。

「なんていう魔力……………。フッフ、ちょっとやばいかもね……………」

ルクスリアの幼い頬を冷や汗が伝う。

そんなルクスリアに、隼人は表情も変えず言い放つ。

「お前の敗因は2つある。1つは、最後の詰めで油断していたこと。そしてもう1つは　　俺の仲間を甘く見ていたことだ」

最初はなんのことか、という顔をしていたルクスリア。

だが、背後に気配を感じ、咄嗟に振り返る。

そこには、既に薬莢を排出し終えたグロリアスを振るう、龍也の姿。刀身が全てを凍てつかせる青き輝きを放つ冷気を帯び、真っ直ぐに突き出される！

「氷牙、一閃！」

「やばっ……………」

既に背後で振りかぶっていた龍也の動きに、至近距離で避ける間もなくルクスリアはその斬撃を直接に受けた。

刃がルクスリアの白い肌を切り裂き、冷気が傷口を冷たく凍らせる。

「ああああああああああっ！」

初めて上がった、少女の絶叫。

それは彼女が初めて傷ついた証であり、初めて龍也と隼人が彼女へ一矢報いた証であった。

「ど、どうだ……………！？」

龍也は再び苦しげに膝をついた。

これで生きていられたら、さすがにギリ貧であるこちらが不利だ。

出来れば、これで終わってほしい。

「ふふふふふふふふ………」

不気味な少女の声が、辺りに響く。

その笑い声は少女にとっては歓喜、2人にとっては絶望をもたらす旋律となってこの空間を満たしていく。

そしてふと、唐突にそれは止んだ。

代わりに聞こえてきたのは、彼女の嬉しそうな声音。

「ふふふ。私の刀を受けて、まだ立ち上がるなんてねえ………」

不気味に、そして艶やかに。

痛々しい傷口を覗かせたままのルクスリアに見出せるのは、安堵でもなければ同情でもない。

そう。きっとそれは、畏怖だ。

少女から感じるこの言いようもない感情は、まさしく恐怖そのものに他ならない。

「面白いね、君。名前は？」

「神崎………龍也」

自分でもよく解らない内に、龍也はそう名乗っていた。

「そう。龍也、君は選ばれたの。他ならない、この私に。安心して、まずその戦意を切り落としてから………連れて行ってあげる？」

言われ、ゆっくりと近づいてくるルクスリアに、震える手でグロリアスを構える。

恐怖だけではない。

これまでに受けた諸々のダメージが蓄積して、龍也の手を震わせる。

「黙ってやらせると思っか!？」

隼人ルクスリアの後方から、隼人が駆ける。

刹那へ魔力を凝縮すると、それを一気に解き放った。

「刹那の閃光っ！」

完全に力を解放すれば、大規模の次元震をも引き起こすため、威力を抑え、非殺傷設定で、だが決して容赦しない、矛盾した一撃。そんなとてつもない光の奔流が、ルクスリアを飲み込まんと迫る。

しかし。

「ふん、温いな。その程度の攻撃で敵を消そうなどは」

突然第三者の声が響き渡り、刹那の閃光は何かにも阻まれて、少し拮抗した後、掻き消える。

「な、何が………!？」

呆然とその光景を見ていた隼人の疑問はしかし、すぐに解けることとなる。

刹那の閃光と何者かとのぶつかり合いによって発生した煙が晴れる。するとそこには、1人の人間が悠然と浮いていた。

全身に金色の鎧を着込んでおり、同じく金の長い髪は、座っている玉座からはみ出るほど。

全てにおいて豪華な金で彩られているが、しかし彼の目と背中に生えた一对の小さな翼は、黒く染まっていた。

そんな20台半ばほどの青年が、まるで何をしてもなく、ただそこに浮かび、発生させた障壁で刹那の閃光を受け止めていた。

「す、スペルビア……………」

ルクスリアが、多大な驚きと僅かな嫌悪を滲ませて、眼前の男を呆然と見やる。

「黙れ。このようは蛆虫どもごときにそこまでやられるような蚊蜻蛉が、我が名を気安く呼ぶことは許さん」

スペルビアはそうきっぱりと言い放つと、今度は龍也と隼人に顔を向ける。

「ほう、貴様らか。我が所有物をここまでにくれた蛆虫というのは。だが安心しろ。我はこの役立たずほど甘くはない」

そう言うと、スペルビアは龍也へ向けて手を突き出す。

その手には、砲撃を繰り出すための1つの魔力球。

殺傷設定だろうが、その威力自体は大したことはなさそうだ。精々、隼人が放つデイベイン・バスターの半分程。

しかし、傷を負った今の龍也には、それすらも脅威となる。

今度こそここまでか。

そう思い、来るべき閃光が自分の身を焼き貫くのを黙して待つ。

だが。いつまで経っても、その痛みは襲っては来なかった。

「一体、何が……………!？」

目を開ける。

すると、そこには予想だにしない光景が広がっていた。

目の前で、今度は別の青年が、スペルビアの放った砲撃を受け止めている。

それも何も盾に使うこともなく、自身の体で。

大きく腕を広げ、まるで自ら受け止めるかのように。

「けっ、温い。温過ぎんだよ。待ちわびた結果がこの程度か？ ええ、おい」

銀の髪をたなびかせたその青年は、その血のように赤い目で、スペ

ルビアを睨み付け、悪態をつく。

「ほう、我が砲撃を己が身で防ぎきるか。その意気やよし」

「てめえの御託なんざ聞いてねえんだよ馬鹿野郎。この程度かって聞いてんだ」

「ふん、本当にそう思うか？ 『死ね』」

何をすることもなく、ただスペルビアがそう命令する。

それは傍から見れば何の変哲もない、ただの言葉。

しかし。

「な……に……?」

青年が、手にした長さは優に3mは超えているであろう長剣の切っ先を腹に向けようとす。

青年の意志でないことは、青年の驚愕した表情からも伺える。

「絶対遵守の……力!？」

思い至った見解に、龍也もまた驚きを隠せない。

それならば、あの男に対抗する手段は無に等しい。

その力を持って、自分よりも遥かに強大な力を持つ相手に勝利した人物を、自分は知っている。

だが、希望はあった。

それは、スぺルビアのこの力が、？絶対ではなかった？ということ。

「こんな……………ものオ！」

青年が呪縛を無理矢理解き放ち、長剣の切っ先を再び前方へ戻す。

「馬鹿な!？」

瞬間、スぺルビアの顔が更なる驚愕に彩られた。

「はあ……………はあ…。この程度で、俺の力を封じたと思ってンのか？  
甘い甘い」

「ふん。気に喰わん、非常に気に喰わんぞ、俗物めが。そんな俗物相手に我が逃げの一手を選ばねばならん事実……………腸が煮えくり返るわ。ルクスリア！」

「はいはい。もうちょっと遊びたかったけど……………仕方ないなあ。  
じゃあね、龍也。また今度。それまでに、精々私に相応しい男にな  
っててね」

そう言つて、ルクスリアの襟首を掴み、魔法陣を発動させる。

「我が名は傲慢のスぺルビア。今度会つた時は……………命はないと思  
えっ！」

そう言い残し、スぺルビアとルクスリア。2人のバグの姿は塵気楼  
のように揺らいで消えていった。

「やった……のか？」

隼人はそう呟くと、その場に座り込んだ。

強がってはいたが、慣れていない上に度重なる超強力魔法の行使で、ただでさえ消耗していた体力の皺寄せが一気に来たのだ。

「けっ………」

「あ、待ってよ！」

「あん？」

去ろうとする青年を龍也が呼びとめ、青年はそれにこの上なく不機嫌な様子で振り返り答える。

「君は………何者なんだ？」

「さアな。管理局を潰す者。今は、それだけ言っというてやるよ」

「それって、どう、いう………」

全てを言うことが出来ず、龍也の言葉はそこで途切れる。

連戦や連続した大ダメージが、一気に襲ってきたのだ。

龍也はそれをどうすることも出来ずに、倒れ伏した。

彼が最後に聞いたのは、隼人が自分を呼ぶ叫び声。

最後に見たのは、踵を返しその銀髪を靡かせて去っていく、血に汚れた青年の後姿だった。

## 第7話「異端の創造者」(後書き)

〈神の黄昏〉

神崎「はい、今回も無事(?) 終了〜〜〜!」

リオス「全然無事じゃないじゃん。何、強すぎない、この人達?」

神崎「まあ、仮にも敵幹部だからねえ。仕方ないですよ」

リオス「それと、なんか君にルクスリアフラグ立った?」

神崎「いや、フラグではないよ。まあ彼女の能力を引き出すための前準備つてとこかな。本当は気にいるの綾崎先生か水玉先生の方でもよかったんだけど、今後のことを考えると自分の方がいい気がしたのでこういう感じになりました」

リオス「そっか。では、感想感謝のコーナー!」

神崎「綾崎先生、水玉先生。感想ありがとうございました」

リオス「では続いて、設定解説のコーナー!」

神崎「では、どうぞ」

NAME: 蜃気楼

登場作品: コードギアス〜反逆のルルーシュ〜R2

種: 機体

概要：主人公ルルーシュ専用のナイトメアフレーム。絶対守護領域と呼ばれる障壁は鉄壁。

神崎「今日もコレしかないかな」

リオス「ていうか、設定の説明少なすぎない？」

神崎「否、調べる楽しさもとつといた方がいいかと思って。それにコードギアスなら結構知ってる人多そうだしね」

リオス「左様で。では、次回予告行きますか？」

神崎「だね。では次回、『その機神、創造者』も」

リオス「ご期待下さいー！」

## 第8話「その機神、創造者」

「う、ううん……………」

戦闘から数時間後。龍也は目を覚ました。

大きく伸びをし、状況を確認する。

確か、はやてとともに黒野達に会い、隼人を保護した帰りに敵に襲われて

「そうか。僕、気絶しちゃったんだ」

そう思い、眠気眼を擦りながら体を動かしてみる。

体中が痛い。当たり前だろう。刀が刺さった部位は勿論、絶対守護領域の演算により脳もオーバーヒートしているはずだ。

頭が壊れないのは、演算の一部　　否、ほとんどを、グロリアスが引き受けてくれたから。だからこそ、あれほどの防御障壁の制御を行うことが出来たのである。

そうやって、伸びをして体を動かしている内に、目も覚めてきた。

「ここは……………聖王教会か？」

壁の装飾を見た限りでは、おそらく間違いないだろう。誰かが運んでくれたのだろうか。

それほど大柄な体でないとはいえ、

それにしても。

「妙に女性趣味な部屋だ、な……………」

辺りを見回してみると、確かにレースのカーテンだとか、化粧に使  
うのであるう三面鏡だとかが置いてあり、いかにも女性的な雰囲気  
の漂う室内である。

夜で真つ暗なのもあってか、それがよく解つた。

すると。

「ひゃあっ!？」

自分しかいないと思っていたというのに、不意に腕をつかまれたよ  
うな気がして、思わず素つ頓狂な声上がる。

「い、一体何が……………!？」

深呼吸をして気を落ち着かせ、おそろおそろ腕を見る。

すると。

「すー……………すー……………」

「……………はい？」

あまりの光景に、一瞬言葉を失う。

結論から言えば、龍也の腕を掴んでいたのはカリムの手だった。

もう言うまでもないだろうが、龍也の隣でカリムが小さな寝息を立てて気持ち良さそうに眠っているのだ。

「え、ええと……………とりあえず、抜け出さないとだめだよね」

そう言って、軋む体を叱咤しながらベッドから降りようとするが……………。

「う~~~~ん……………」

カリムが腕をがっちりロックしてきて、離れない。

「ちよ、ちよっと……………」

起こそうかとも考えたが、これだけ心地良さそうな寝顔を見せられると、そんな気にもなれない。

仕方なく、龍也はもう一度ベッドに横になる。

「……………どっしろってのよ」

真っ赤になった龍也の眩きは、誰にも届くことなく虚空に消えた。

翌朝、『理性の限界で真っ白になった龍也を見て、シャツハやラモン、隼人から散々からかわれて真っ赤になるカリム』という光景が聖王教会で繰り広げられていたとか、いられなかったとか。

一方、龍也が隼人によって聖王教会へ運ばれていた頃。

ミッドチルダ首都、クラナガンの一角では、数人の男達が一人の少年を取り囲んでいた。

男達の手には、様々な武器が握られている。

ハンマー、ナイフ、斧、銃、etc……。

それぞれ得物は違えど、その顔は皆等しく醜い笑みに歪んでいた。

対し、少年の方は丸腰。

武器らしい武器は一つも持ってはおらず、その身に纏った管理局の制服の胸に着いた、羽をイメージしたと思われるバッジが特徴的な輝きを放っている。

傍から見れば、明らかな劣勢。にも関わらず、少年の顔は余裕の笑みで満ちていた。

「はっ。もう逃げられねえぜ、管理局の兄ちゃんよ」

卑下た笑みを浮かべながら、男の1人がそう言って前へ出る。

「俺達の動きを嗅ぎまわっていたガキっていうのはてめえか。だが残念だったな。俺達に出会ったのが運のつきだ」

そう別の男が言うと、どつと男達が一斉に下品な笑い声を上げる。

それに対しても、少年は相変わらずの余裕を保ち、

「ははっ」

笑った。

「何が可笑しい？」

訝しげに訊ねる男に少年は、だつて、と初め、

「力の差が全くわかってないんだなと思ってね」

「何だと？ ははははははは！ 面白いジョークだな。まさか、この数を一度に相手にしようってんじゃねえだろうな？」

「その、まさかさ」

「何？」

「デステイニー、セットアップ」

少年が静かに、しかし堂々とその名を  
自身の武器の名を  
口にする。

『Standby ready・Set up.』

胸のバッジが激しく発光し始め、夜の裏路地を光が塗りつぶす。

あまりの光量に男達は一様に腕で目を覆い隠し、その中でただ少年だけが、その真紅の目を開いてその光景を見つめている。

やがて、光が晴れると、そこには機神が立っていた。

「な、何だ……………？」

誰かの判別はつかないが、男達の1人がおそらくは無意識にそう咳く。

その言葉も無理からぬことだろう。

何故なら、彼らの目の前にいたのは、この世界の常識に当てはまらない、異形だったからである。

通常、魔導師のバリアジャケットとは服型である。騎士甲冑と呼ばれるものもあるが、そのどれもが服のような軽装だ。強度は一級品でも、外見はただの剣の一振りでも簡単に傷がつきそうなものが多いのだ。

しかし、目の前の少年の姿は違う。

頭の頂上から足のつま先まで、全身をくまなく機械的な鎧で包まれ

ている。

特徴的な頭部の、まるで日本の侍兜のようなアンテナと、カメラアイ。

青を基調とした胸部アーマーに、白基調の下半身。

創造者の記憶どおりに呼ぶならば、その姿はインパルスガンダム。

由緒正しきガンダムシリーズ、その主人公機が一にして、最高の破壊をもたらす存在、その雛形。

インパルスガンダムに変身した少年は、さらなる命をデバイス、デバイスニーに送る。

「デバイスニー、モード、フォース」

『Force silhouette』

背部が光り、赤の4枚翼の大きなバーニアが出現する。

スピードを活かした近く中距離戦闘を主眼に置いた装備、フォースシルエツトだ。

「さあ、かかってこい！」

「舐めやがって……… かかれっ！」

男の1人の喝に、それまで惚けていた他の男達も一斉に我に返り、次々に各々の得物に魔力をこめて、少年に襲い掛かる。

並の強度のバリアジャケットであれば、易々切り裂くことも可能な

攻撃。

しかし少年は、そんな状況で尚も動かない。

カメラアイの下で見えないが、そこでは明らかに余裕の笑みが浮かんでいた。

炸裂する男達の攻撃。

しかし。

「何いつ!?!」

男達の顔に浮かんでいるのは、驚愕。

当然だろう。

仕留めたと思っていた獲物が、自分たちの得物をその身に受けても尚、傷一つなく健在だったのだから。

男達とは対照的に、少年は欠伸まで出そうな様子で心底つまらなそうに、

「こんなもんなんだ？ 別にいいけどさ」

と言い放つ。

瞬間、ぞくり、とした感覚が男達を襲った。

こいつには、勝てない。そう本能が告げているのが解る。

「じゃ。今度はこっちから行くぞ」

底冷えするような迫力を秘めた声と共に、少年はバーニアの上部、ちょうど肩の辺りにマウントされた白い突起物を手に取り抜き放つ。

それは少年から魔力が供給され始めるのと同時に、桃色の細身の刀身を形成した。

ヴァジユラビームサーベル。フォースインプルスガンダムの近接戦用装備だ。

次の瞬間、少年はビームサーベルを横に構え、回転斬りを放った。

その斬撃は男達がそれに気付き、回避行動を取る前に男達の胴を横薙ぎに捉え、吹き飛ばす。

「ぐあああああああつー！」

まるでドミノ倒しのように倒れて気絶する男達。

いや、1人だけ例外がいた。

恐怖に取り付かれたように、隅でがたがたと震えているのが、1人。

「あとは、お前だけだな……………」

そう言ってそちらを向いた少年は、そのまま固まった。

男がその手に、別の男の襟首を掴んでいたのだ。

それが示すのは、身代わり。

他人を身代わりにして自分だけが生き残った。そんな愚かな行為の証明。

こいつも、そうなのか。

少年は心の中でそう毒づいた。

こいつもまた、そんな腐ったことを平気でやってのける、膿なのかと。

「お前……一体何なんだっ！ お前みたいなやつがいるなんて、聞いてないぞっ」

今にも泣き出しそうな 否、既に恐怖で歯をがちがちと鳴らした男がそう訊ねると、少年は怒りに身を震わせながら一歩、また一歩と男に近づいていく。

「あなたには関係ないだろ。俺にここで捕まる、あなたには」

「な、なあ！ 頼むから許してくれよ！ 何でもするからよ！ そうだ、俺が今回稼いだ金、全部あなたにやる！ だから頼む、助けてくれ……………」

「往生際が悪いんだよっ！」

男の言葉により一層怒りを強めた少年の光刃は、男のすぐ目の前をかすめ、そのすぐ前の地面を浅く抉った。

泡を吹いて気絶する男を冷たい目で見下し、少年は言った。

「……………ミッション、完了」

《お疲れ様、シン》

泊まっているホテルに戻ると、先ほどの少年  
ターを開き、任務の報告を行っていた。

シンはモニ

「いえ。でも、あまり強くなかったですよ？ あれで本当に全員A  
Aランク以上だったんですか？」

《それは、シンが強すぎるんだよ……………》

シンがあっけらかんと言うと、モニターに映る金の長髪をした女性  
フェイト「T」ハラウオンは、呆れたように溜め息をつ  
く。

《まあいいや。とにかくお疲れ様。で、お疲れのところ悪いんだけど……今からこっち来れるかな?》

「今からですか? また急ですね。何かあったんですか?」

《うん。ちょっとシンにしか処理できない書類が出てきちゃって。明日に伸ばすわけにはいかないから……》

「そうですか。解りました」

シンが快諾するとフェイトは満足そうに笑って頷き、次に真剣な表情をして、声を落として言う。

《気をつけてね。最近ミッドは物騒だから……》

「例の魔導師だけを狙う通り魔ですか? 大丈夫ですよ。もし出てきても、俺なら負けないですから」

《まあ、そうなんだろうけどね》

そう言って、フェイトは苦笑した。

確かに彼が来てこの方、彼が負けたところは見たことがない。いつも、どこから身に付けてきたのかというほどの力を以って勝利してしまう。

しかし。

《それでも、気をつけてね。いくらシンが強かったって、心配なもの

は心配なんだから」

「解ってますってば。フェイトさんも心配性だわ。では、また後で」

《うん、後でね》

笑顔でモニター越しに手を振るフェイトを最後に、通信は切れた。

「ふう……………」

モニターが消えると、シンはベッドに仰向けに倒れこむ。

また知らない天井。

これまでは至って普通の日常を過ごしていたなどと、今の彼を見る人間が何人そうと見抜けるだろうか。

否、誰にも見抜けはしまい。

創造者としてこの世界に送り込まれてから既に数ヶ月。

何の因果か姿はシンニアスカそのものとなっていて、彼そのものを体現した戦う力を得た。

この力で何が変わるのかは解らない。しかし、これで守れるべきものは守っていこう。そう心に決めたのだ。

「行くか」

シンは起き上がり、ホテルを出た。

魔法文化の中心都市とも言えるクラナガンとはいえ、無闇な魔法の使用は禁じられている。だから、シンの移動手段も自然と徒歩になった。

ネオン街の明るい町並みを歩き続けて数十分後。

いよいよ明かりも少なくなってきた閑静な住宅街に差し掛かったところで、？それら？は現れた。

「そこにいるのは解ってるんだ、よー！」

シンは近くに落ちていた小石を拾い上げ、近くの物影に放り込む。

すると。

「ほう。完全に気配を消していたはずだが、なかなかどうして……」

そう言っつて、1人の全身黒尽くめの男が姿を現した。

「何の用だ？」

「突然の事態にたじろぎもしない。なるほど、度胸だけはあるようだ。だが」

男が右手を上げる。

すると、男の周囲から幾人もの同じ格好をした人間が現れ、取り囲んだ。

「この数を相手に出来るかな？」

「はっ！ 数ばかりいたって、俺に通用するわけじゃないぞ？」

「そうか。ならば……………試させてもらおう！」

次の瞬間、黒尽くめ達が一斉に襲い掛かった。

## 第8話「その機神、創造者」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい、というわけで最新話更新です！」

リオス「今回はキラ先生の話だね」

神崎「そうです。長らくお待たせして申し訳ない。次回、謎の男達を相手に大暴れします！」

リオス「しかし作者さん。最初の下りはいるのかな？」

神崎「……………僕だって最初に入れるつもりなかったさ。でも書いてたらきりがよくなって、けどページ数的には少なかつたから、付け足すように……………」

リオス「書きちゃった、と」

神崎「……………うん」

リオス「まあ、いいんじゃないかな。皆さんにも後々サービスシーン作れば」

神崎「それは勿論作るさ。けど……………」

リオス「けど？」

神崎「悩むのがシャマル先生とシスターシャツハ。本編でも出番少

ないだけに、想像しづらいんだよね……………」

リオス「……………ああ」

神崎「まあそんなわけで今回と次回辺りまでキラー先生。そのあと、Hagiaz先生辺りが書けたらいいなと思っています」

リオス「了解です！」

神崎「それでは、今回はこの辺で。次回、『創造者、破壊』も、」

リオス「ご期待下さい！」

## 第9話「創造者、破壊」

男達は一斉に襲いかかってきた。

シンはそれをかわし、拳や蹴りで応戦すると、

「デステイニー、セットアップ！」

『All right.』

素早くセットアップを済ませ、インパルスガンダムとなる。

「ソードシルエット！」

『Sword silhouette.』

シンの背に巨大な身の丈ほどの刀を二振り備えたバックパックが出現し、青を基調としていた装甲を赤く染め上げる。

インパルスガンダムの武装の1つ、ソードシルエットだ。

「結界！」

素早く結界を張った後、シンはすぐ様二振りの剣、エクスカリバーを抜き放つと、黒服の男達に振りかぶる。

桃色の魔力刃が生えたそれを受け、一度に数人が巻き込まれて壁に叩きつけられる。

すかさず後方から、今度は別の2、3人が襲い掛かる。シンはそれをエクスカリバーを後ろに振り向き様に横薙ぎにする。

そうして彼らもまた、まるで丸太に払われたような鈍重な一撃に成す術もなく意識を刈り取られた。

そこまでしたところで、向こう側もこちらを警戒し始めたのか、距離をとり始めた。

シンはそれをあえて追撃することはせず、距離を保ったまま訝しげに男達を睨んだ。

これほどの数を揃えられるとあれば、おそらくはかなりの力を持っているのだろう。

そうでなければ、魔導師狩りなどという、一見リスクも高くメリツトもそう多くはないであろうことに協力する者はなかなかいないはずだ。

だとすれば、この男は一体何者なのだろうか。

考え込むシンに、後ろで傍観していた男が唐突に口を開く。

「さすがだ、と言っておこつか。この数を相手に、ここまで戦えるとは」

「そりゃどうもー！」

「ふっ、その顔では、相当不思議なようだな。何故この人間達が、ここまで私に従つのか」



シンはそれを聞いて怪訝な顔をした。

この世界の人間ならば、別の物語にしか存在しないVPS装甲の存在を知っているはずもない。

それを知っているということは。

「お前、まさか……………」

「ほう、気付いたか。私もまたお前と同様、他の世界から来たものだ」

やはり。

「そして、それを知っているなら解っているはずだ。私にも、能力があるということを一！」

男はそう言っつて、懐から1つのアクセサリのようなものを取り出す。

「デバイス……………」

「そういうことだ。……………アルケー、セットアップ」

『Stand by ready』

男の体を、怪しい赤の輝きが包み込む。

光が収まると、そこにはシンに似て、それでいてどこか異様な赤の

機神が立っていた。

アルケーガンダム。

血生臭い戦場で、幾度となく敵の返り血を浴び、まるでその血が染み込んだかのような紅の光沢を放つ、ガンダムである。

「いくぞ」

そうとだけ言って、男は背部の半永久動力機関、GNドライブを吹かし一気にシンへ肉迫した。

アルケーの武装の1つ、大剣GNバスターソードを大上段に構え、一気に振り下ろす。

対しシンは岩をも粉々に粉碎するその一撃を、エクスカリバーを交差させるようにして受け止めた。

ぎりぎりと、火花を上げながら激しくせめぎ合う、両者の得物。

その間にも、アルケーは足に装備された隠し腕からビームサーベルを出現させると、シンを切りつける。

「ぐっ……………！」

慌てて飛び退いてその斬撃をかわすと、背部のバックパックからまるで小さなウイングのように突出しているものを抜き取った。

先にはすかさず、桃色の魔力刃が生え、シンはそれを素早く投げる。

ビームブーメランが真っ直ぐにアルケーへと殺到し、アルケーはそれをハンドガンで迎え撃つ。

ビームブーメランは刃をジェネレートしている部分をビームに貫かれ、爆散した。

「ちっ……………」

舌打ちするシンの顔には、焦りが滲んでいる。

対しアルケーの方は、未だ余裕を保っていた。

「どうした、そんなものか？」

そう言つて、男がゆっくりとGNバスターソードを降ろしたのが、その何よりの証だった。

(さて、どうしようか……………)

シンはエクスカリバーを構えつつ、再び考え込んだ。

おそらくは、このまま戦つても勝ち目はない。

ソードシルエットでは手数が足りない。

フォースシルエットであればスピードは向上するが、代わりにパワーが半減する。

まだ出していないブラストシルエットは

論外だろう。結

界を張っているとはいえ、ここは市街地。ブラストシルエットの火力が活かせるとは決して言えないし、ましてや相手のスピードや間合いを考えると、一撃の火力を優先したブラストシルエットは向かない。

切り札は、あるにはある。

だが、それをここで切ってしまったっていいものか……。

「どうした。もう終わりか？　ならばここで幕引きとしようか、異世界の住人よ」

考えている間に、アルケーの両腰から小さな牙のような形をした白い物体が幾つも射出され、シンを取り囲むように浮遊する。

GNフアング。全方位からの攻撃を可能にした、遊撃砲台。

「さらばだ」

そうアルケーが言うと同時に、フアングから赤みを帯びた橙のビームが幾条も放出され、シンの視界を赤く塗りつぶした。

煙があたりにたちこめる。

「終わったな」

と、呟くアルケー。

だが　。

「どうかな？」

そう、不意に背後から声が聞こえ、反射的にバスターソードを振り返り様に横薙ぎにする。

しかし。

「遅いな」

そう、呟きと共にバスターソードは、桃色に輝く魔力刃を帯びた空色の大剣に根元から切断され、爆散した。

「き、貴様は……………」

ここに来て、アルケーは初めてその声に驚愕を滲ませた。

目の前にいるのは、青を基調とし、背中に大きな赤き翼を背負った、新たな機神。

「デステイニーフォーム。どうしようか迷ったけど、ぎりぎりで間に合ったな」

「ちっ！ 行け、ファング！」

アルケーの指示に忠実に乱舞を演じながら、ファングが再びデステイニーガンダムと化したシンに殺到する。

しかし。

「言っただろ、遅いつてな！」

次の瞬間、デステイニーのウイングから紅い光の翼が出現し、目にも止まらぬ速さでファングに切りかかった！

反応する暇すら与えられず、ファングは切り裂かれて爆散。

続け様にビームライフルからビームを放ち、確実に2、3基のファングが消し飛んだ。

「くっ！」

アルケーから焦ったような声が響き、残りのファングがシンへ再び肉迫する。

だが、冷静さを欠いたアルケーの操るファングの軌道は、直線的だった。

「甘い！」

シンは背部バックパックにマウントされたビームランチャーを展開し、発射した。

ビームライフルとは比べ物にならない光の奔流はファングを飲み込み、さらにそれでも勢いはとまらず、アルケーのボディに直撃し吹き飛ばした！

「おおおおおおおおおおおおおおお！？」

アルケーは壁に激突すると、漸くとまった。

セットアップが解除され、もとの黒服の姿に戻る。

戦いの終わりを見届け、シンは結界とセットアップを解き、男にバインドをかける。

「殺人未遂の現行犯で逮捕する」

そうシンが言い放つ。

しかし、男の反応はシンの想像の上をいった。

「ふっ、ふはははははははー！」

「何がおかしいー！」

「そう簡単に我々のことを知らせはしまいよ」

「……まさか！ やめ……」

やめろ、と叫び駆け寄ろうとするも、遅かった。

男は次の瞬間、口の中の何かを噛み、血を吐いて事切れた。

シンは無言で男に近づき、状態を確認する。

「死亡、確認。毒でも仕込んであったのか。命を粗末にしやがって……」

男に黙祷を捧げると、シンは近くの管理局部隊に連絡を入れて場を引き継いでもらい、その場を後にした。

「シン！」

待ち合わせの場所に行くと、まず目に飛び込んできたのはフェイトの心配そうな顔だった。

「フェイトさん。すみません、遅くなりました」

「いいんだよ、そんなの。それより大丈夫だったの？ 会ったんでしょ？ 例の魔導師狩り」

「ええ。でも心配要りませんよ。弱かったですし」

本当のところデステイニーフォームを使っていなければ危なかったのだが、それはいわないでおく。

心配性のフェイトのことだ。言えば、きっと要らぬ心配をするだろう。

「そう。なら、いいんだけど……………」

「そんなことより、書類って何なんです？」

「ああ、うん。部屋にあるから。行こう？」

部屋に向かうべく廊下を歩いていると、フェイトが口を開いた。

「でも、その魔導師狩りの人、どうして自殺なんか……………」

通信である程度のことには知らせてあったので、犯人が自殺したこと  
も勿論知っている。

無論、創造者などのことは極力伏せてはいたが。

「よく解りません。どうせ、管理局に恨みがあったとか、そんなと  
ころじゃないですか？」

「まあ、そうなのかもしれないけど。それほどの思いなら……………  
一体どんなことだったのかなって」

「意義がありませんよ、その議論。当の本人がもう死んでるわけで  
すし、知ったところで、俺たちにどうこうできる問題じゃないじゃ  
ないですか」

「そう、かな」

「そうですよ。だからフェイトさんが気に病む必要はないです」

「ふふっ、ありがとう。優しいね、シンは」

「フェイトさんが気にしすぎなんです」

微笑み合い、着いた先は現在フェイトが寝泊りしている場所。

「入って」

シンは言われるまま中に入った。

きちんと整頓されていて、整然とした室内で唯一、山のように積み上げられた書類が異彩を放っている。

「これ、全部ですか……………?」

「うん。……………ごめんね」

「いえ、いいんですけど。……………機動六課。いよいよ実現するんですね」

「うん。私だけじゃない、なのはやはやて達、2人にとっても、夢の部隊」

言われ、書類の一番上に目をやる。

機動六課設立にあたって、という題目が大きく書かれている。

「これで、変わりますかね」

「変わるよ。……………きっと、ね」

「はい」

「うん。さて、私も手伝うから、早いとこやっちゃおうっ。」

「解りました」

そうして、シンは机に座り、書類の処理を始めた。

新設部隊、機動六課。その設立の日は近い。

## 第9話「創造者、破壊」(後書き)

〔神の黄昏〕

龍也「ガンダムファイトオ、レディ、ゴー！」

リオス「うっさい(右ストレート)」

龍也「ぬお!？」

リオス「何このガンダムアニメ!? しかも更新2日も遅れておいてこれだけか！」

龍也「そう言わないでよ。今そういう気分じゃないんだから……」

リオス「どういうこと? あ、そういえばなんか名前表記も龍也って……」

龍也「よくぞ言ってくれました。前回の企画参加作者会議で無理矢理スク水を着せられて以来、ずっとこれ着てるんです……」

リオス「ああ……」

龍也「いいよね!?! もう脱いでもいいよね!?!? スタッフ!?!」

リオス「ええ、いたの!?!」

(。 。) / 「ダメ!」



## 第10話「創造者、訓練」

「やあああああああああああああ！」

また一度、剣閃が煌き、陽光を反射して銀の光沢を放つ。

ここは、聖王教会に設けられた訓練場。

主に教会騎士団が使用するもので、今もまたその中心では彼らが厳しい訓練を受けている真つ最中である。

そして今、龍也と隼人は2人並んで、ラモンより戦いの指南を受けていた。

今は、剣術の稽古である。

少なからず2人よりもこの世界にいた時間が長いラモンは当然、2人よりも多くの戦闘経験を積んできている。

それならばと、龍也の方から稽古をつけてもらえるよう申し出たのだ。

それに隼人が合流し、今に至る。

最初に軽く魔力の扱い方の訓練を行い、次に剣の訓練を行っているというわけだ。

その剣も、最初はかなりぎこちなかった動きが、この1時間強で早くも解消されつつある。

自分で言うのもなんだが、元々龍也は物覚えはいい方なのだ。

そしてそれはどうやら隼人も同じことであつたようで、龍也の動きを見よう見真似でやるうちに、かなり様になつてきている。

……………だが。

「ほい、っと」

「え？ うわあっ！」

合わせていた木刀があつさりと絡め取られ、平衡を失つた体は勢いよく転倒する。

「あいたたたた……………」

「おいおい、大丈夫か？」

「あ、すみません……………」

差し出されたラモンの手を取り、龍也は立ち上がる。

先ほどから、一本も入れることが出来ない。

いくら筋がいいとはいえ、やはりそう簡単にはいかないらしい。

「まあ、戦い始めたばかりだから仕方ないけど。もうちょっと頑張れば、いい線いくんじゃないか？」

「ありがとうございます！」

「じゃあ、次は飛行魔法の訓練でもしようか」

そう。

龍也と隼人は、まるで飛行魔法を使えなかった。

この世界に来たばかりなので、コツを知らないのも当然といえば当然なのだが、さすがにこのままではまずい。

「了解です！」

龍也と、先ほどまで脇で休憩していた隼人も加わり、飛行魔法の訓練が始まった。

「じゃあ、ちょっとやってみせるから見てろよ」

そう言って、ラモンは意識を集中すべく目を閉じた。

すると。

「「おおっ！」「

数センチ程度だが、浮いている。」

「今は訓練だから、まずは浮くのが目標だな。飛ぶのとかは2の次だ」

「なるほど……………」

「足に魔力を集中させて、それで地面を押すようにしてみる。それで大体飛べるはずだ」

「よし！」

それを聞いて、早速実践しようとする龍也。

しかし。

「あ、ちょっと待て、あまり力込めすぎると……」

「うわあああああああああああーーーーー！！」

遅かった。

魔力を込めすぎた龍也の体は、まるでバネにでも弾かれたかのように空高くに舞い上がり、そのままどこかへ飛んでいつてしまった。

「……………」

「……………」

ラモンと隼人は、龍也が飛んでいった虚空を呆然と見上げる。

ややあって、

「……………あ、あの」

「……………さて、次はお前の番だ」

「ちよつ、順番違いますよね!? 探しに行かないんですか!?!」

隼人の尤もなツツコミに、

「……………ボケてる場合じゃないか。じゃ、行くぞ」

「は、はい」

慌てて探しに行く2人。

その様子を、新人騎士達の訓練を見ていたシャツハが、

「何やってるんだか……………」

と、心底呆れたような顔で溜め息をついた。

「う、ううん……………」

なんだろうか。

顔だけが妙に熱い。

それに、どこかで聞いた事のあるパチパチと何かが弾けるような音。

続けて認識できたのは、目の前で赤々と輝く光

って。

「もしかして、燃えてる……………!？」

絶叫し、龍也は飛び起きた。

「おお、気がついたか？」

「……………へ？」

言われ、龍也は初めて彼に直面するように丸太に座っている青年の存在に気がついた。

黒に近い、まるで夜空のような藍色の短髪。

それと同じ色を放つ瞳は、彼が焚いている焚き火の炎の赤を照り返して、吸い込まれそうな輝きを放っている。

「ここは？」

辺りを見回しつつ、龍也は青年に訊ねた。

日がさんと降り注いでいることから、今が昼間近であること。

そして、ここが森なのだろうことも、鬱蒼と茂る木々を見れば解った。

が、肝心の現在地はさっぱりだ。

「聖王教会近くの森林地帯らしい。それで？ 君は一体、どこから来たんだ？」

「それは……………」

龍也は言い淀む。

いくらなんでも、飛行魔法の練習中に飛び上がりすぎてなどと、恥ずかしくて、とても。

なまじ空戦の素養があっただけに、余計に情けない。

その龍也の意志を汲んだのか、

「ああ、いいよ。無理に話さなくても。それよりどうだ。美味いぞ」

青年はそう言って、焚き火で焼いていた、見事に丸焼きにされた魚を差し出す。

見たこともない魚だったが、香ばしい香りが鼻をくすぐる。

正直、美味そうだ。

「あ、いや、それほどお腹空いてないので……」

と、即座に断ろうとするが……。

ぐうう。

「あっ……………」

「ははは、体は正直みたいだな。遠慮しないで喰え」

「うう……………いただきます」

恥ずかしげに頬を染め、魚にかぶりつく。

その日の魚は、特別美味かった。

「おい、龍也やーい」

そんな呼び声をかけつつ、ラモンは草むらをかき分けながら龍也を探す。

その後ろから同じ様に、

「龍也やーい」

と叫びながら隼人が続く。

そこでふと足を止め、隼人は前を歩くラモンに訊ねた。

「ねえラモンさん。本当にこっちであってるんですか?」

「合ってると思うんだがなあ。なあ、アルテミシア?」

『そうねえ。方角は正しいはずよ。ほら、さっさと探す!』

「へいへい」

相棒にいい加減な返事を返しつつ、尚またあの台詞を張り上げて、ラモンはどんどんと前に進んでいく。

隼人はその様子に苦笑し、次いで慌ててその後を追った。

毎回、喋る度に思っていたことだが、ラモンのデバイス、アルテミアは随分と態度が大きい。

大抵は、今も自分の少し後ろからついてくるクロムや龍也の持つゲロリアスに代表されるように、丁寧で主に礼儀正しい、そんなものが多いのだが。

デバイスにもAIというものがあるし、個性があるのも解ってはいるのだが、これは少し特殊すぎやしないだろうか。

そんなことを漠然と考えていると。

「？ どうしたんですか、ラモンさん？」

急に立ち止まり、辺りを見回し始めるラモン。

それを訝しげに見つめていると、ラモンは人差し指を口に当てて。

「しっ。囲まれてるぞ」

「ええっ!？」

素っ頓狂な声をあげるクロムの口をさつと塞ぎ、隼人は自分も辺りを見回した。

「アルテミア。気付かなかったのか？」

『それはこっちの台詞よ。てっきりあなたなら気付いているかと思っただけだ』

軽口を叩いている間にも、周囲を覆う気配はどんどん近づいてきている。

やがてそれがはっきりと感じ取れるほどに近づいてきた頃には、周囲を黒衣の、まるで忍者のような装束を着た一団が取り囲んでいた。

「……………創造者とお見受けする」

「俺たちにや、あんたらみたいなきしさ満点の知り合いがいた覚えはないんだが？」

黒装束の中で唯一、他とは違う紫色の装束を身に纏った男が一步前に出て訊ねるのを、ラモンは構えを解かないまま睨み付ける。

「……………かかれ」

今のを肯定ととったか、男の号令と共に、黒装束の男達は一斉に刀を抜き放って、2人に襲い掛かる。

「ちっ、問答無用かよ！ アルテミシア、セットアップ！」

『了解よ！』

「刹那、クロム！ 俺たちもだ！」

『「了解！」』

ラモンはアルテミシアを、隼人は刹那をセットアップし、さらにクロムが隼人とユニゾンを遂げる。

準備は、整った。

「行くぞ！」

「おう！」

刃の交わる音が、天高く響き渡った。

「ふうう、ご馳走様です」

幸せそうに頬を緩ませ、龍也は両手を合わせて一礼した。

結局あれから龍也はすっかりご馳走になってしまい、6匹という、1人で食べるには多い量の魚は綺麗さっぱり2人の胃袋におさまっ

ていた。

「お粗末様、だ。さて、食休みがすんだら行くぞ。幸いここから聖王教会への道ならばわかる。連れて行ってやるう」

「本当ですか！」

「ああ」

「ありがとうございます、氷川さん」

名を呼ぶと、青年　　氷川は、満足そうに頷いた。

食事中に聞いた彼の名は、氷川　流<sup>ながれ</sup>。

今は、自由気ままに旅をしている真っ最中なのだという。

食事をしようと川から捕ってきた魚を焼いていたところへ、龍也が突然吹っ飛んできたらしい。

氷川は立ち上がると、

「さて、デザートに果物でもどうだ？　さっき見つけた、新鮮な木の実だ」

「あ、いただきます」

「うん。ええと、包丁は……………」

そんな会話を続けていると、そこへ。

ガキーン！

「！」

「今のは……………」

龍也が何事かと辺りを見回し、氷川は聞こえてきた音に深刻な表情を浮かべる。

「まさか……………」

「どうしたんですか？」

「すまない、デザートはまた今度だ！」

そう言つて、氷川は手早く布巾などを纏めると、何処かへと走つていってしまった。

「え、ちょっと！？ 待つてくださいよ……………」

あの男がいなければ、自分は帰ることすら出来ない。そんなことはごめんだ。

丸太の上に立て掛けておいたグロリアスを慌てて鷲掴みにし、龍也は慌てて氷川の後を追った。

## 第10話「創造者、訓練」(後書き)

「神の黄昏」

神崎「遅れてすみませんでしたあ——————！！  
(フラインググ土下座)」

リオス「全く、何やってんの」

神崎「すみません。思いの外氷翼の天使のほうがかどってしまいまして……………」

リオス「まあ、書いてくれるのは嬉しいことだけど。けど、企画作品なんだからこれを遅らせちゃだめでしょ」

神崎「本当に申し訳ない」

リオス「さて、H a g a l a z先生出たね」

神崎「なんとか出せました。そして、この辺りで飛行魔法が使えるようになってないと後々不便なので、訓練描写と組み合わせました。……………ラモン先生が、少々(?)ハヤト君に重なってきて困ってます」

リオス「うーん、確かに……………」

神崎「まあ、先生の位置づけはそんな感じにしておこう。さて、感想をいただきましたH a g a l a z先生、水玉先生、綾崎先生。ありがとうございました」

リオス「さあ、次回は？」

神崎「創造者4人での無双、です！」

リオス「おお、乱戦の予感がするぞ！」

神崎「Hagalaaz先生に活躍していただきます。では次回、  
創造者、和』に、」

リオス「ご期待下さい！」

## 第11話「創造者、和」

黒装束の男達は刀を持って目の前の敵に肉迫した。

ラモンはレイピアモードで起動したアルテミシアを横薙ぎに払い、迎撃するが、黒装束はそれを流れるような動作で避け、お返しとばかりにクナイを投擲する。

「おわつと、速っ……………！」

ぎりぎりですれをアルテミシアで弾くと、びりびりと腕に振動が走った。

おそらくは、魔力付加。

それもクナイの先に魔力を集中させ、貫くことに重点を置いた、一撃特化型だ。

殺傷設定の一撃が、ただのクナイにも関わらず地面に僅かなクレターを作る。

「洒落になんねえな、おい。アルテミシア、ビュートモード！」

『了解』

アルテミシアを鞭型に変形させ、無数に襲い来るクナイを、変幻自在に荒れ狂う細身で存分に払い上げる。

相手を刺し貫くことの叶わなかった凶刃は、地面に落下し濁いた音

を立てた。

その隙にラモンは自身の周囲に魔力球を数発出現させ

「クロスファイアー、シュート！」

射出した。

放たれた魔力弾は、クナイを投擲し続ける黒装束達に寸分違わず命中し、その意識を刈り取った　　はずだった。

「……………何!?!」

魔力弾を受けた黒装束は、吹き飛び倒れはしたものの、まるでゾンビのようによろよろと立ち上がり、再び刀を持って向かってきた。

「うっわ、こいつら気持ち悪っ！」

そういつつ、再びレイピアモードに戻したアルテミシアで黒装束を迎え撃つラモンの前で、リーダー格の男は高らかに嗤う。

「くくくく、非殺傷設定とは軟弱な。こやつらは特別に訓練した特殊部隊の精鋭たち。ちよつとやさつとの衝撃で意識を手放すほど柔ではないわ！」

「……………なら、ちよつとやさつとじゃければいいんだな？」

そういった声とともに、雷化した隼人がすれ違い様に霸王一閃で黒装束たちを切り伏せていく。

凄まじいほどの剣閃。

それが幾重にも煌いた次の瞬間、それを受けた黒装束たちは成す術もなく倒れ伏す。

「これくらいの出力にも耐えられないとは。柔だな」

そう不敵に笑う隼人に、リーダー格の笑みが僅かに歪んだ。

「なるほど。それなりに腕は立つようだな。だが、いつまでもつかな？」

男の言うとおり、黒装束はまだまだ多くが残っている。

気絶した者達も、いつ意識を取り戻すか解らない。

結局のところ、ギリ貧なのは間違いなかった。

だが　　。

「へっ、誰を相手にしてると思ってんだ？ てめえら」

隼人は笑う。

その身の勝利を確信して。

この場にいる全ての？ 敵？をただ薙ぎ払う、自分を想像して。

「さあ、かかってこいよドゥ流。……………格の違いってやつを見せてやる！」

「さあて、どうしたものかな」

一方の龍也と氷川もまたその頃、困まっていた。

「見たところどうも下っ端らしいが、こう数が多いと手加減が出来  
そうもない」

「いや、それ違うでしょ。手加減云々の問題ですか、この状況？」

龍也のツッコミにも氷川は涼しげな顔で、

「違うのか？」

「いや、いかにも『そうです何か？』みたいな表情で断言されま  
しても……………」

「まあいい。それより龍也。自分の身は、自分で守れるな？」

「え？……ええ、まあ」

曖昧に返事を返しつつ、龍也は手に持ったグロリアスを構える。

「よし。じゃあ俺も行くこうか」

そう言っつて、氷川は構えた。

だが。

「あれ？ 氷川さん、デバイスは？」

男の手にあるであろうデバイスが、ない。

それでどうやって、この状況を打開しようというのか。

「ん？ 俺はデバイスは使わんぞ？」

「ええ！？ じゃあ、どうやって戦うんですか！？」

「こっやって、だ！」

氷川は自分の胸に手を当てた。

すると、当てた箇所がやがて炎のように燃えるオレンジの光を発生し始め、やがて何かの紋様のようなものが現れた。

否、紋様ではなく。

「文字……………？」

『氷』の字に見える黒い光が出現し、氷川の手に凝縮していく。

そして。

「はあっ！」

氷川あるじの掛け声とともに、力が一気に解放された！

氷で出来た槍が、その切っ先を真っ直ぐに黒装束たちに向けて解き放たれる。

「ぐあああああああああ！」

幾重にも轟く悲鳴。

黒装束たちはそれまでの寡黙な様子が嘘のように逃げ惑い、その背を氷の槍が襲い意識を刈り取っていく。

「非殺傷設定にしておいた。刑務所で、己の愚かさを嘆くといい」

そう氷川が言い放つ頃には、すでに周囲の黒装束たちは壊滅状態に陥っていた。

グロリアスをセットアップしたまま啞然としてその光景を見ていた龍也に、氷川は言った。

「さて、向こうにも同じような輩がいるらしい。行くのでしょうか」

「は、はい」

漸く我に返った龍也は頷くと、氷川の後ろについて次の目的地へ向かった。

「刹那の閃光おおおお！」

また1つ、隼人の極大砲撃魔法が炸裂し、その膨大なる光条の中に数人の黒装束を飲み込んでいく。

圧倒的なまでの力。

無限に沸いてくるのではないかと思われた黒装束たちは、既に数え

られる程にその数を減らしていた。

そのほとんどが、隼人によるものだ。

今のような極大の魔法を使っても尚勢いの衰えを見せないその攻撃は、敵に少なからず恐怖を植え付けるには十分すぎるであろう。

残っている黒装束たちの動きが、逃げ腰になりはじめているのだ。

いかなる人間でもそれが普通の人間である限り、死への恐怖は少なからず持っているもの。

隼人の攻撃は全て非殺傷設定が施されているから、既に地に沈んだ黒装束たちも死んではないのだが、ここまで圧倒的な力を見せ付けられると、さすがに恐怖も湧いてくるというものだろう。

「やあああああああ！」

声を張り上げ、また1人無謀にも背後から、黒装束が隼人へ襲い掛かる。

隼人はそれを振り向きもせず、

「霸王……………一閃！」

再び膨大な量の魔力を貼り付けたその剣を、振り向き様に薙ぎ払った！

「ぐあああああああ————！」

断末魔の叫びを上げ、また1人、その意識を否応なしに切り伏せられ、大地に倒れこむ。

圧倒的。

それしか言葉が思い当たらないこの状況に、最初は余裕の笑みを絶やさなかったリーダー格の男の顔は、驚愕一色に染まっていた。

どんな戦いにおいても、必ず数の利というものは存在する。

それはいかなる戦いにおいても絶対の真理であり、複数体の戦いにおいての変わらぬセオリーである。

しかし、目の前の男はどうだろうか。

圧倒的兵力差においても全く臆することなく、寧ろ論理それがまるで幻もっ想であるそうと公言するかのように尽くを打ち破る。

この男に、半端な数の利など無力。

男は漸く、その事実に気付いた。

「……………なるほど、さすがは創造者。その強さ、鬼神の如し、だなら漸く解ったか？ 解ったら投降しろ。そうすれば、悪いようにはしない」

そう言って、隼人は手を差し伸べる。

しかし。

「くくく……はははははははははは！」

「な、何が可笑しい!？」

「いいや、これだけ蹂躪しておきながら、最後の最後で手を差し伸べるなど、滑稽だなと思ったただけでね。それに、君は確かに圧倒的だが、負ける気はさらさらないよ?」

「はっ、負け惜しみはよせ」

「負け惜しみかどうかは、これを見てからにするんだね」

そう言つて男は装束の懐から正方形に切り取られた紙を取り出すと、自分の胸に当てた。

オレンジ色の光が噴出し、みるみる内に男の姿を変えていく。

それは雄雄しく、猛々しい。

全てを破壊し蹂躪する存在。

光は周りの生き残った黒装束たちも巻き込み、さらに膨れ上がっていく。

そして。光が完全に晴れたとき、そこには白く気高い? 龍? が悠然と浮遊していた。

「な……に……!？」

思いもよらない事態に、ラモンと隼人は同時に息を呑む。

『ふっ、はははははは！ どうだ。これが私の切り札。さあ、始祖の力、たっぷりと見せてやるうではないか！』

そう龍から男の声が聞こえ、龍が一層激しく咆哮した。

その身体の大きさも声の咆哮の威圧感も、龍也の操るドラグレッダ―とは比べ物にならない。

龍の口から、隼人と同等の極大の砲撃が放たれる。

それは空気を切り裂き、一瞬の内に2人の下へ到達する。

「くっ、アルテミシア！」

『解ってるわよ！』

ラモンは咄嗟に隼人を抱え、ビュートモードにしたアルテミシアを近くの樹に絡ませ、一気に巻き取った。

遅れて、後ろで凄まじい爆音が響き、熱風が肌を嘗める。

「畜生、あんなのアリかよ……………」

ラモンが憎々しげに、後方で雄々しく咆哮する龍を見やる。

その真下　　先ほどまで2人が立っていた場所には、大きなクレーターが出来ていた。



『逃がさんぞ』

そう言つて、その大きな口に膨大な魔力を蓄積していく。

巨大な魔力球が、龍の口先で渦巻いている。

「く、そつ……………」

先ほどのような極大の砲撃が相手では、中途半端な逃げ方は通用しない。

先ほどのように鞭を伸ばそうにも、先ほどの砲撃で辺りの樹々は根こそぎ薙ぎ払われてしまった。

「ここまでか……………」

最後を予感し、眼を閉じる。

しかし。

「そおりゃあああああああああ！」

「氷牙、連閃！」

『ぐおっ！?』

幾つもの氷の槍、そして冷気を纏った連撃が龍の腹に次々と命中し、龍は口に溜めた砲撃のエネルギーを手放した。

そこにいた人物を認め、隼人は小さく笑う。

「……………つたく、遅えんだよ」

龍也と見慣れぬ青年は、それに軽く笑みを返すと、眼前の龍に向き直る。

「僕の友達を傷つけた罪、その身で贖ってもらおうよ！」

『き、貴様あ……………！』

龍は咆哮した。

怒り狂うように、猛々しく。

荒れ狂う雷のような声を、張り上げて。

しかしそれにも、創造者達は決して臆しなかった。

「グロリアス、ガーディアンフォーム」

『All right・Guardian form』

龍也の声と共に、騎士甲冑の装甲が変化していく。

甲冑は、西洋重騎士のそれ。

違うのは、甲冑各部に取り付けられた、近代武具の象徴とも言える、重苦しい銃口。

グロリアス、ガーディアンフォーム。

全てを守るべく生み出された、絶対の壁。

「……………さあ、蹂躪の時間だ」

怒り狂う龍にその指を突きつけ、龍也は高らかに言い放った。

## 第11話「創造者、和」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「さあ、次回でHagalaaz先生編は終了となります！」

リオス「なんか作者さん優遇されてない？」

神崎「……………理由言っても怒らない？」

リオス「納得できる理由なら」

神崎「いや、今回の話では、どうしてもHagalaaz先生を合流させる必要があったのさ」

リオス「ふむふむ」

神崎「そしてね、どうやって登場させようかなくて考えたときに思いついた手法がこれでした。それ以外はどうにもぴんとこなかったんだよね」

リオス「だからこうせざるを得なかった、と？」

神崎「まあ、そういうこと。でもいいじゃん。隼人君大活躍だったし！」

リオス「まあ、そうだね。あれはかつこよかった！」

神崎「次回は4人でフルボッコにします」

リオス「ほ、程ほどにね。それでは次回！」

神崎「『創造者、打倒』にも、」

リオス「ご期待下さい！」

今回から解り易いですが、気まぐれで版權ネタを入れていくかもし  
れません。

気付いた方は、ぜひ感想にて

## 第12話「創造者、打倒」

「……………さあ、蹂躪の時間だ」

龍也は言い放つと、グロリアスに素早く命令を下す。

「グロリアス、ランチャーモード」

『了解。ランチャーモードへ移行します』

剣の形をとっていたグロリアスが突如、長い砲身を持つ大きなランチャー砲へと変化する。

「援護と防御は任せて！ 氷川さん、頼みます！」

「任された！」

氷川は再び胸に手を当て、氷の槍を出現させ掴み取ると、龍に肉迫していく。

それをランチャーを両腕で抱えて照準を合わせながら見つめていると、龍也の下ヘラモンと隼人が駆け寄ってきた。

「おい、あいつ誰だ？」

「頼もしい協力者ですよ、ラモンさん。そして」

龍也の視線の先で氷結の槍が陽光を反射して煌き

「 おそらくは、創造者です」

一閃した。

胸を薙がれた龍は、痛み悶絶しのた打ち回る。

「え？」

「効いてる!？」

「おそらく、彼の能力があな**の**化け物が使ったのと同じ、**漢神**だから  
でしょう」

言い、ランチヤーのトリガーを引いて空色の砲撃を打ち出し、氷川を今まさに吹き飛ばそうとした腕を弾く。

「?あやがみ??」

「文字の意味を理解し、その力を引き出す能力です。あの男が使った力にも、何事が文字が使われてはいませんでしたか？」

「あつ……………」

そういえば、確かに男が胸へ押し付けた紙切れには、なにやら文字のようなものが描かれていたような気がする。

それを言つと。

「それですね。でも、その方法だとおそらくあの身体はそうもたないでしょう。漢神とは本来、青天の霹靂でごく一部の人間しか得る

ことの許されない能力。故に、その強制執行にはそれ相応の対価があるはず」

「つまり、ここを凌げば、」

「勝手に自滅する、ってことか……………」

「それでも、本当の漢神使いである氷川さんなら、それを待たずして倒せるかもしれま、せん！」

また一度砲撃を放ち、龍の砲撃と相殺しつつ、龍也は怒鳴るように言う。

「よし、それなら……………」

「俺達も援護するぜ！」

「頼みます。守りは任せて、お2人は存分にやっちゃってください」

「「おう！」」

2人はデバイスを構えると、砲撃の体制に入った。

その間にも、

「おおおおおらあああああああー！」

自分の身からまたしても漢神を顕現した氷川が、幾つもの氷柱を龍へ向かって打ち出す。

龍はそれを尾や腕で薙ぎ払うと、咆哮した。

「埒が開かんか……。ならっ！」

氷川は一旦下に降りると、地面に手をあて、？漢神？を使った。

山吹色の光と共に、土という文字が現れ、それは段々と形を変えて、1つの縦笛の姿になった。

『させん！』

漢神の力を纏いし神器の出現に、龍は使用を邪魔しようとするが。

「やらせるかあっ！」

スターライトブレイカーと、ライオットブレイカー。

2つの極大砲撃が龍の腹に直撃し、たたらを踏ませる。

体勢を崩しかけた龍を見上げ、氷川は淡々とその土笛の意味を語りだした。

「土、とは、八音という八種の楽器の1つ。その形態は土笛など。そして土とは、土盛りをして土地の神を祭ったもの、という意もある。それを、？漢神？を無理矢理従えたあんなの前で吹けば……どうなるかな？」

龍の顔に、一瞬驚愕と怯えが走ったが、漢神によって生み出された神の土笛は、彼の言葉を待つことなく。

「~~~~~」

吹き鳴らされた。

その旋律は、神秘。

しかし龍にとってはこれ以上ないほどの苦痛を伴って、辺りに響き渡る。

『ぐがあああああああ、や、やめろおおおおおおおおおおおおおおお  
』！

身体の奥底から全身に走る激痛に悶え、これまで以上に苦しみに喘ぐ龍。

その口から、まるで苦痛を吐き出さんとするが如く砲撃が放たれ、辺りを薙いでいく。

それらは次なる砲撃の準備をしていたラモンと隼人にも迫り来るが、

「フリーズフィールド！」

『Freeze field.』

空色の神秘的な輝きを放つ粒子の壁がそれを防ぎ、片端から凍りつかせ、砕け散った。

『お、おのれええええええ……ぐ、ぐあああああああああ！』

笛の旋律に耐え切れなくなった龍が、ついには動くのを止めて地にくったりと倒れこんだのを確認すると、

「今、楽にしてやろう」

そう言つて、氷川は再び自信の胸に手を当てた。

だが今回は、氷の文字だけではない。

彼の名である、流の字も共に現れ、発光している。

「流、とは、二水の間にも人の倒れた姿を加えた字から成つた。古来、川が氾濫すると多くの犠牲者が出たことから、人が浮流することを意味する」

言い放つと、その流の文字が消滅し、間欠泉以上の勢いを以つて水流が龍を上空に打ち出し、次いで氷の文字が掻き消え、龍の落下地点に巨大な氷柱を出現させる！

『があああああああ………』

落下の勢いで大きな力で氷柱の先に打ち付けられた巨体は、数回痙攣した後、力を失い、動かなくなった。

「漢神の名の下に、闇に沈め」

氷川がそう言い放つと同時に、氷柱が消滅し、地響きとともに龍は地面に叩きつけられ、同時に膨大な光が龍を包み込んだ。

龍の姿は瞬く間に縮んでいき、やがて光が止むと、もとのとおり男

がその場に倒れていた。

全身素っ裸で。

「うげっ、なんでこいつ裸なわけ？」

いつの間にか駆け寄ってきていた隼人が、男の姿を見るなり引き攣った表情を浮かべる。

まあ、当然の反応かもしれない。

誰だって、どう見ても中年としか見えない男の全裸など進んで見たいとは思えない。

氷川だって嫌だ。

後からやってきたラモンも似たような表情を浮かべていたが、龍也だけは知っていたのか大して驚いていない様子だ。

ただ、やはり見たくはなかったようで、苦笑いを浮かべている。

「まあ、今はどうでもいい。おい、バインドしてその男、回収するぞ」

「ラジャー！」

ラモンと隼人がそう言い交わして駆けていく横で、氷川は龍也と向き直る。

「やあ。どうやら、仲間には会えたようだな」

「おかげさまで。氷川さんも、これで出発ですか？」

「ああ。俺がここにいる理由も、もうあるまい。また気ままな旅に出るぞ」

「そうですか。また、会えるといいですね」

「そうだな。きっと会えるさ。……………今度は魔導師としてはない。創造者同士として、な」

「えっ……………」

最後の一言に啞然とする龍也を置いて、氷川は踵を返す。

「気をつける。バグは既に俺達の存在に気付いている。いつ、どこで俺達の命を狙ってくるか解らない」

「……………はい」

俯き、答える龍也の顔に浮かぶのは、憂慮と歓喜。

いつどこで命を落とすか知れない現状に嘆き、また、これほどまでに頼もしい味方がいるのだという事実に感謝する、そんな複雑な表情。

それを知ってか知らずか、氷川はふっ、と微笑んで。

「また会おう。それまで、死ぬんじゃないぞ」

そう言い残し、去っていった。

龍也はそんな彼の後姿を、ただ眺めて見送った。

その背中に、言い様のない信頼を寄せて。

「あゝあ、今日は想像以上に疲れる日だったな……………」

もう既に時計もいい時間をまわった夕暮れ時。

薄暗い中、山吹色の陽光が神秘的に照らし上げる教会の廊下を、ラモン＝ミストレスはそう草臥れた様子で呟きながら歩いていた。

無論、彼が何故それほどまでに疲れたのかといえば、その後の事件処理や関係者の逮捕などに時間も体力も完全にもっていかれたため

である。

尤も彼にしてみれば、その後に待ち受けていた小一時間にも及ぶシヤツハの説教の方が、よほど堪えたのかもしれないが。

「あゝ、ついてね。なんでこんなことになつてるんだ。よし、今日はもう休もう。誰が何と言おうと今日は絶対起きねえぞ！」

そんな決意を胸に、ラモンは尚も廊下を歩く。

本日最後の仕事である、シヤツハへ届ける書類を手に、彼女の部屋へ向かつて一直線に進路を取り、無駄な動きなど一切せず、ただ情眠を貪るべく。

そしてついに目的の彼女の部屋の前に辿り着き、ドアを開けると

「……………」

「……………」

……………一瞬、まるで時が止まったかのようにラモンと、部屋の中で着替え中　　つまりは現在フリフリの下着姿である人物は完全に硬直する。

そして。

「……………っ！」

「わぁっ！　ちょ、ちょっと待て！」

中にいた人物の顔が真っ赤に染まっていくのと、ラモンが両手を突き出して弁明しようとするのは、ほぼ同時だった。

そして。

その弁明の甲斐なく、

「馬鹿あああああああ——————！！」

「ギャ——————！！」

着替えをしていた人物　　おかつぱシスター、シャツハの相棒、ヴェンデルシャフトの一撃がラモンの顎にクリーンヒットし、ラモンは吹き飛んだ。

「な、なんでこうなるんだ……………がくっ」

慌てて自分の体をベッドの布団で隠そうとするシャツハに、心の中で「今更遅いぞ」と暢気にもツッコミをいれつつ、ラモンの意識はそこでぶつつりと途切れた。

「まあ、今の音は何でしょう?」

「さあ?」

一方別の部屋では龍也とカリムが、一旦仕事を中断し、お茶に入っていた。

「随分大きな音でしたね。見に行ってみましょうか?」

「構わないわ。龍也も疲れているでしょうし。それに、今音がしてきたのはシャツハの部屋がある辺りだから、何かあったとしても大丈夫」

「そうかな。なら、いいんですけど」

そう言って、ケーキを口に運ぶ。

「うん、美味しい」

「そう? よかった」

そう言って微笑むカリムに、思わず顔が赤くなる。

「そ、それで。例の部隊が出来るのって、もうじきなんですよね?」

「ええ。新設部隊、機動六課。隊舎ももうすぐ出来るから、龍也には早速行ってもらうことになるわ」

照れ隠しに話題を急激に変えるも、カリムはそれを訝しむことなくそう答える。

本当に、大した女性だと思った。

「じゃあ、こうしてゆっくりしてられるのも今のうち、か」

「ふふっ、そうね。それまでは、こうやってゆっくりとお茶でも飲んでいましょう。大変なのは、それからなんだから……」

「そうですね。それで、行くのは僕だけですか？」

「隼人にも、行ってもらおうと思ってるの。でも、ラモンは残しておくわ。いつでも動ける人が1人くらい残っていた方が、いざという時に動き易いもの」

確かにそうだ、と龍也は思った。

もし機動六課へ全ての戦力を投入したとして、その機動六課自体がもし仮に機能しなくなったとしたら、動ける戦力はほとんどいなくなってしまう。

それにもしもの時のためにも、聖王教会にラモンが残っていた方が、教会の防備も厚くなる。

「そうですね。騎士カリムがそう仰るのであれば、僕が言うことはありません」

「カリム」

「はい？」

突然真顔で言うものだから、龍也はつい聞き返してしまった。

「カリムと呼びなさい。あと、その敬語もなしよ」

「いや、でも……………」

「いいから。昔みたいに呼んで。2人の時だけでいいから」

じっと見つめられ、思わず押し黙る。

ただ美しいだけではない、何事も言わせんとする迫力が、その顔に宿っているからだ。

そしてその顔に、龍也は大人しく従うしかなかった。

「……………はあ。解りました……………じゃ、なかった。解ったよ、カリム。これでいい？」

「はい！」

そう満天の笑顔で答え、ころころと笑うカリムを見て苦笑いを浮かべつつ、やはりこの女性には敵わないなあ、と1人苦笑する龍也であった。

機動六課設立まで、あと僅か。

## 第12話「創造者、打倒」(後書き)

「神の黄昏」

神崎「はいはい、神崎です!」

リオス「Hagalaz先生、強っ!」

神崎「初登場だからね。それに彼には結構かっこいい位置づけでしてもらおうと画策してるから。上手くいくかは別として」

リオス「いや、そこは上手くいかせようよ……」

神崎「善処はする」

リオス「ていうか、土の漢神。あんなの、妖奇土にあっただけ?」

神崎「土の漢神については突っ込まないで。意味の記述は正しいけど、その能力に関しては完全オリジナルだから!」

リオス「そ、そうか」

神崎「生暖かい目で見ただけだと助かる」

リオス「解った。そして、ラモン先生。うん、お約束だね」

神崎「あえて謝らんど、僕は。これはラモン先生直々に提出していただいたサービスシーンだからね」

リオス「ははは。そして最後のカリムとの会話。この意図は？」

神崎「まあ、六課が次話でいよいよ始動しますよー、っていうのと、単にカリムとの絡みが書きたかったっていう理由かな。最近どうしても彼女の出番が減りつつあるから。シャツハはちよくちよく出るのに」

リオス「後者が本音か……。で、次回は？」

神崎「今も言ったけど、六課始動します。次回はバトルはないかなー。たぶん、きつと、おそろく」

リオス「そうか。じゃ、次回予告いこうか」

神崎「よしてきた。次回、『創造者、機動六課へ』も、」

リオス「ご期待下さいー！」

### 第13話「創造者、機動六課へ」

「以上、ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした！」  
壇上で、はやてが挨拶を終わる。

それを聞いていた、見事に整列した六課のメンバーは、大きな拍手を返した。

ここは、完成した機動六課隊舎。

そう。

今日この日、ついにあの機動六課が本格運用を始めるのだ。

龍也、隼人、そしてはやての助手的立場にいる修斗は壇上で、一礼して下がるはやての後姿を眺めていた。

「ふうう、疲れた」

「ははは、お疲れさん」

式が終わり、廊下を歩きながら溜め息をつく龍也に、隼人が声をかける。

「しかし、まさか君達もここへ来ることになるうとはね。ま、僕もはやてというコネがいなければ、ここに来ることもなかっただろうけど」

と、修斗。

「修斗はラインと一緒ににはやての助手だっけ？」

「そ。はやてと一緒にいられるのは嬉しいんだけど……………仕事が多いのはちよつとなあ」

頂垂れる修斗に、はははと苦笑してみせる龍也。

彼らは相談した結果、呼び捨てで呼ぶことになった。

幸い肉体年齢は同じくらいであるし、それならばむしろ呼び捨てで呼ばなければ不自然だろうと、そういう判断だ。

ちなみに修斗の階級は三等空佐、隼人は一等空尉である。

龍也はといえば騎士でも管理局員でもないため、管理局での正式な階級はないが、カリムの根回しによって三等空佐に近い権限が与えられている。

一体どんな根回しをすればそうなるのか、ぜひとも聞きだしたいところである。

と、そこで。

「ふんっ……………」

むすつとして、隼人が修斗の方を睨み付けている。

どうやらこの前の襲撃や言動がよほど気に食わなかったらしく、先程から取り合おうとしない。

それならば修斗が謝れば済む話なのだが、

「はっ？　なんで謝らなきゃいけないの？　事実じゃん」

と、この調子なので、一向に仲直りすることが出来ないのだ。

「あの、お二人さん？　いい加減仲直りとか出来ないかなー、つて……………」

「無理」

「うう……………そんな時だけ息合わせなくたって……………」

思わず泣きそうになるのを

実際半泣き状態だが

ぐっと堪える龍也。

ここで負けては、気持ちよく生活を送ることさえままならない。

ただでさえバグとの戦いを控えている身だというのに、こんなことで神経をすり減らすなど馬鹿げている。

気を取り直して、龍也は別の話題を切り出した。

「ところでさ、今ってそろそろフォワード連中の訓練が始まっているんだよね？」

隼人の問いにそうだね、と返事を返し、

「見に行くか？」

「そうじよじよ」

「よし、じゃあ訓練場行こうか」

修斗の案内で訓練場へ行くと、そこでは既に訓練が始まっているところだった。

オレンジの髪をツインテールにした少女  
ティアナの指揮  
の下4人の新人がガジェット相手に奮戦していた。

「へえ、やってるやってる」

「ここで多重弾殻やるんだっけ？」

「そうそう。生で見られるとはねえ……………」

そんなことを口々に喋りながら、観戦する3人。

この世界の住人にしてみれば実に奇怪であろう発言をしながら訓練に見入っていると。

「ん？ 通信……………」

修斗の下へ、通信が入っていた。

「はい？」

『あ、修斗君か。悪いんやけど、ちょっと頼まれてくれるか？』

「何でしょう?」

『離れの倉庫にちよつと大事な機材置き忘れてしもてな。取ってきてくれへんか? 今、ちよつと手が離せないんよ』

モニターの先をよくよく見てみると、ラインが必死に書類と睨めっこしているのが見える。

どうやら、発足したばかりでまだごたごたしているらしい。

「そうですか。解りました、行って来ます」

『ごめんなあ。ほな』

モニターが消えると、修斗は他の2人に向き直る。

「それじゃ、そういうわけだから。ちよつと行ってくる」

「はいよ〜」

「さっさとどっか行け」

視線は訓練場に向けたままさう適当に返事をする2人の声を背に、修斗は倉庫へと向かった。

「ふう、これかな？」

修斗は倉庫へ着くと、はやてが言っていた機材を見つけ、適当にベレッタの格納領域に収納する。

「しかし、便利なものってつくづく人を墮落させるよなあ……………」

と苦笑しながら呟くも、機材を再び取り出して自分で運ぶようないとはしない。

彼もまた、便利な文明の利器を享受した者、ということだろう。

「さて、それじゃあ行きますかね」

そう言ってさっさと歩いていこうとする修斗を、

「待て」

1人の男が呼び止めた。

「……………やれやれ。気付いてたけど、戦わないでいいようにわざわざ無視してやってたの、にっ！」

ベレッタを素早くアサルトライフルに変形させ、振り向き様に速射する。

背後に積まれた機材にそれが命中し火花を上げると、その後ろから男が1人姿を現した。

「生憎だが、こちららそのまま無視されたままにしておくわけにかねえんだよ」

ガタイのいい、おそらくはいい年であろう男が姿を現す。

「率直に訊くよ？ そちらさん、バグ？」

「ふん、気付いてるなら話は早えな。ま、そういうこつた。生きてやつらのツラ拝みたきゃ……………」

男が六課隊舎の方を顎でしゃくりながら懐から取り出したのは、1本のUSBメモリのようなメモリースティック。

そのプッシュボタンを男は押し。

『VALKYRIE!』

「俺を倒していきな」

言い放つと、首筋に現れたコネクターに挿入した。

みるみる内に変化していく男の姿。

やがてその変化が収まった時、その姿が修斗ともシンとも違う、機神が立っていた。

「そいつは………！」

「マクロスFは知ってるか？ VF-27 ルシファーってんだ。かっこいいだろ？」

「か、かっこいい！」

自慢げに話す赤紫色をした機神に、思わず真面目に返してしまう修斗。

彼もまた自身の希少技能レアスキルによって、バルキリーはおろか巨大要塞マクロスさえも創造できるというトндеモスキルを持っているのだが、それでも自分自身がそれになりきれぬ能力というのは、それはそれで羨ましいらしい。

武器を出すことは出来るが、それはあくまでも武器だけであって、それそのものになりきれぬというわけではないからだ。

「そうだろそうだろ。そのかっこいい俺様にやられるんだ。ありがたく思えよ」

「冗談！」

『Stand by ready』

修斗の意志を汲み取ったベレッタが、バリアジャケットを即座に形成する。

「我請うは創造の力。出でよ錬鉄！」

レアスキル  
希少技能により召喚するのは、GNソード？。

ビームライフルと実体剣が一体化した、遠近両用の万能武装だ。

ベレッタは腰にガンホルダーに装着し、GNソード？を2刀流の形で構える。

「ふん、粋はいいみてえだな。んじゃ、始めるぜえっ！」

VF-27は、手に持つ銃粒子砲を打ち出した。

それが合図となって、戦いの火蓋が切って落とされる。

それなりに威力のあるビームを横に跳んで避けると、素早く接近してGNソード？を交差するようにして振る。

VF-27はそれを抜き放ったブレードで迎え撃つ。

「ほう、反応いいじゃねえか。どうやら楽しめそうじゃねえの」

「ああ、そうっ！」

一層の力を込めて弾き、すぐさまベレッタを引き抜いて連射する。

男はそれを驚異的な反応でかわしてみせ、反撃とばかりにビーム砲の光条で迎え撃つ。

激しい攻防。

そこは2人だけしか 戦いに参加しているものでしか立ち入ることを許されない、魔の域であった。

だが。

「がつ……………！」

ビームを避けたばかりで体勢の整っていなかった修斗の腹に、何者かの蹴りが入る。

「誰だ！？」

呻きつつ、腹を押さえながらもすぐさま立ち上がるうとする修斗の目に飛び込んできたのは、数十人は超えるかという規模の黒服たちだった。

皆一様に、百足のような衣装の仮面を纏っている。

「これだけの数でやれば、たとえ創造者でも敵わねえ。だろ？」

V F - 27 が、そう嘲笑する。

確かに、そのとおりだった。

多対一でことにあたるのは、戦いに勝利するにあたって最も単純、且つ合理的な手段である。

こんな場所でマクロスやバルキリーを創造するわけにもいかないし、実質彼の対多人数戦においての最大攻撃手段は封じられたようなものだ。

そう考えている間にも、事態は進んでいった。

黒服が次々に修斗へ襲来し、その拳で、蹴りで、肉体を蹂躪しようと迫り来る！

「くっ……………！」

慌てて、GNソード？で迎撃しようとするも。

「しまった！」

両腕を、いつの間にか後方から接近を許していたらしい黒服に絡めとられる。

これではソードを振るうことも、ベレッタで蜂の巣にすることも、また力を使うことさえままならない。

黒服たちが、今にも修斗に襲い掛かろうとした、その時。

「はあっ！」

銀の剣閃が、黒服たちを薙ぎ払った。

「なっ！」

これに慌てたのは、VF-27だろう。

予想もしない増援に混乱する敵の目の前で、悠然と地に降り立ったのは、訓練を見学していたはずの隼人だった。

「やつ。随分手間取ってるみたいじゃねえの、うん？」

「お、お前は……………」

「やあ、あんたがボス？　しかし、ドーパントにバルキリーとは。もはやリリなのの世界とは思えねえ面子だな……………こりゃ」

そう苦笑しながら、隼人は敵と同じくらい呆然としている修斗を横目に見る。

「たく、立てよ。遅いから心配したんだぜ？」

「あ、あんなことした僕を、心配してくれたって言うの？」

「馬鹿言つな。俺はお前が嫌いだ。心配していたのは、はやて達と龍也の方だ」

「じゃあ、どうして……………」

「そんなの決まってるだろ。お前に生きていてもらわなきゃ、お前の考えを改めさせることが出来なくなるからな！」

隼人はそう叫ぶように言い、ぱつ、と振り返って、

「だから、さっさと立ちやがれ！」

手を差し出した。

それを修斗はやや呆然としたように見つめ

「……………それは、難しいね」

手を取った。

「いいよ。変えられるものなら変えてみな」

「はっ、そうこなくちゃな」

立ち上がり、2人は互いに不敵に笑い合う。

友情でもなんでもない、言葉で言い表すことの出来ない信頼が、そこにはあった。

「くっ……………てめえら、やっちまえ！」

V F - 27の言葉に我に返る、黒服 マスカレイドドーパント達。

その視線の先で、

「はっ、ドーパントには、やっばこれだろ」

隼人は紅く輝く、2つのスロットがついたモノを取り出した。

「それは……………」

「Wドライバー。龍也が、絆を深めるにはこれだ、とか言って渡しやがったわけだが……少し違うな」

「ははっ、そうかもね」

笑う修斗に隼人は頷き、Wドライバーを腰に装着する。

同時に修斗の腰にも、同じものが出現した。

そして。

「行くぜ、修斗」

『JOKER!』

「うん」

『CYCLONE!』

「変身!」

プッシュボタンを押し、ガイアウイスポー機械音声<sup>ガイアウイスポー</sup>が流れた緑と黒のメモリースティックを、ドライバーに装填した。

修斗の腰に装填されたサイクロンの緑のメモリが隼人のドライバーに転送され、それを押し込み、また黒のジョーカーメモリーを差し込んで、Wの文字を描き出すように展開する!

『CYCLONE! JOKER!』

疾風と切り札の記憶が響き合い、ハーモニーを奏でる。

次の瞬間、そこには白いマフラーを風になびかせた  
の姿があった。

英雄<sup>ヒロロウ</sup>

「さあ、お前の罪を数えろ！」

### 第13話「創造者、機動六課へ」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「更新お待たせしました&やっちゃまったー！ー！ 神崎です」

リオス「最近更新が速くなり嬉しい限りです。リオスです」

神崎「いや、しかし本当にやっちゃまった感がありますね今回は。バトルないと言った癖にバリバリバトってるし、散々仮面ライダー出したから自重しようと思っただ先に出しちゃうし……」

リオス「どうなっちゃってるわけ？」

神崎「言い訳の機会を与えてくれるのか!？」

リオス「う、うん、まあ」

神崎「え、では言います。まず前者ですが、よく考えたら綾崎先生の、笑う男先生に対する第一印象が最悪であることに気付いたんですよね」

リオス「まあ、いきなりああいう扱いを受けたわけだからねえ」

神崎「だから、一度彼らの腐れ縁を繋げるイベントを出さなきゃならなかったわけです。ぶっちゃけ六課運用しながらいがみ合うのも鬱陶しいんで、本格始動する前にお2人にはそれなりに仲良くなっていたできます」

リオス「なるほど。で、後者は？」

神崎「これは簡単！ 今朝のWを見て再びWが書きたくなくなったただそれだけ！」

リオス「……………はあ」

神崎「え？ なんで溜め息つくの？」

リオス「それでは次回、『創造者、共闘』にも、ご期待下さい」

神崎「え、ちよつと待ってよ〜！ あ、感想をいただきました水玉先生、ラモン先生、H a g a i a z先生。感想ありがとうございます！」

この小説を読んでくださった皆様方へ。

いつも本企画作品をご愛読頂き、ありがとうございます。

つきましては、作者の学校にて試験期間が迫っているため、来週の本作品の更新をお休みさせていただきます。

思いつきり私用ですが、どうかご理解の程を。

また他のリリカルなはや仮面ライダーディケイドの更新は、いつも以上にペースは遅くなると思いますが順次していくつもりであります。

それでは、再来週までしばしの別れを。

神崎でした。

## 第14話「創造者、共闘」

「はあああああああつ！」

Wは変身を終わると、修斗の体を物陰に隠し、突撃した。

マスカレイドドーパント達の猛攻をかわし、お返しとばかりに拳を叩き込む。

2人の息はぴつたり……とまではいかないものの、ズレなど誤差の範囲内であり、結果的に2人の力を纏め上げ、戦えているようだった。

だが、依然としてマスカレイドドーパントの数は減らない。

唯一の救いは、VF-27、バルキリードーパントが攻撃に参加しようと思わず、マスカレイドドーパント達の後方で静観しているという点だが、このままではこちらが消耗するだけだ。

「よし、メモリを変えるぞ」

「了解！」

修斗の宿る右側                    ソウルサイドが、紅いメモリを、隼人が体のベースとなっているWの左側、ボディサイドが銀のメモリを、それぞれベルトの脇から取り出し、ボタンを押す。

『HEAT!』

『METAL!』

それをそのまま、マスカレイドドーパントを蹴り飛ばし、サイクロンとジョーカーのメモリを抜き、代わりに挿入した。

『HEAT! METAL!』

ソウルサイド、ボディサイドの双方でハーフチェンジが起こり、Wヒートメタルへと姿を変える。

炎熱と闘士の記憶を宿した赤と銀の戦士が誕生し、背には棍、メタルシャフトが出現する。

Wヒートメタルはマスカレイドドーパント達の群れへ突撃した。

メタルシャフトを滅茶苦茶に振り回し、それだけで周囲のマスカレイドドーパント達はその美しくも猛々しい銀の軌跡に巻き込まれ、壁に激突して意識を刈り取られていく。

「よし、とどめだ!」

隼人が左半身を操作し、Wドライバーに装填されたメタルのメモリを、メタルシャフトの中心部に備え付けられたマキシマムスロットへ挿入した。

『METAL! MAXIMUM DRIVE!』

メタルシャフトの両端に、滾る炎熱の輝きが収束していく。

Wヒートメタルはそれを、回転斬りの要領で薙ぎ払った!

「はあああああああああつ！」

「ぐあああああああつ！」

断末魔の叫びと爆炎を同時に上げて、倒れ伏す仮面の黒服達。

炎が収まり煙が晴れると、立っていたのはWヒートメタルだけだった。

「……………やったか」

「そうだね。……………！ 隼人、後ろっ！」

「何っ！？」

修斗の叫びで、すぐさま後ろを振り返るWヒートメタル。

振り向いた彼の視線の先には、重エネルギー砲をチャージし終えたバルキリードーパントの姿があった。

（しまった！ これまで奴が動かなかったのは、確実に砲を当てられるチャンスを狙っていたためか！）

気付くが、だが僅かに遅い。

振り向いてメタルシャフトで迫るより　　さらに言えば、中距離専用のトリガーマモリにハーフチェンジするよりも遙かに、重エネルギー砲がWを貫く方が早い。

「くそっ……………」

「さよなら、だな」

重エネルギー砲から放たれた光条が、Wの体を貫

『ENGINE! MAXIMUM DRIVE!』

かなかった。

突如背後からくの字に湾曲した剣戟が飛来し、重エネルギー砲と激突して相殺する。

「今のは……………」

「隼人、後ろだ!」

2度目の言葉。

だが、今度は敵の存在を知らせるそれではない。

Wの後ろから、1振りの片刃の剣を手に疾走する、紅い影が見えた。

「大丈夫?」

「仮面ライダーアクセル……………。中身は、龍也か?」

「1」名答」

短くそう言い交わすとすぐさま、2人の仮面ライダーは眼前の機神

を見やる。

「また増援か……。ちっ、厄介な。こうなったら……」

バルキリードーパントは懐から何かを取り出した。

それは。

「ガイアメモリ？」

「どうする気だ？」

「へっ、解んねえか？ こうすんのさっ！」

『WEATHER!』

ガイアウイスパー  
機械音が辺りに響き、新たにウエザーのメモリを挿入したバルキリードーパントの体が見るみる内に変貌していく。

体には白の色が混ざり、特徴的な、兜のような頭部や肩当てといった、ウエザードーパントの特徴が現れる。

「見る。これこそが俺の最終携帯、ウエザーバルキリーだ！」

「メモリの複数同時使用!？」

「そんなこと、出来るはずが……!!」

「はっ、現に出来てるだろうが。さあ、第2ラウンドの始まりだ。今度はこうはいかないぜっ!!」

言つと、ウエザーバルキリーは雷を発生させ、2人に落雷で攻撃する。

「ぐっ……………」

「うわっどー!？」

なんかかわしていく2人だが、このままでは先程のマスカレイドドーパントとの戦闘同様、こちらの不利だ。

「そろそろそろあー!」

「くそっ、どうすれば……………」

「龍也。もしかして、ツインマキシマムに必要なカードとか入っていないか?」

「ツインマキシマム?……………そうか!」

隼人の言葉の意図に気付き、早速念じてみる。

呼び出すのは、荒ぶる野生の記憶を内包した、白きガイアメモリのカード。

バトルブッカーから勢いよく飛び出してきたのは、Wがそれを用いた姿だった。

「いくよー!」

『FORM RIDE………W、FANG×JOKER!』

声が鳴り響くと、どこからか鳴き声を上げて、AIにより自律行動する恐竜型ガジェット、ファングメモリがかけてきて、ウエザーバルキリーへ体当たりする。

「がっ、このっ、何だこいつはっ!?!」

ある程度攻撃を加え、敵がよるめき雷撃がやむと、ファングメモリは変身を解いた隼人と、物陰に寝かされていた修斗の下へ跳ねてくる。

「よし、今度はお前が体側だ」

『JOKER!』

「解ったよ」

『FANG!』

ジョーカーメモリを隼人がドライバーへ挿入する。

それは今度は修斗へと転送され、修斗は素早くファングをファングメモリへ変形させ、Wドライバーへ挿入した!

『FANG! JOKER!』

現れたのは、白と黒、2つの対照色を組み合わせた戦士。

荒ぶる野生の魂は全てを切り裂き、砕き、蹂躞する。

「……………よし、第2ラウンドだっ！」

隼人の言葉を合図に、戦いは再開された。

『ARM FANG!』

Wのファング側の腕に牙のような刃が現れ、それを使いウエザーバルキリーの体を存分に切りつける。

『ELECTRIC!』

続いてウエザーバルキリーの眼前に躍り出たアクセルが、電撃を帯びた片刃エンジンブレードを手に肉迫し、同様にありったけの斬撃を叩き込んだ。

「ぐあああああつ……………この俺がつ……………！」

一旦離れると、大きく仰け反ってその勢いで倒れこむウエザーバルキリーを目の前に、龍也と隼人は言葉を交わす。

「隼人、あいつ……………」

「ああ、なんだかメモリの力を引き出しきれない感じだ」

ウエザーバルキリーの戦い方は、明らかに力をそのまま振り回しているだけの単純なもの。強力なものを連発しているだけにまともにくらえば痛い。単純ならばそれだけ攻撃パターンも読みやすい。

だから、ここで次に繰り出してくる攻撃は

。





「ぐあああああああつ！」

絶叫と共に爆炎が上がり、2つの生体コネクターからメモリが排出される。

男が倒れるのと、メモリが地に落ち砕け散るのは、ほぼ同時だった。

「やったか……………」

安堵し、変身を解除する3人。

だが、異変は唐突に起こった。

「ぐあああああああ—————!?」

倒れていた男が突然、絶叫を上げて苦しみ悶え始めた。

「な、何だ!？」

「解らない。解らないけど、これはたぶん……………」

瞠目する修斗に、淡々と説明を始める龍也。

だが、彼が真実を告げる前に。

「あ、あああああ……………」

男の体は生体コネクターに蝕まれ、その身を黒く変色させ  
遺言となる言葉を遺す間もなく、地面へ溶けていった。

「メモリの複数使用の、反動」

「こうなると、敵とはいえ哀れだな……………」

「ふん、当然の末路だよ」

相変わらずの態度で言う修斗に、龍也は苦笑し溜め息をつく。

仲直りのつもりでWドライバーを渡したが、これでは何も変わらないのではないか、という諦めにも似た気持ちになる。

しかし。

「さ。行こうか隼人」

「……………え？」

「ああ。行こうぜ、修斗。早くしないと模擬戦が終わる。最大の見せ場を見逃しちまったら、洒落になんねえしな」

「あ、あれ……………？」

「うん。よし、行こう」

「え、ちょ、ちょっと2人共！ 待ってよ……………！」

さっさと歩いていってしまう2人の背中を慌てて追いかけて、龍也もまた帰路へつく。

彼らの家

機動六課へ。

その後、帰って荷物をはやてへ渡し、模擬戦の残りを観戦した。

原作どおりにティアナが多弾殻弾により見事ガジェットを撃破。昼食をとることとなった。

なっただが。

「おい！　なんで俺も行っちゃだめなんだよ!？」

「だって、呼ばれてるのは僕だけだし」

何を揉めているのか説明しよう。

その後昼食をとろうとした3人の前にはやてが現れ、

「食堂の冷蔵庫に作りすぎてしまった料理が入つとるんやけど、それこれ以上とつとくと悪くなつてまうから、悪いんやけど修斗、お昼に食べておいて。よろしゅうな」

という言葉を残し、去っていった。

そしてそれを傍で聞いていた隼人が、一緒に食べてもいいかと頼み込んだのだが……。

「別にいいだろ？俺達仲間じゃないか！」

「そういうところまで仲間になつた覚えはないよ。はやての料理は僕だけのものさ」

……と、つまりはこのように、隼人がついていくかないかで揉めているのである。

「なんだよ、ケチ！」

「まあまあ。確かにはやては僕らには言つてなかつたし、仕方ないつて」

龍也が間に入り、なだめようとする。

そこへ。

「……………龍也も、食べたいの？」

「え？ そりゃまあ、かの名高いはやての料理なら食べてみたいけど……」

「じゃあ、いいよ」

「……………は？」

思わぬ答えに、思わず龍也と隼人の声が重なる。

それに答えてか、或いは無視してか、修斗は続けた。

「おい、俺がだめで、こいつはいいってどづいうことだよ！？」

「龍也だから、だよ？」

「納得できるかあああああ！」

「はいはい。じゃあ行こう、龍也」

「え、ちょっと待って！ 引つ張らないですよ……！」

隼人の話を聞こうともせず　　むしろ鬱陶しそうな様子で龍也を引つ張っていく修斗を、呆然と見つめる。

「ふ、ふざけんなあああああああああ……！  
……………！」

絶叫と共に隼人が我に返ったのは、修斗と龍也の姿が通路の角に消え、暫く経った後だった。

## 第14話「創造者、共闘」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「どうもすみませんでしたぁー……！」

リオス「全く、2週間も普通放置する？ 1週間はともかく、2週間は完全に私用じゃないか」

神崎「そうなんだよね。延期を申告しておきながら真に申し訳ないです。すみませんでした」

リオス「今後はこういうことないようにしなきゃね」

神崎「そうだね。反省してます……」

リオス「はいはい、それじゃ、感謝コーナーいこう」

神崎「う、うん、そうだね。えー、感想をいただきました水玉先生、綾崎先生、ありがとうございます！」

リオス「さて、今回は和解したかと思いきや……」

神崎「腐れ縁なんてこんなものさ。翔太郎と照井だって最初はこうだったんだし、これからのいい感じになってくさ」

リオス「そうだね。しかし、なんだか笑う男先生がどんどん嫌味なキャラに……」



## 第15話「異端の創造者？ / 前編」

機動六課の隊舎にて、修斗達が襲撃を受けていたその頃。

ミッドチルダ郊外にあるとある廃屋にて、1人の青年が、複数のごろつき達と対峙していた。

銀の髪を揺らし、嗤う青年の名は、黒曜零禍。

創造者達の中で唯一残酷な心を持ち、犯罪者を狩る狩人<sup>ハンター</sup>である。

そして目の前にいるのは、ごろつきと言えども下っ端では決してない、いわば精鋭ばかり。

マフィアとつながりを持っているグループで、魔導師も何人も抱えている、というのは、前もって零禍も上司から聞いている情報である。

「よう、ガキがこんなところに来てどうした。迷子か、うん？」

ごろつき達の1人、顔に大きな傷のある大男がそうわざとらしく問うと、ごろつき達の間で笑いが起こる。

だが、嘲笑を受けても尚、零禍は笑う。

「ここいら一带を荒らしまわっているつつつ犯罪集団、ラグバースユってのはてめえらで間違いいえな？」

唐突に問う零禍に、ご機嫌な態度を崩そうともせず男の1人が答え



つまりはその所持という事実こそが、彼らが犯罪者であることを証明したようなものである。

そして、そんなものを使われれば、普通の人間はまずその瞬間、胸を打ちぬかれて絶命していただろう。

そう。それが、普通の人間であるならば。

「な……に!？」

男達は、目の前の光景が信じられないかのように口をあぐりと開けて、今その奇跡をやったのけた男を見つめていた。

対し男は、相変わらずの狂気な笑みを浮かべて、手に掴んだそれを見やる。

「へえ、大したモン持つてるじゃねえか。今時質量兵器たア珍しい。それも随分新しいタイプだな？」

驚愕に未だ固まったままのごろつき達を放って、零禍は手に持った物体　　僅かに煙の上がった鉛球を手で弄びながら、そう愉しげに言う。

そして、

「ほら、返してやるよ。受け取りなア！」

という言葉とともに、鉛球を投げ返した。

まるでダーツの矢を投げるような軽いモーションで放たれた弾丸は、

男が放った時の数倍の威力を以って壁に当たり、かなりの厚さを持つ壁をあつさり貫通した。

「……………ば、ばばば、化け物ッ！！？」

侍らせていた女を後ろに下がらせ、無駄だと解つていても鉛球を発射し続ける男。

その周囲で、他のごろつき達も一斉に拳銃を取り出して、撃ちだした。

何十という銃弾が、零禍へ迫る。

「……………起きろ、ヴァルハラ」

『……………了解。ジャケット、構築』

零禍の言葉に、ヴァルハラと呼ばれたデバイスは静かに、かつ事務的な口調で完結に答え、長さ3mにも及ぶ長大な長剣型デバイスへと変貌を遂げる。

「それは……………」

「はははっ！ どうだ、怖いか！？ だが光栄に思いな」

言いながら、零禍はヴァルハラを振りかぶる。

巨大な剣の刃が、彼の細腕に …… しかも片腕に軽々と持ち上げられる様は、まさに異様。

だが、それでいてこの青年なら当然なのかもしれないという、妙な感覚も同時に運んでくるその光景はまさしく、狂気そのものだった。

「この、戦乙女の楽園の名を冠した剣に踏み潰されるんだからなア！」

言葉を残し零禍は忽然と消えた。

「き、消えた………！？」

男達が一斉に辺りを見回す。

だが、周囲には零禍の姿はなく、彼らにとっては見慣れた風景が広がっているのみ。

しかしその実、零禍は既に彼らを何処からか虎視眈々と狙っていることに、男達は気付くことが出来ない。

そして。

「ぎゃあああああああああ！」

1人の男が、突然断末魔と血飛沫を上げて倒れ伏す。

それは、男が切り裂かれた証。

ざっくりと斬られた裂傷からは臓物が顔を覗かせ、噴出した血潮が絶望に彩られた顔を赤く染める。

しかも、犠牲者は彼だけに留まらない。

見えない恐怖に翻弄された烏合の衆はあっという間に蹴散らされ、地をまるでペンキをぶちまけたように赤く塗り上げる。

その上に重なるは、骸の山。

あるものは、上半身と下半身を切り離され。

あるものは、四肢を完全に切り落とされ。

あるものは、首を切り落とされ。

その全てが、見るも無惨な死体へと成り代わっていた。

それらにもはや、人間としての原型はない。

あるのは、青年の圧倒的なまでの暴力の爪跡のみ。

そしてその場には大量の血だまりと物言わぬ亡骸、そして

唯一生き残った男と、漸く姿を現した零禍だけが、空虚な空間に色彩を与えていた。

「お、おおおおお、おま、おま、お前、い、いいいい、一体つ…！？」

完全にその意識を恐怖に支配され、もはやガタガタと震えるしかない男。

その男の様子に感じたとてつもない愉悦を表情に滲ませ、零禍は言った。

「ほお。お前、よく見たら最初によく喋ってたヤローじゃねえか。どうした？ 何をそんなに怯えている？」

言いながら、零禍が一步近寄ると、男はそれに対応するかのようにならずさる。

「おいおい、それはないだろう？ 俺は、てめえらがしていることと同じことをしたンだけ？ てめえらが、あっちこっちで人殺しまくってんのは既に調べがついてンだよ」

言い、零禍はヴァルハラを持っていない方の腕で天井を仰いだ。

その顔に、狂気的笑みを滲ませて。

「いいじゃねえか。お前は十分殺したンだろう？ なら同じ方法でお前が死んだって、文句は言えねえはずだ」

「ち、違うー！」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃになり、さらに失禁までした無様な姿で、男は尚も被りを振る。

「違う？ 何が違うってんだ？」

「あいつらは死んで当然だったんだ！ 虫けらだったんだよ！」

「はっ、虫けら、か……………」

零禍の足がとまった。男は漸く許してもらえたのかと勝手に解釈し、

体の緊張を解く。

それが、大きな勘違いであることに気付かずに。

「虫けらね。だがお前、1つ間違ってるぜ」

「な、何？」

「虫けらだからってむざむざ殺していいわけじゃあねえ。虫けらには虫けらで、時に俺達にそいつは面白エもんを見せてくれることだつてあるんだからよ……さて、時間だな」

言い、零禍は再びその足を動かした。

それに気付いた男は、なんとか逃れようと再び逃げ腰になる。

「く、くそつ、殺されて、殺されてたまるかよおおおおおおお  
おおおつ！」

男は、杖型のデバイスから砲撃を発射した。

5個ものカートリッジが排出されて、さらに全魔力をつぎ込んだ、  
極大砲撃。

大きさだけなら、なのはのスターライトブレイカーより少し見劣りする程度だろう。

それがほぼ至近距離で放たれ、零禍の全身を飲み込んでいく。

その光景に、男は漸く安堵した様子で溜め息をついた。

しかし。

「くっ、くくくく……」

突然正面から聞こえてきた声に、全身の毛が粟立つ。

「な、ななななな、何で?!」

「そんなの、お前程度のクズに教えてやる義務も義理もねえよ」

「た、助けてくれ! 頼む! 何でも……なんでもするからああああああっ!」

それを聞き、零禍は怪訝な顔をしつつも、またすぐに元通りの笑みを浮かべ……。

「因果応報だ、諦めな」

「ま、待つ……」

男の言葉は最後まで紡がれることなく、グチャリ、という耳障りな音だけが、存在感を以って反響した。

「戻ったぜ、クソ上司」

あれからたったの数時間後。

何食わぬ顔で銀髪を煌かせ、零禍は自らのオフィスに戻ってきた。

部屋の奥の席には、彼の上司である男の姿が。

ジル＝ナイトハルト。

零禍を直属に抱える管理局一等空佐であり、唯一、この世界で創造者以外に零禍が認めている存在でもある。

「……………報告は受けた。今回もまた、随分派手にやったようだな。能力？まで使って」

「あれくらい当然だ。それに、本気なんざ全く出しちゃいねエしな」

仏頂面で答える零禍に、ジルは大きく溜め息をついた。

だがそれもいつものことなのか、現場の惨状を事細かに映し出していたモニターにはもう何の感慨もないかのようにモニターを消して立ち上がると、ジルはコーヒーを淹れ始める。

と、彼が今コーヒークップの準備をしているそこへ、横からお声がかかった。

「砂糖多め、ミルクなし」

「……………たまには自分で淹れたらどうだ？」

「うっせえクソ上司。こちとら仕事終わりで疲れてんだ。ちょっとはサービスしろ」

そう言っつて、ジルには目もくれずに近くのソファに捨てるように投げたあった夕刊を拾って読み始めた零禍に彼は再び溜め息をつくときつちり注文どおりに零禍の分のコーヒーを淹れ、手渡す。

「で？」

「唐突に何なんだ、お前は？ 言っておくが、やつらの情報ならないぞ。私も今、探している真つ最中なのだからな」

「ちっ、使えねえ上司だ」

「それはお互い様だろう？」

「あ？」

何を言ってるんだ。耄碌したか？

そうとでも言いたげな視線を零禍が送ると、それをものともせず  
にやりとした笑みを浮かべ、ジルは言った。

「お前、この前私がせつかく示してやったやつらの情報、結局もの  
に出来ず逃げ帰ってきたではないか」

「うっせえ。あれは……………」

「あれは、何だ？ 私には、お前が意気揚々と狙っていた獲物に  
思われ抵抗に遭って返り討ちに合い、すぐごと引き下がってきた  
風にしか見えなかったが？」

凶星を突かれ、押し黙る。

こうして零禍を弄ることが出来る数少ない人物。

ジルとは、そういう男なのである。

「いいさ。要するに、私とお前はおあいこというわけだ。今日はも  
う仕事もない。たまには早く帰って、ゆっくりと翹を伸ばしたまえ」

そう言って、ジルはさっさと書類の整理に没頭し始めてしまった。

一旦こうなると、彼は何を言っても反応しなくなる。

それが解っている零禍には、もはやここにいる理由は何一つ残って  
いなかった。

だからこそ夕刊を適当にソファアへ放り出すと、さっさとドアへ向

けて歩きだし、ドアノブに手をかけたのだが

「……………最後の一撃、何故かわさなかった？」

今日に限っては例外だったらしく、珍しくかかった背後からの声に、振り返り様に零禍は答えた。

「言ったただろうが。俺は本気を出さない。あの場面じゃ確かにかわした方が早かっただろうよ。だがな、それでも俺に？それをさせるほどの力？はなかった。俺を本気にさせてくれねえ限りは、本気出しても満たされねえからな」

そう言い放つ零禍の顔は真剣だった。

まるで、それだけは譲れないとでも言うかのように。

それはある種、慢心だろう。

だが、それが黒曜零禍という男なのである。

本気にさせてくれる、相応しき相手にはその最大限の力を以って対し、そうでない者  
雑兵は決してその全てではない力で徹底的に叩き潰す。

それが彼の信念  
というよりは嗜好に近いかもしれないが、それでも彼が、それをモットーとして日々を戦っていることは事実である。

零禍の顔にそれ以上は無駄だと判断したか、そうか、と短く言って、再び書類に視線を移すシル。

「邪魔したな」

言うも、既に耳に入っていないのか、返事が返ってくることはなかった。

ドアを閉め、オフィスを後にする。

彼らのオフィスは、クラナガンのはずれ、町の末端にあった。

何故そのような場所にあるのかは、彼らに課せられた役職に關係しているのだが、その話はここでは割愛させていただくことにしよう。

零禍は簡素な軽々とした鞆だけを背負い、ただひたすた、自分の住むマンションの1室へ向けて歩き出す。

オフィスが辺鄙へんびなところにあるのに対し、彼のマンションがあるのはクラナガンの街中。

行くには、今歩いている閑静なとおりを歩いていかなければならぬ。

吹き付ける風に溜め息で返しながら、零禍はひたすらに無感情に歩いた。

だが。

「……………ッ！！？」

零禍の表情が一変する。

彼の視線の先には、1人の男の姿があった。

風にさらさらと黄の短髪をたなびかせながら、黒いコートに身を包んだその男は、流れるような動きで交差点を曲がった先へと消えていく。

「まさか、あいつは……………!？」

確かめるしかねえか。

そう呟き、零禍もまた、男が姿を消した角、零禍のマンションがある方向とは反対方向へと駆け出していった。

第15話「異端の創造者？/前編」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「ごめんなさあああああああ！（スライディング土下座）」

リオス「全くもう！ どうしてこんなに伸ばすかな、この作者さんは！」

神崎「ごめんリオス！ 謝るからグロリアス突きつけるのは勘弁して！」

リオス「もう、しょうがないなあ……………」

神崎「ふうう、助かった。しかし、書けば書くほどなのは作品世界から遠ざかっていく不思議」

リオス「仕方ないでしょ、まだ本編ストーリーに入っすらいなんだから。しかし水玉先生、半端ないな（汗）」

神崎「口調や性格、完全に一方通行さんだからね。それにしたって、今回はちょっとやりすぎたかもだけど」

リオス「で、上司さん……………もとい、ジルさんが漸く本格登場か。なんだか抜け目ない人みたいだね」

神崎「まあねー。もはや最高の狂気キャラと化した水玉先生と対等でいられるには、やっぱりそれなりに肝の据わった人じゃないとね。

あ、ここで勘違いしてほしくないのは、水玉先生は完全悪じゃないよってことだね。管理局に所属してるし、裁くのは罪人だけ。まあ、言うなればダークヒーロー、ってところかな」

リオス「なるほどね。まあいかに罪人を裁くといっても残忍に殺しちゃってるわけだし、普通の主人公とは言いがたいよね」

神崎「だからこそ、タイトルも『異端の創造者』なんだよ。まあ、ダークはともかく主人公<sup>ヒーロー</sup>っぽさが出せているかは甚だ疑問ではあるけど」

リオス「なんとかするしかないでしょ、そこは」

神崎「まあ、そうなんだけどね」

リオス「さて、次回はこれの続き？」

神崎「そうだね。敵幹部の登場と、水玉先生の能力の本格的なお披露目。激闘をお見逃しなく！」

リオス「なるほど」

神崎「それでは次回、『異端の創造者？/中編』に、」

リオス「ご期待下さいー！」

## 第15話「異端の創造者？／中編」

(こんなところまで……………何の用だ?)

金髪の男を追って路地に入った零禍は、そう訝しげに目の前の男を見つめた。

先程から路地をくねくねと、まるで蛇のように曲がったり行ったりを繰り返すばかりで、何のアクションも起こさない男に舌打ちし、零禍はまた1つ曲がり角へ消えていくその姿を追い、気配も足音も極限まで押し殺して、同じように角を曲がる。

だ　　が　　。

(おかしい。さっきから、この辺りをぐるぐる回ってるだけだ)

帰り道が解らなくならないよう、デバイスに収納した地図にルートを記録しながら進んできたが、その結果はモニターに表れているとおり、ぐるぐると円を描くのみだ。

(どうやら、気付かれてるみてエだな……………)

ヴァルハラが映し出す地図を見ながらそう心の中で呟き、小さく舌打ちする零禍。

先程からぐるぐると、まるで渦を巻くように、段々と中心に近づいていく。

そして、その目に当たる中心部分にあるのは　　。

( 廃ビル、か )

おそらく、そこで一気にかたをつけるつもりなのだろう。

だが、誘い込まれていると解って手を拱く零禍ではない。

( 上等 )

零禍はむしろ、率先して相手の挑発に乗ることにした。

それは自身の実力を信じているからということもあるが、ここで手を拱いている隙に逃げられてしまっターゲットては、せつかく見つけた標的を取り逃してしまふ。

今までずっと、目の前の男を含む敵組織を追ってきた零禍としては、絶対に避けたい事態だ。

やや、ぐるぐるぐるぐると円を描くのを繰り返す、漸く目的の廃ビルに辿り着いた時には、既に日は落ちていた。

中へ入ったのを見計らって、零禍も音も立てず、素早く滑り込むようにビル内へと入り込む。

もう気付かれているのだから無駄な努力だが、少しでも奇襲の確率を減らすための行動だ。

しかし零禍の努力も空しく、ビルに入った途端、強烈な一撃が頭上から降り注いだ。

にべもなくヴァルハラとバリアジャケットを展開し、受け止める。

「ほう。今を防ぐか」

愉しげな、だが同時に忌々しげな声と、大剣と男のガントレットがヴァルハラぎりぎりど鬨ぎ合う音のみが、無音のビル内に反響した。

「こんの……やるオツ！」

一息にヴァルハラでガントレットを押し返す。

男は一瞬驚愕に目を開くも、軽々と空中で姿勢を整え、着地する。

「今の一撃は、それなりに力をこめた一撃だった」

真っ直ぐに零禍を見据え、そう口を開く男。

「普通の相手であれば、あの一撃で既に勝負もついていたはずだ」

「はっ。そりゃ、俺が普通じゃねエっつーことだろオが」

そう不敵に笑い、ヴァルハラを構え直す零禍。

「一つ聞かせる」

「何だ？」

「てめえ……？七つの大罪？で間違いねエか？」

七つの大罪。

人間にあるという七つの罪。強欲、色欲、怠惰、嫉妬、暴食、傲慢、憤怒。

その全てを解き放ち、人間を超越した存在として悟りを開く。そんな怪しげな宗教団体が、密かにミッドの貧民層を中心に広まっているのだという。

一見普通の宗教団体。だが、裏で彼らが質量兵器やデバイスといった、所謂軍事物資の流通に関与しているという噂が、実しやかに囁かれていた。

噂の真偽は定かではなく、当初管理局も表立って動く気配は見せなかったが、事態は収束することはなく、むしろ、悪化の一途を辿っていた。

七つの大罪信者を名乗る人物の犯罪が後を絶たず、中でもバスを狙った自爆テロなどは記憶に新しい。

そして、そんな信者達が揃って口にする言葉が

「創造者に死を、か。言ってくれんじゃねエか」

「よくもまあ、嗅ぎつけたものだ。何故解った？」

「目撃情報が上がってんだよ。逮捕した七つの大罪関係者の中に、金髪の男を見たって連中がな。しかも、1人や2人じゃねえ。捕らえた信者達は拳つて、その男のことを口にするぜ？ それって……あんたのことだよなア？ 信者達の中には、右目に大きな傷があるっつーことを言ってるやつらも多い。その傷が何よりの証拠だ。言い逃れは出来ねえぜ？」

言われ、右目を軽く触る男。

「フツ、見事だ。そう。我こそ、七つの大罪が1人、名を？暴食？のグラ」

それが、彼の正体だった。

「暴食。確かこの前会ったやつは、？色欲？と？傲慢？だったか」

「そうだな。この前はルクスリアとスペルビアが世話になったようだ」

「ま、それほどのことはしてねエがな、俺は。んで、どうする？やるか？」

「そうだな……………」

グラはしばし逡巡する意を表し、やがて、

「ふむ、やはり2人の仇討ちを遂げずにこのまま逃げ帰っては、2人に会わず顔もない。ここは……………相手になるとしよう」

と、言って構える。

「勝手に殺してやるなよ」

軽口で返しつつも、零禍はヴァルハラを油断なく構える。

「七つの大罪がー、？暴食？のグラ」

「時空管理局第3暗部所属、黒曜零禍」

「いざ尋常に……」

「勝負、つてなア！」

口上を終え、2人は同時に駆けだした。

零禍は一気にグラの眼前へ躍り出ると、ヴァルハラを振り上げる。

(速い！)

グラは零禍の速さに心の中で賞賛を送りつつ、自身もまた驚異的な反応とスピードで、零禍の斬撃を、突きを、尽く回避し、

「ぬうんっ！」

お返しとばかりに、ガントレットのはまった重厚な拳を繰り出した。

「なるっ！」

紙一重で避ける零禍。

掠った髪が数本持っていかれたのを若干の苦渋を以って見つめ、飛び退る。

「なるほど、なかなかの腕だ。反応、速度、パワー。どれをとっても人間とは思えん。大口を叩くだけの実は備えているというわけか」

「褒めても何も出てこねエぞ？」

不敵な笑みで答える零禍に、グラもまた同様の笑みをその顔に宿して、再度拳を構えた。

「ならば、その力に敬意を表して……………」

言うが早いか、グラの姿が塵気楼のようにぶれ

「最高の力で、お相手するでしょう」

次の瞬間、？背後から？聞こえた声に零禍は背筋が凍る思いで、ヴァルハラを背後に回した。

次の瞬間、刀身に絶大なる衝撃が加わり、後ろ手に持っている程度で大して力の籠っていない大剣ごと、零禍は吹き飛ばされた。

「がっ……………」

宙を舞う零禍の体。

だが、その後の零禍の対応は早かった。

空中で素早く体勢を整えると、着地と同時に反撃の手を講じる。

「はあっ！」

ヴァルハラを横に屈ぐ。

それだけで衝撃波が生まれ、地を這うようにしてグラへと迫る。

だがそれをグラは拳の一突きで相殺すると、素早く零禍へ迫り、軽いフットワークで殴り飛ばす。

「があっ……………」

そして、続け様に背中、腹と殴られる。

4撃目はなんとか掌で受け止めて防いだものの、

「ぬうんっ!」

蹴りが腹部へと突き刺さり、そのまま再び吹き飛ばされた。

「ぐ、うう……………」

壁の蜘蛛の巣状の亀裂が走り、それが衝撃を物語っている。

壁の破片が零禍へと降り注ぎ、彼が起き上がると同時に床へ落ちて、パラパラと音を立てた。

「出し惜しみ、してる場合じゃねエみてえだな……………」

よろけながらも立ち上がり、呟く零禍。

上げた顔に光る瞳に、映るのは、決断。

零禍は自らの力を開放する言葉を、その口より紡いだ。

「……………移動速度、プラス」

呟いた瞬間、今度は零禍の姿がぶれた。

そしてそのまま、グラへと肉迫する。

「何っ!?!」

今度は、グラの方が驚愕する番だった。

自分とほぼ同じ速度領域に踏み込んだ男の斬撃を、1つ1ついなしていく。

「小賢しいっ!」

グラは再び拳を振るった。

大振りではなく、零禍の速度に合わせ、小技を織り交せて隙を作ろうと狙う。

だがその1つ1つを零禍は丁寧に捌いていき、ある時はかわし、ある時は受け止めて、お返しとばかりに斬撃を叩き込む。

そして。

「はっ!」

「ぐうっ!?!」

大上段からの一撃で、ついにグラに重い斬撃が正面から押し掛かった。

ガントレットで防がれたものの、大剣の重さに一瞬の間動きが止まる。

「おらよっ!」

その隙を逃さず、零禍は横薙ぎの一撃をグラへと繰り出した。

それをグラは再びガントレットで受け止めるが、先程の零禍と同様、体勢の整っていない状態でそのような重い斬撃を完全に受けきることは出来ず、吹き飛ばされて壁に衝突した。

「はっ、これでどう……………」

壁を粉々に粉碎するグラへ、大剣の切っ先を向け、しかし

「な……………!?!」

ぐらり、と視界が揺れ、零禍は何もない、何もされていないその状況でたたらを踏んだ。

目眩がし、脱力感が気だるく押し掛かる。

「い……………ったい、何……………しやがった……………!?!」

顔を抑えながら睨みつける零禍の視線の先で、グラは体にかかっていた壁の瓦礫をガラガラと音を立てながら取り除き、言った。

「なに、貴様の力を少しばかり頂戴しただけだ。なかなか美味かつ

たぞ」

言いながら立ち上がり、傷の出来た顔で不敵に笑うグラ。

その傷も忽ち治っていき、ついには完全に元に戻った。

「ご馳走様」

「てめえ……まさか、俺の体力を食いやがったってのか………！  
？」

「性格には精神力、体力、魔力、その全てを攻撃が当たる度に吸収する、というものだ。………しかし、貴様も大したものだ。その身体能力、ただ貴様自身の身のみが成せる業ではなかるう」

「見抜いていたか。そうよ、俺のこの能力は概念付与。万物に概念を付与する絶対付加能力。どんなに柔らかいものでもダイヤモンド並……いや、それ以上の硬さを手にし、どんなに鈍重なものでも最高のスピードを手にする事が出来る」

「………反則級だな」

「てめえがそれを言うのかよ」

呆れたように言う零禍に、薄笑いで返すグラ。

その顔に浮かぶのは、絶対の自信。

どんなものにも臆することない、武人の覚悟だ。

「そうだな。……さて。互いに反則級を持つ者同士、殺し合おうではないか」

「言われなくても……やってやるよオ！」

ガントレットと大剣が月の光を反射し  
火花の放つ橙が、  
それをオレンジに染めた。

第15話「異端の創造者？／中編」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「本当にすみません！」

リオス「全くもう……。なんでここまで伸ばすかなあ」

神崎「ごめんなさい。なんか、凄く最近難産で……………」

リオス「全くもう。で？　今回は水玉先生の戦いだね。なんか、いきなりちよっとピンチ？」

神崎「まあそうかもだけど、一応言つとくこの2人、滅茶苦茶強いからね？　強いもの同士戦ってるから普通に見えるだけで」

リオス「そうなんだ。で、今回は戦いの決着？」

神崎「そうなるかな。ていうか皆様には申し訳ないのですが、今度から更新が不定期になりそうです。申し訳ありません」

リオス「何を今更」

神崎「うっ……………」

リオス「……………はあ。まあ、頑張つてよ」

神崎「が、頑張ります。それでは次回、『異端の創造者？／後編』も、」

リオス「ご期待下さい！」

## 第15話「異端の創造者？／後編」

「らあっ！」

「爆牙弾！」

また1度、大剣とガントレットが激しくぶつかり合い、火花を散らす。

もう何度打ち合ったか解らないその戦いの中で、形勢は僅かにグラに傾いていた。

双方とも、接近戦のパワーファイター。

身体能力の上では、ほぼ互角　　否、希少技能<sup>レアスキル</sup>？概念技巧？により底上げが可能な零禍の方が遥かに上だと言える。

では、生まれるこの差は一体何なのだろうか。

言わずもがな、グラの吸収能力によるものであった。

しかも、彼が吸収するのは魔力だけではない。

否、そもそもその魔力量がEXで、魔力切れの心配はないのだから、むしろ魔力吸収はほとんど脅威にならないと言っている。

むしろ問題なのは、魔力と同時に持っていられる？体力？と？精神力？の2つだ。

体力が奪われると同時に四肢が震え、精神力と一緒に思考力がそぎ落とされて意識が飛びかける。

無論ちよつとやさつとで陥落するほど柔ではないし、零禍自身そう思っていないが、少しずつ与えられる打撃は、それらをじわじわと掠め取っていく。

今また拳が顔を掠め、僅かな血と同時にあらゆる種の力が漏れ出ていくのを感じ、油断すると遠のきそうになる思考を必死に繋ぎとめた零禍は、まだまだ余裕の表情で立っているグラの姿を見つめた。

「さっきまでの威勢はどうした？」

挑発するように問うグラに、問いには何も答えず、ただ不敵な笑みで応じる零禍。

言葉がないのは、それだけ思考に余裕がなくなってきたという証。

それが解っているグラは、攻撃を加えつつ、さらに言葉を紡ぐ。

考える隙を、与えさせないために。

「七つの大罪をしつこく嗅ぎまわっていたのは、ミッドチルダの秩序を望むからか？………否、違うな。お前からは胡散臭い正義や偽善を振りかざす臭いがせん」

「はっ………犬以上に……大層な……鼻だな」

僅かな気力を振り絞って軽口を叩き、ヴァルハラを持って肉迫した。

足に誰にも追いつけぬ？移動速度？の概念技巧を加え、圧倒的なスピードで迫ると、グラの眼前にてそれを解除し、剣に絶対の破壊力を齎す？武器重量？、そして空間をも断ち切る？切断威力？の概念

技巧を加え、極限まで重く、鋭い斬撃をグラへと叩き込んだ！

「むっ……………！」

グラは直感的に体を捻り、今いる空間から抜け出るようにして、その凶悪な斬撃を回避する。

先程までグラがいた空間を斬撃が薙ぎ、空間ごと斬り取ったような斬撃の爪跡を背後の壁に深々と残す。

「「うっちやうちや言わずにかかってこいよ。じゃなきゃなあ……………」

言いながら、零禍はヴァルハラを腰溜めに構え

「……………死ぬぜえッ!？」

振りぬいた。

瞬間、目にも留まらぬ太刀筋がグラの上半身と下半身を切り離そうと襲い掛かる。

今度は剣に？移動速度？、自らの腕に極限まで身体能力を向上する？絶対脅力？の疑念技巧を付加したのだから。まるで音速を超えているように見える豪剣だ。

だが。

「ぬっっ!」

グラは、受け止めた。

あまりの速度に、回避は出来ないと踏んだのだろう。

その判断は決して間違ってはいなかった。

少なくとも人間の、それも常識の範囲内にいる魔導師を相手取る場合において、それは上策だったと言えるよう。

だが、それはあくまでも零禍がそうだったららの場合。

彼は違う。

常識を超える力を世界の旅人より授かった、創造者なのだ。

グラは吹き飛ばされた。

ガントレットごと体を錐揉み状に回転させながら、また1箇所の壁を粉碎し、漸くとまった。

「ぐっ、今のは、なかなか……………」

衝撃で内部のどこかを切ったか、血を口の端から流して、呻きながらグラは起き上がり立ち上がる。

しかし、既に零禍もいっばいっばいな状況。

グラもまた、今の激突で大きなダメージを負った。

零禍へクリーンヒットを与え、大きく体力を吸収することが出来ればグラの圧倒的有利となるが、たとえ今の状況でも、零禍へそれほどまでに大きなダメージを与えるのは至難だろう。

と、なれば、後に残っているのは。

(次で……………)

(決めるか……………)

大技による、一発勝負。

零禍はヴァルハラを、グラはガントレットであるベルゼブブを構えた。

最後の一撃に備え、力を溜める一時の静寂。

しかし。

「むっ……………！」

「ちっ、いいところで……………」

ここにきて建物の限界が来たか、ピシピシとひび割れを起こし崩れていく廃ビル。

廃ビルなので余計な被害はないだろうが、このままでは生き埋めになる。

それを察知してか、グラは溜めていたエネルギーを足にため、飛び退っていった。

「待て、この野郎オツ！」

零禍は追おうとするが、ベルゼブブによるブーストで速度を圧倒的に強化させていたグラの姿は、あっという間に何処かへと消え去ったあであった。

『It's dangerous.』

「ちいっ……………！」

デバイスからの警告に舌打ちしつつも、零禍もまた？移動速度？の概念を自らに付与し、超高速で回避した。

ラグバーシユの砲撃を生身で受けきった？耐久硬度？の概念付与を使えば瓦礫も何のそのだが、わざわざ自分から埋まりにくい道理はないし、第一そんなことをわざわざしようものなら上司に滑稽だと笑われる。

グラつく足を叱咤し概念付与を済ませると、零禍は元来た出口を一気に突っ切った。

その直後、限界を迎えた廃ビルが巨大な音を立ててバラバラに崩れ落ち、粉塵が澄んだ夜空を覆い隠した。

その頃、廃ビルから少し離れた路地裏。

そこに、辛くもビルの崩壊に巻き込まれずに済んだグラの姿があった。

その足取りは堂々としていて、つい先ほどまで死闘を演じたばかりの人物には到底お見受けし難い。

ガントレットは既に外して腰に収納済みである。

グラは裏路地の突き当たりにある行き止まりのところまで行くと、おもむろに右手を差し出した。

その先には、手形のような奇妙な紋様が描かれた張り紙が張られている。

そして、グラの手がその紙の絵に重なり合った途端、唐突にその紋様が光を放ち始めた。

青白く、神秘的な一方で、どこか怪しげなその光は徐々に強さを増していき、やがてグラの姿を全て包み込む。

次の瞬間、グラの姿はもうそこにはなかった。

奇妙な手形の紋様が描かれた紙も、先ほどの光と同様の青白い炎に焼かれ、ついには燃え尽きる。

誰もいなくなったその場に残されたのは、月明かりも届かない夜の裏路地の闇と、静けさだけだった。

「あ、お帰り、グラッ」

一方、裏路地から消えたグラは、とある空間に姿を現していた。

そこは何もない、言うなれば次元の狭間のような空間。

黒とワインレッドの光がうねり、時には猛りを繰り返す、亜空間だ。どうやら転送魔法の類でここまで来たらしいグラは、椅子に腰掛けて本を読んでいた色欲、ルクスリアを一瞥する。

「色欲か」

「今日はどこ行ってたの？」

本当にただ一瞥しただけで、それ以上大した興味を示さないグラ。

だがそれは、決して彼が冷たいのではない。

言うなれば、これこそが色欲、ルクスリアとの彼なりのコミュニケーションションなのだろう。

そしてそれはルクスリア自身解っているのか、さっと目の前を通り過ぎていこうとするグラの後に勝手に回っている。

「ケーキを買いに行っていた」

「それって、この前見つけたっていうケーキ屋さん？」

「ああ、そっだ」

「私も食べる！」

「……………好きにしる」

「やったー」

まるで子供のように　　否、実際外見は子供そのものなのだ  
が　　喜びを露わにするルクスリアの仕草も華麗にスルーし、  
グラはベルゼブブに収納していたケーキの入った袋を取り出し、並  
べだした。

ルクスリアにはきっちり一切れ、そして自分には山盛りと形容する  
のもおこがましいほどの量を取り分け、座った途端に食べ始める。

「……………毎度のことだけども。よくそんなに食べられるよねー。私  
達ってさ、食事する必要ないんじゃないかなかったっけ？」

「忘れたか。我は暴食の大罪だぞ？　暴食が食を忘れて何とする」

「いや、それはそうなんだろうけど……………」

将来糖尿病になるよ？と言いつつ、ルクスリアもまた自分のケーキ  
を口に運ぶ。

味覚はあるが食事をする必要のないらしい彼らにとって、その心配  
はおそらく杞憂なのだろう。

だが、確かに山盛りのケーキをたった1人が次々とその胃袋に収め  
ていく光景を見ると、それだけで胃もたれを起こしそうになる。  
ルクスリアがそう言いたい気持ちも、解らなくはない。

「怠惰はどうした？」

「アケディア？　あいつなら、まだ仕事。昔っから仕事遅いじゃな

い、あいつ」

「それもそうだな。……………ああ、そうだ。今日、町で珍しい者に出くわしたぞ」

「何々、創造者？」

興味深げな眼差しで、グラの話に聞き耳を立てるルクスリア。

「うむ、そのようだったな。随分と強い若者であった」

「へえ、会ってみたいなあ。ねえねえ、その人男？ 女？」

「男だが」

「男っ　ねー、その人、私のハーレムに入れられそうな奴!？」

「知らん。自分で確かめろ」

また始まったか、と肩を竦める横で、勝手に想像に胸を膨らませるルクスリア。

そういえば先日傲慢、スペルビアに連行される形で帰ってきた時も、似たような様子だったと、グラは何気なく思い出した。

かなり興味の湧いた男がいたのだ、それだけにスペルビアに邪魔されたのがこの上なく悔しいのだ、今日以上に随分よく語られたものだ。

（ルクスリアに気にいられた者、か。是非戦ってみたいものだ。だ

が )

グラは、唐突に立ち上がった。

「どうしたの？」

「修行だ」

ケーキを食べるのも途中で突然立ち上がった自分を、ケーキを頼張り膨らんだ顔で不思議そうに見上げてくるルクスリアへ、にべもなくそう返事をするグラ。

( その前に、超えねばならん壁がある )

その目は既に、次なる強敵を内に捉えていた。

## 第15話「異端の創造者？／後編」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「はい、もう少し書けそうでしたが、きりがいいのでここで一旦区切りました」

リオス「これで水玉先生サイドは終了。これで漸くストーリーに添えるわけだ」

神崎「そのとおり。次回はいよいよニア編。やっと原作に沿った話を書ける！……と、神崎も現在絶賛安堵中でございます」

リオス「進まなかったもんねー、今まで」

神崎「……僕、思うんだ。8人の創造者の更新が進まなかった最大の原因は、オリジナルストーリーをつなげすぎたからなんじゃないかって」

リオス「つまり、オリジナルストーリーの辻褄合わせや設定の矛盾をなくす行動に時間割きすぎて、遅れてたってこと？」

神崎「その可能性もあるよってこと。まあ他にも、各参加作者様のエディットキャラの設定を見ながら書かなきゃいけなかったりとか、そもそも敵キャラやエディットキャラ達の設定をまとめてなかったこととかも考えられるけどね。もっと早くまとめとけよ！って自分でも思いました、はい」

リオス「じゃあ、これで更新は早くなるんだね？」

神崎「なると信じたいです。ていうか努力します」

リオス「絶対する、とは言わないのね……………」

神崎「予定は未定、が僕のパターンですから」

リオス「……………はぁ」

神崎「それでは最後に、感想をいただきました水玉先生、ありがとうございました」

リオス「ついに感想が1人になっただか……………」

神崎「……………言わないで（泣）」

リオス「……………哀れな」

神崎「それでは次回、『創造者、出勤』にも、」

リオス「ご期待下さい」

神崎「……………あくまで、創造者ですから」

リオス「……………否、パクらないでよ（汗）」

## 第16話「創造者、出動/前編」

「はああああああああああつ！」

「でやああああああああつ！」

剣と剣、2つの銀の光沢が激しくぶつかり合い火花を散らす。

時刻は朝、場所は機動六課訓練場。

すでに日もその眩しげな顔を現しかけた晴天の下、龍也と隼人は激突していた。

「氷牙、一閃！」

「霸王、一閃！」

冷気を纏った神秘の剣閃と、とてつもないオーラを纏った剛剣が激しく衝突する。

冷気がオーラを一瞬にして凍らせ、それをオーラがさらに碎き、押し返す。

やがて拮抗した両者の斬撃は収束し、両者は一旦剣を離し、距離を置いた。

「はあ、やっぱり直接の威力じゃ、霸王一閃には敵わない、かつ！」

言いながら、空色の魔力弾、フリーズシューターを生成して飛ばす。

変換資質を伴った魔力弾は、回避され着弾した地面にクレーターを作ると、表面を軽く凍結させる。

「はは、何言ってるんだよ。氷結の上に行く、氷塵なんて魔力変換資質持つてる癖、につ！」

隼人もまた、お返しとばかりに魔力弾を放つ。

通常のサイズを遥かに超えた、もはや魔力弾の域を遥かに凌駕する光の球体だ。

それには龍ももうたえた。

そして慌てて、それを防ぐ策を講じる。

「ガーディアンフォーム！」

『Guardian form, get set. Freeze field.』

ガーディアンフォームへチェンジすると、フリーズフィールドを発生させた。

先程隼人がその名を口にしていた、龍也の希少技能とも呼べる魔力変換資質、氷塵。

実体があるうが魔力系の攻撃だろうが、全てを凍りつかせ砕くその驚異的力を宿した空色の粒子の壁が、ドーム状に龍也の姿を覆い、巨大な魔力の流星を片端から凍りつかせ、砕く。



互いの力に呆れながらも、しかし、それ以上にあきれ返って開いた口が塞がらない人影がいることを、2人は知らない。

「……………め、滅茶苦茶過ぎだろ……………」

「……………凄いです。ていうか、凄過ぎます……………」

遠目に模擬戦を観戦していたヴァイスとシャーリーが、そう呆れたように呟きを口にする。

創造者である修斗や、先日はやとフェイトの紹介で赴任してきた2人の新たな創造者、久住とシンにしてみればもはや見慣れた光景だが、この世界の本来の住人にしてみれば、夢でも見ているような気分なのかもしれない。

そして、そんな呆気にとられたヘリパイロットとメカニクスの思考を置き去りにして、模擬戦は更に白熱していく。

「畜生、そっちがその気ならこっちだって!」

『ACCEL!』

「ちよっ、今回は魔導師としての訓練でしょ!? ライダーは使っちゃ駄目だって!」

「うっさい! くらええええええええ!」

『ACCEL! MAXIMUM DRIVE!』

「い~~~~~や~~~~~! な、ならこっちだつて!」

『HENSHIN』

「ちょ、カブトはいくらなんでも反則だろ!」

「先にやったのはそっちでしょ!」

『CLOCK UP!』

「上等だ!」

『TRIAL!』

「……あー、平和だねー」

「……………ですねー」

訓練場で響き渡る轟音を他人事のように耳で捉えながら、ヴァイスとシャーリーは遠い目でその光景を一瞥すると、フォワード達が訓練をしている方向へ歩いていった。

第16話「創造者、出動／前編」

「はあ、はあ……………」

「ぜえ、ぜえ……………」

漸く轟音も鳴り止んだ、機動六課訓練場。

そこには、頭のを向かい合わせるようにして地面に寝転んでいる、制服姿の龍也と隼人が倒れていた。

「さ、さすがに、疲れたね……………」

息も絶え絶えに龍也が言うと、隼人も、ああ、と相槌を打って返す。

もう、さすがに先ほどまでのテンションを保って戦う体力は、2人にはない。

辺りは、2人の戦いの凄惨さを表すかのように抉れ、あるところは焼け焦げ、またあるところは一面の銀世界、と、なんとも混沌とした様相を醸し出している。

「……………そろそろ昼飯だよな。シャワー浴びて、食堂行こうぜ」  
「そうだね」

そういうも、あまりの体力の消費に2人はしばらくその場を動けず、結局シャワーへ向かえたのはそれから10分ほど経った後だった。草臥れた体を推して、シャワーへゆつくりと談笑しながら歩いていく2人を、男の声が呼び止めた。

「龍也、隼人」

「あつ、久住さん」

振り返ると、そこには1人の青年が立っていた。

黒のショートカットのさつぱりした風貌をしたその青年は、以前隼人を救出した際に初めて出会った男だ。

「久住さん、お疲れ様です」

「ああ、お疲れ。そっちも今終わったのか？」

「くたくたですよ。龍也が反則過ぎるから……………」

「ちょ、僕のせい!？」

ははは、とひとしきり笑って、久住はところで、と話を切り出す。

「今日、何の日か知ってるか？」

「今日……………?」

龍也は、なんのことが、とでも言いたげに首を傾げる。

その横で、隼人は久住の言わんとしていることに気付き、顔をしかめた。

「ファーストアラート……………ですか？」

「……………ああ、なるほど」

隼人の言葉に久住は頷き、龍也は今度こそ合点がいったのか、うんうん、と何度も首を縦に振る。

「今、フォワードの女性陣がシャワーを浴びてる。これで予定通りことが起これば、シャワー浴びた後デバイスが渡されて、発出動だ……………予定通りいけば、だけど」

「バグ、か……………」

「そのとおり」

龍也が導き出した答えに、久住は即答で返す。

まあ、と溜め息と同時に間をおいて、久住は尚も自らの見解を述べる。

「まあ、俺としては楽しく原作世界をエンジョイできればそれでい

いんだが。だが、バグに彼女らの発任務を邪魔でもされたら、いろいろと厄介だ。最悪、ガジェットに美味しいところを持つていかれる可能性もある」

「エンジョイ云々は置いといて………確かに厄介ですね。俺も龍也もまだ空中戦が万全とはいきませんし」

「ま、その辺は他の能力で補って余りあるから問題ないだろうが。とにかく、警戒はしておくに越したことはないだろうよ。まずは

」

喉まで出かけた久住の言葉。

しかし、

ヴーーーーーッ、ヴーーーーーッ、ヴーーーーーッ！

けたたましいアラートの音に、それはかき消される。

「どうやら、お呼びがかかったみたいだね」

「おいおい………原作より早えぞ！」

愕然と言う隼人の隣で、久住は齒噛みした。

完全に、してやられた。

実は久住自身、今日この日がファーストアラートの日であることをつい先ほどまで失念しており、それ故、バグが邪魔をしてくる可能性を直前まで看破しきれなかった。

物語の世界であるからして、起こった出来事の月日を事細か、且つ正確に予測し行動することに何かしらの歪みが生じるのは致し方ないことではあるが、あまりに杜撰な予測に3人は顔を顰めた。

だが、後悔ばかりをしている余裕もない。

「よし、行くぞ!」

「うん!」

「おう!」

久住の合図の下、3人は外へと走っていった。

ロングアーチにポイントを転送してもらい、そのポイントへ向かって飛翔しようとした時、ふと久住が訊ねた。

「そっいや、お前達ってこれだけ長距離って、もう飛べるのか?」

「ううん、まだ自力じゃ無理。だから……………」

龍也はバトルブッカーから、カードを取り出しひらひらと翳してみた。

「これでガンダムにでも変身して、飛んでく。隼人には……………これかな」

そう言うと龍也は別のカードを取り出して、ナイトドライバーへと読み込ませる。

『ATTACK RIDE……HARD TERPULER!』

Wの紋章が何もない空間を通り過ぎ、その通過点に、ハードタービュラー  
ブースターによる飛行を可能にしたバイクを出現させた。

「これで、どうかな？」

「相変わらず万能だな。じゃ、失礼して、と」

万能にもリクエストに答えてみせる龍也の能力に呆れ返りつつも、隼人はハードタービュラーに跨った。

エンジンをかけると、僅かにブースターが噴射を起こし、車体を浮かび上がらせる。

「……………なんか、この浮遊感が凄く不安を煽るんだがな？」

「大丈夫、落ちはしないさ。……………たぶん」

「励ますなら、せめて最後にたぶんをつけるのだけはやめてくれよ、お願いだからっ！」

「ええい、我侂言うな！ そおれ、行ってこおおおおおおおいっ！」

気合一発、ハードタービュラーを蹴りつける。

すると、まるでそれがスイッチになったように、ハードタービュラー

ーのブースターに、明らかに過剰であろうと伺える量のエネルギーが溜まった。

「お、おい……………」

青くなった隼人の顔がぶれ、次の瞬間には遙か上空へと一瞬にして移動している。

「お、覚えてるおおおおお……………」

隼人の声が段々と小さくなっていくと同時に彼の姿も見えなくなり始め、ついには空の彼方へと消えていった。

「おー、よく飛んだなあ」

「……………大丈夫なのか、あれ？」

「大丈夫ですよ。ポイントは入力しておきましたし、自動操縦で着くはずですよ。……………まあ、終わってからが怖いですけど」

呆然と呟く久住にそう答え、ぶるっ、とわざとらしく震える龍也。

尻込みする隼人を焚き付けるための策だったわけだが、確かに、帰った後の反撃が恐ろしかった。

「さてと、僕達もそろそろいきましょうか」

いい、龍也はバトルブッカーに手をかけた。

カードを取り出し、ナイトドライバーへ装填する。

『MACHINE RIDE……FREEDOM GUNDA  
M』

龍也の全身が種のようなもので包まれ、弾ける。

中から現れたのは、白銀の四肢に青き翼を持った機神、フリーダムガンダムだった。

「フリーダムか」

「空中戦なら、これがいいかと思ひまして。じゃ、行きましようか」

「ああ」

久住も素早くバリアジャケットを展開し、飛行魔法を使用する。

2人の魔導師が飛び立った後の訓練場には、ただ静寂のみが残されただけだった。

## 第16話「創造者、出動/前編」(後書き)

「神の黄昏」

神崎「はああ、漸く更新できたー」

リオス「時間かかってねえ」

神崎「ちよつと決めかねてたことがあってね」

リオス「というと？」

神崎「まず、どこから始めようかなー、と。フォワードの訓練からでもいいし、創造者視点でもいいし。その辺は迷ったけど、結局こうなりました」

リオス「ふむふむ」

神崎「次に、どうファーストアライトにアプローチさせようかな、とね。これも迷ったけど、結局フォワードには接触させず、アラートで知らせてみました」

リオス「そうか。で、今回もいろいろアイテム出たね」

神崎「ナイトドライバーでのアイテム生成が使いやすくて仕方ない！……まあ、だから僕の出番が増えてしまうわけだけだ」

リオス「キラー先生や笑う男先生なんて、全く出てないもんね」

神崎「キラール先生はフェイトと、笑う男先生ははやと一緒にいるから、この時は出れないんだよ。キラール先生は次回、フェイトと一緒に出撃するから、まあご心配なく」

リオス「なるほどね。さて、それじゃ、本日の設定のコーナー」

神崎「久々にきました。今回出た、版權物の設定です」

名称：ハードタービュラー

主な登場作品：仮面ライダーW

種：バイク

概要：仮面ライダーWに登場する仮面ライダー、W専用のバイク。定地最高速度は580km/h。名付け親は主人公である私立探偵、左 翔太郎で、翔太郎は変身時だけでなく日常でもこのマシンを愛用する。ごくまれにだが、相棒フィリップも乗る場合もある。黒色の車体前部と、緑色の車体後部ボイルターユニットで構成されており、必要時には後述のブースターが装着される。車体後部は状況によって換装され、陸海空あらゆる局面に対応する（換装は変身前でも可）。自動操縦機能が搭載されているのか、走行中にWが両手を離しても安定した走行が可能。武装はフロントカウルに装備された多目的ガンポッド「ユニバーサルランチャー」。ベース車両はホンダ・CBR1000RR。ハードタービュラーはその車体後部を赤色のタービュラーユニットに換装した空戦形態で、自在に空を飛ぶことが可能。この形態では主翼に備えたビーム砲「エナジーバルカン」、主翼前縁に備えた振動刃「スクランブルカッター」が追加される。

名称：フリーダムガンダム

主な登場作品：機動戦士ガンダムSEED、機動戦士ガンダムSEED DESTINY

種：人型戦闘機体

概要：単機で多数の敵を相手に圧倒的戦闘力を示しうる、対地球連合の切り札として開発された、殲滅型対モビルスーツ戦用機。本機は核エンジンのアドバンテージを最大限に生かすべく、大出力のプラズマ収束ビーム砲とレール砲を2門ずつ搭載しており、これに右手に装備されたビームライフルを加えたフルバーストは絶大な破壊力を有し、従来のモビルスーツからは考えられないほどの大火力を有する。これらの火器を統合管制する「マルチロックオンシステム」は、パイロットの能力によって複数の敵機を同時に狙い撃つことが可能で、40機以上の目標に対する同時攻撃を可能としている。背部のメインスラスターはその推力のみで大気圏内での高速・長距離飛行を可能とする大推力のもので、さらに背部に備えた計10枚のウイングを広角展開することで「ハイマツト（High Maneuver Aerial Tactical）モード」と呼ばれる高機動空戦形態を取る。これによって大気圏内では空力制御、無重力下では重心制御を行うことができ、スラスターの推力と合わせて驚異的な運動性能を発揮する。この翼状のデバイスは放熱板の役割も兼ね備えており、大出力の火砲を多数搭載するフリーダムの高信頼性向上にも一役買っている。なお、「翼」といつても固定翼航空機のそれのように空力的に揚力を得ているわけではなく、内蔵されたスラスターの強大な推力を適宜偏向させることで飛行を実現している。このため、損傷により片翼を失っても飛行すること自体は可能であった。コックピットは機体の動きと連動して回転するものを用、全周囲モニターとマルチロックオンシステム対応の球体型立体表示パネルが搭載され、機体のポテンシャルを最大限に発揮できるように工夫されている。多数の新技术の投入によって、C.E.71時点のモビルスーツでは最高級の性能を獲得した本機だが、その分制御も複雑になり、並みのパイロットでは扱いきれないほどの操縦

難易度となった。特別な操縦センスを持つパイロットが必要とされたが、本機を奪取した主人公キラ・ヤマトの操縦により、その性能は最大限に発揮された。

神崎「以上ですね」

リオス「あれ？　今回はやけに詳しく書いてあるような……………」

神崎「Wikiにあつた説明をそのまま載せて、原典を知らない方にもわかるように改造して載せてみました。いかがでしょうか」

リオス「まあ、これなら解るかなあ？」

神崎「解り易くできているといいのですが。さて、次回はいよいよ激突。ガジェットの他にも敵登場！　乞うご期待！」

リオス「どうか皆様、こんな亀以下の更新ですが、宜しく願いますね」

神崎「では次回、『創造者、出動／中編』に」

リオス「ご期待下さい」

## 第16話「創造者、出勤/中編」

「と、止まった……………」

漸く予定ポイントに到着した隼人は、段々と操作にも慣れてきたハイドタービュラーをやっとの思いで安定させ、滞空したまま頂垂れた。

遅れてその後ろから、スラスターの噴射音と、風を切る音が聞こえてくる。

やがてそれは自分の近くまで来ると、同様に滞空して止まった。

「や。乗り心地はどうだった？」

「どうだった、じゃねえよ。あとで覚えてるよ？」

睨みながら文句を言う隼人を龍也が苦笑で流すと、3人は眼下に広がる絶景を見下ろした。

断崖絶壁の中腹辺りに、列車のレールが見える。

だが、ここを通るはずのリニアはまだ見えない。

「早く来すぎちまったか？」

「そついうわけじゃないだろうが……………否」

背後に感じた気配に、久住は口から出た見解を撤回した。

言葉と共に振り返ると、そこには多数の鋼鉄の異形の姿があった。

「これって……………！」

「はっ、ご大層なことだな。こんなものまで用意するとは……………」

彼らの視線の先にあったのは、紫色をした人型の機械人形のようなものだった。

頭部の丸いカメラアイが煌き、手には銃を携えている。

背部の飛行ユニットのようなものからバーニアを吹かしてこちらに向かってくる、機体の大群。

その1つ1つの姿には、見覚えがあった。

「……………ナイトメア、フレーム」

「おいおい、こんなものまで出てくるのかよ。しかもご丁寧に、R 2の機体だよな、あれ」

小さく呟く龍也の隣で、久住も隼人と同じく呆れの溜め息を漏らす。

と、そこへ。

『マスター。別方向からも敵機の反応あり！』

「なぬ？」

隼人と既に融合を果たしている彼の融合騎、クロムが敵機を捉えた。

『数多数。詳細はここからでは解りかねますが、ガジェットかと思われませう。いかが致しましょう、マスター龍也？』

グロリアスの言葉に、ふむ、と考え込む。

そして、龍也が出した結論は。

「僕達はここで、ナイトメア軍団の進軍だけを食い止めよう。ガジェットのほうもやって出来ないことはないかもだけど、ここで確かキヤロの成長とか見られるはずだし、何より彼女らの初任務だ。下手に手を出して、原作を変えてしまったりしたら、本末転倒だしね」

「ま、それが妥当だろうな。……よし、じゃあいつちょ行くか。アリス！」

『漸く出番か。待ちくたびれたぞ、祐治』

久住のバリアジャケットの右ポケットで、金色の懐中時計がその中心に備えられたコアを発光させる。

バリアジャケットを展開はしていたが、久住はまだ彼のデバイス、アリスの真の姿を開放していなかった。

それは決して慢心などではなく、単にその形状を保持したままでは飛行に支障が出るからである。

戦闘時の飛行には全く問題ないが、長距離の高速飛行では、大きな得物は邪魔でしかない。身軽な方が、いいに決まっていた。

アリスの姿が、懐中時計からみるみる内に変形していく。

それは徐々に長い得物の姿を模り、やがて変化が収まると、そこにあったのは身の丈をも優に超す巨大な剣だった。

アリス、シザースフォーム。

その凶悪な双刃はしかし、接近戦において真価を発揮するものではない。

「アリス、魔力チャージ！」

『了解だ、マスター』

アリスの柄を両手で持ち、前へ突き出す。

そして、剣の刃をゆっくりと開いていくと、同時に刀身でバチバチとスパークを起こしながら、魔力エネルギーがアリスの刀身を駆け巡り、刃の根元へ魔力球を形成していく。

やがてそれが臨界へ達すると、

「はあっ！」

掛け声と同時に、解き放った。

存分にチャージされた砲撃は、こちらへ向かっていたフライトユニット搭載型のナイトメアフレームの群れを直撃し、蒸発、爆散させていく。

「うわぁ……………」

「すっげー……………」

それまで久住の戦う姿を見ていなかった2人は、その圧倒的火力に思わず舌を巻いて感心する。

それに僅かに笑みを零し、しかしすぐに真剣な顔つきに戻って、久住は叫んだ。

「隼人は取りこぼしをラインから出すな！ 龍也は突っ込め！ 俺が援護するから！」

「りよ、了解！」

「おっしゃ、やってやろうぜ！ なのは達が来るまで持ち堪えて見せるー！」

意気込み、3人は大群と衝突した。

「フェイトさん！」

「うん、解ってる！」

近くのパーキングエリアに車を停めたフェイトとシンは、急いでそれから飛び降りた。

所用で外出していた2人は、車の中でリニアレールのことを聞き、急行すべく、車を止められる場所を探していたのだ。

いくら緊急とはいえ、交通秩序を乱すわけにはいかない。

2人はセットアップを済ませ、飛翔する。

「フェイト！！T！！ハラウオン、」

「シン！！アスカ、」

「「行きます！」」

シンとフェイトは並び寄り添うようにして、ただ目的地へ向かって空を駆ける。

「今回は、インパルスなんだ」

隣を飛ぶシンに、フェイトはそう興味本位に問いかける。

今シンが纏っているのは、インパルスフォーム。

その中でも優れた機動性と空戦能力を誇る、フォースシルエットだった。

「幾らなんでも、ただのガジェットにデステイニーは使いませんよ。アレは、俺の本当の切り札ですからね」

不敵に返すシンに、フェイトもまた笑みを浮かべる。

「そうだね。フォワードの子達もいるし、安全、確実に終わらせよ？」

「はい！」

速度を上げ、2人はさらにスピードを上げて、まるで空を射抜く閃光のように駆ける。

そうしてしばらく飛んでいると、やがて2人の目に崖を走行する車両が見えてきた。

「あれが、今回の目標……………」

「うん。行くっ」

2人が近づこうとすると

「！シンー！」

「えっ……うわああっ!?!」

いきなり横から黄緑色の閃光が降り、シンは身を引いてそれとかなんとか避ける。

「ビーム!? でも、どこから……」

辺りを見回す。

だが、その発生源らしきものは視界には映らない。  
すると。

『! マスター、上です!』

「何っ……!?!」

デステイニーの警告が功を奏し、なんとかぎりぎり、振り下ろされた桜色の光の刃を避けることに成功したシン。

もといた空間から飛びのき、真っ直ぐに前を見据えたシンの目に飛び込んできたのは、モスグリーンの機体が煌く、新たな機神だった。

「なっ……こ、こいつは!? カオス……!?!」

「はっはあ。創造者、つてのはてめえかあ?」

緑の機神

カオスは、気だるげに首を捻ると、そう訊ねる。

そこへ、フェイトがバルディッシュを突きつけた。

「何者ですか？」

「……………なあと、アンタには危害は加えねえから安心しな。俺はただ……………」

言い終わらぬうちに、カオスは抜いた桜色の魔力剣  
ムサーベルを上段に構え、シンへと切りかかる。

ビー

「こいつを始末したいだけなんでなあ！」

「くっ……………!!」

シンもまた、両肩部にマウントされたビームサーベルを抜き放ち、その斬撃を受け止めた。

桜色の魔力刃同士が激しくぶつかり合い、光の花を散らし続ける。

「うおらっ!」

カオスは足に新たに魔力刃を発生させると、ミドルキックを繰り出した。

シンはそれを罅迫り合いを解いて避けるが、その勢いが余って体勢を崩してしまう。

「うあっ!?!」

「もらったぜっ!」

カオスのビームサーベルという名の凶刃が、シンの胸を真っ二つに  
両断しようとした、その時。

「はあっ！」

「何っ！？　ぐあああああっ！」

後方で静観していたフェイトが、魔力刃を発生させたバルディツシ  
ユで受け止め、さらには既に展開していた複数個の魔力球から金色  
の魔力弾を打ち出し、カオスを攻撃した。

それにはカオスも堪らず、離脱して、左腕に装着されたシールドで  
防御する。

「大丈夫、シン？」

「は、はい。なんとか……………」

フルフェイスのガンダムヘッドの下で顔をしかめつつも、シンは体  
勢を立て直し、ビームライフルとサーベルを構え直す。

前方では、既に全弾を防御し終えたカオスが、臨戦態勢に入ってい  
た。

「シン、行くよ！」

「はい、フェイトさん！」

頷き、2人は同時にカオスへ向かって翔けた。

「隼人君！」

「ああ、なのは」

一方場所は変わり、隼人達のナイトメア防衛ライン。

漸くへりが到着したらしく、空中セットアップを済ませたらしいなのはが隼人のところまで来ると、そう叫んで止まる。

「そっちはどうだ？」

「列車の方は、フォワードの子達に任せてきたよ。リイン曹長もサポートに回ってるし、あっちはたぶん大丈夫」

「そうか」

言い、隼人は前方を見据える。

彼の目の前では今、激しい戦闘が繰り広げられていた。

龍也の変身したフリーダムガンダムの放つ4本の凄まじい火線がナイトメアの群れを尽く貫き、その火線の雨をも掻い潜ってラインを抜けた機体は、久住の魔力弾や砲撃が余すことなく蒸発させる。

それをも超えてくるような機体はごく少数で、正直　。

「あー……暇だなあ」

「にははは………」

思わず本音がこぼれる隼人に、なのはは思わず苦笑する。

終いにはハードタービュラーから砲を放ちながら欠伸までし始める隼人に、思いついたようになのはは話しかける。

「ねえ、隼人君。もし手が空いているようなら、ガジエットの相手、手伝ってくれないかな？ フェイトちゃんがまだみたいだから、それまでにある程度数を減らしておきたいんだ」

「ん、そうか。解った、じゃあ、行こう」

「うんっ」

頷き、隼人となのはは別方向から接近していたガジエットの群れへ

と進路を取り、飛び去っていく。

2人を見つめる、何者かの視線にも、気付かずに。

「ふむ、やはり既に始まっていたか……………」

リニアレールの周辺で激闘が繰り広げられていたまさにその時、それを遠くの岩場から、遠視の魔法で悠々と眺めている男がいた。

彼の手にあるのは、僅かな荷が入っているだけのリュックサックのみ。

断崖絶壁を形成する一部である、山の頂上のように盛り上がった岩場には到底似つかわしくない極めてラフな格好であるその男は一旦その光景から目を背けると、別の方角へ視線を移した。

右方からは、ガジェットの群れ。

このまま行けば、あの白と漆黒の魔導師の2人が接触するだろう。

ナイトメアフレームの方は  
創造者2人がほぼ完封している。

最終ラインにいた魔導師が離れたことも大して苦にはなっていないようだ。このままであれば、問題なく守りきれよう。

ならば、と男が最後に見やった先にあるのは、爆走を続けるリニアの車両。

その傍で、なにやら怪しい動きを見せる？何か？を、男は確かにその双眸に捉える。

「せっかくの見せ場に、無粋な横槍を入れるのは感心しないな。まあ……」

言いながら、男は立ち上がる。

そして、まるで天を仰ぐかのように、右手を高く掲げた。

途端に溢れ出す、山吹色の光。

「俺達創造者も、似たようなものだな」

男の姿は、みるみる内に渦となった大気に包まれていく。

やがて竜巻が去っていくと、男  
氷川 流の姿は、その場  
から完全に消え去っており、あとに残ったのは、岩場を流れる一陣

の風だけだった。

## 第16話「創造者、出動/中編」(後書き)

「神の黄昏」

神崎「やったああああああああああああああああ！ 久々に予定どおりに更新出来たああああああああああ！」

リオス「予定どおりじゃないでしょ。1日遅れじゃん」

神崎「細かいこと言わないの。要は何日空けずに更新できたかが問題なんだから」

リオス「まあ、そりゃそうなんだけどさ。さて、今回は漸くリニアレールでの戦いに突入だね？」

神崎「早速の大混戦です。せつかく介入させるからには、全ての戦闘においてただの戦いにはさせませんよ」

リオス「なんか、乱戦の予感……。そして、幾つかはじめてく人もいるんだよね？」

神崎「そうそう。久住先生は初戦闘、綾崎先生は初の原作ヒロインとの絡み」

リオス「何気にどっちもやってなかったんだよね……。久住先生だって、戦っててもよさそうな感じなのに」

神崎「まあ、ね。それにはちょっとした理由があって、先生の能力のもとになった作品を神崎が知らなくて、それをWikiとかで調

べたりするのに時間がかかったってことがあります。新しい漫画を全巻読破するような時間、今までなかったし……。ちなみに、シザーフォームから砲撃を放つシーンの帯電するエフェクトは、メカアニメの『ゾイド』に登場する、デススティングアの荷電粒子砲をイメージしました。興味がある方でゾイドを知らない方は、ぜひYouTubeか何かで見てみてね」

リオス「なるほど」

神崎「それもあって、『久住祐治 ビギンズナイト』と称して、先生を主人公として、久住先生が如何にして力を得たか、みたいな外伝ストーリーも考え中。出自の設定も出してくださっていたんだけど、その力の出自がちょっと特殊だったものだから」

リオス「そっか。そして綾崎先生。こっちは？」

神崎「こっちは単純に、展開の問題。展開上、なかなか原作キャラと絡ませることが出来なくて……。ここからはバンバン絡ませていきたいと考えてますので、企画に参加しておられる作者様方、どうかお楽しみに」

リオス「だ、そうです。じゃ、本日の感謝コーナー」

神崎「感想を下さいました水玉先生、久住祐治先生、綾崎先生。ありがとうございます>m(\_\_\_\_\_)m<」

リオス「そして、本日の設定のコーナー」

神崎「どうぞー!」

名称：ナイトメアフレーム

種：人型戦闘機体

主な登場作品：コードギアス 反逆のルルーシュシリーズ

概要：全高4〜5mと小柄に出来ており、主に市街地戦闘向けの機能が盛り込まれている。和訳は「人型自在戦闘装甲騎」であるが、直訳でなく意識であるため、いつ誰がこの訳出をおこない普及させたかは劇中明らかになっていない。また、「黒の騎士団」は第1シリーズ終盤以降の戦闘指揮において、原語の「ナイトメア」という表音では呼ばず「人型自在戦闘装甲騎」から「人型」の2文字を省略した「自在戦闘装甲騎」と呼ぶようになる。綴りは悪夢を意味する“Nightmare”では無く、「騎士の馬」たる“Knightmare”と、「機体」たる“Frame”を掛け合わせたもので、頭文字からの略称は“KMF”。劇中では単に「ナイトメア」とも呼ばれる。設計の始点は「局地的状況における生命保持を主眼に置いたサバイバルコックピット機構」というものであり、後にナイトメアフレームという「戦闘用ロボット」として終着するこの概念は、系統の異なる2つの技術をベースに開発が開始された。1つは軍用二足歩行兵器「ナイトメア」であり、もう1つは福祉用途に開発された民生用機「フレーム」である。その2つを統合した結果、「ナイトメアフレーム」の名称が誕生した。ブリタニア製ナイトメアフレームには開発段階に応じて世代が区分されており、第九世代まで開発されたが、第二世代以前や第六世代・第八世代と確認されるKMFは作中では登場していない。

機能

特徴としては、情報収集用カメラ「ファクトスフィア」、地上での高速移動の他、建造物の間もよじ登る事が可能なホイール「ランドスピナー」、移動や牽引、攻撃など多数の用途を持つワイヤー式ア

ンカー「スラッシュハーケン」が挙げられる。日本製KMFでは、ランドスピナーは「高機走駆動輪」、スラッシュハーケンは「飛燕爪牙」と呼称される。ランドスピナーが基本的に外装式なのに比べ、高機走駆動輪は脚部への内蔵式になっている。

名称：カオスガンダム

種：人型戦闘機体

主な登場作品：機動戦士ガンダムSEED DESTINY

概要：カオスガンダムは、テレビアニメ『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』に登場する架空の兵器、MSに類する機体。モビルスーツザフトが開発した試作型MSの1機。劇中での正式名称はカオス。機体名の「カオス」はギリシア神話に登場する現初神のこと、もしくは英語で「混沌」の意。

宇宙での高機動戦闘を主眼に置いており、MA形態への可変機構と、多彩な武装を備えた強襲用の機体である。装甲には、実弾によるダメージを無効にす相転移装甲、PS装甲の発展型であるVPS装甲フェイスソフト

が採用されており、母艦の動力のエネルギーをビームに変換して機体へ送る、デュートリオンビーム送電システムにより、戦闘継続時間の延長が可能である。特徴的な変形機構を持ちMA形態時は胴を折る様な形で変形する。これには、MA形態でも腕部を使用でき携行火器の使用に対して特に大きな制限がないというメリットがある。また、MA形態時は大出力のビーム砲「カリドウス改」が使用可能であり、高い加速力と破壊力を活かした一撃離脱戦法を得意としている。また、ビームライフルやビームクロー等近・中距離用の武装も使用可能で、敵の規模や距離に適した火器を自在に選択出来る。更に「機動兵装ポッド」による360°からのオールレンジ攻撃は、MS・MA両形態で使用可能であり、攻撃方法の選択肢が広い。大気圏内での戦闘も可能であり、強力な推進力を活かした機動力を誇っている。

## 武装

・MMI-GAU1717 12.5mmCIWS  
頭部に4門内蔵されたバルカン砲、CIWS（近接防御火器システム）。

・MMI-GAU25A 20mmCIWS  
胸部に2門装備されているCIWS。

・MA-BAR721 高エネルギービームライフル  
高速戦闘に適した専用ビームライフル。インパルスの装備である「MA-BAR72」をMA形態での高速戦闘用に耐え得るように改良したもの。

・MA-M941 ヴァジュラビームサーベル  
ビームサーベル。カオスはMA形態時も腕部に制限が無いために、形態を問わず使用出来る。

・MGX-2235B カリドウス改複相ビーム砲  
背部センサーに蓋をされる形で内蔵されている高出力ビーム砲。使用時にはセンサー部がスライドし砲口を露出させる。アビスの胸部に内蔵された「MGX-2235 カリドウス」を高速戦闘仕様に改修した装備。本機の兵装中最大級の威力を誇るが、設置箇所関係から使用はMA形態時に限られる。カリドウスは、ラテン語で「猛火」の意。

・EQFU-5X 機動兵装ポッド

機動兵装ポッドと名付けられた背部パーツは高推力スラスタ（兼ウエポンラック）としての機能を備えており、大気圏内飛行を可能

とする推力を本機に与えている。ビーム砲を備えた遊撃砲台仕様の為、本体から切り離し個別に機動させることでオールレンジ攻撃を行うことが可能である。しかし、遊撃砲台としての使用の際には量子通信を用いているために相当量のエネルギーを消耗する。従来のものに改良が加えられ、特別な空間認識能力がなくとも使えるようになってきている。

・ M A - 8 1 R ビーム突撃砲

ポッド内蔵のビーム砲。発砲時は内部に格納された砲身が伸長する。

・ A G M 1 4 1 ファイヤーフライ誘導ミサイル

ポッド内蔵の誘導型ミサイル。インパルスガンダムのシルエットの1つ、プラスチックシルエットにも同型の装備が採用されている。

・ M A - X M 4 3 4 ビームクロー

両膝、爪先のクローから出力されるビームクロー。M A 形態時の接近戦用兵装として使用する他、M S 形態時は蹴撃に連動して使用される。

・ M M I - R G 3 3 0 巡航機動防盾

左腕にマウントされる対ビームコーティング仕様の防御兵装。他のセカンドステージシリーズが装備するシールドと比べやや小型でM A での高機動戦闘を考慮した設計となっており、「巡航機動」という名称となっているのはこの為である。他にも機関砲を内蔵しており、牽制やミサイル等の迎撃にも使用される。M A 形態時も腕部にマウントされたままであり、シールドとしての防御と機関砲の射撃はM S ・ M A 双方の形態で同様に使用できる。

・ M M I - G A U 2 ピクウス76mm近接防御機関砲

前大戦当時のザフト製ガンダムや量産機ゲイツの頭部に採用された  
ものと同じ対空迎撃用機関砲。シールド表側に二門装備されている。

神崎「こんな感じですね」

リオス「長い……………」

神崎「詳しくしたらこうなってしまうました（汗） さて、次回で  
すが、大乱戦の模様を1つ1つ、丁寧に書いて……………いけたらいい  
なあ」

リオス「そこは確約してよ……………」

神崎「努力します。さて、それでは次回、『創造者、出動/後編』  
も、」

リオス「ご期待下さいー！」

## 第16話「創造者、出動/後編1」

「はああっ!」

橙色の流星が幾つもの軌跡を描き、球の形をした戦闘機械、ガジェットを次々に鉄くずへと変える。

正面の敵を倒し終え、ほつと息をついた、機動六課フォワード隊、スターズ分隊の1人、ティアナ「ランスターは、後方へと目を向けた。

背中を合わせるようにしてガジェットを掃討していた同じスターズ分隊のスバル「ナカジマが、今正に最後の1機へ向けて拳を振るう。重厚な一撃を受けたガジェットは見事中心を貫かれ、爆散した。

「はい、OKです。2人共、お疲れ様ですよ」

言いながら、手乗りサイズの人形のような出で立ちの、妖精のような少女がふよふよと浮いてきて、スバルとティアナにそう声をかける。

リインフォース?。ユニゾンデバイスという、魔導師と融合し、魔法制御のサポートや魔力増強などの役割を担う特殊なデバイスに類する存在にして、部隊長である八神はやてのパートナーでもある。

デバイスといってもその実態はほとんど人間と一緒に、階級も、ちゃんと曹長の位を与えられている。

「周囲にガジェット反応なしです。このまま周囲を警戒しつつ、レリックの確保を行うです！」

「はい！」

リイン？の言葉に景気よく返事をし、スバルが周囲の警戒を。ティアナとリイン？がレリックの確保を、という具合に動くとする。しかし。

「っ！？ 熱源反応！！？」

『Unknown comes from under here  
！（アンノウン、下から来ます！）』

「ええっ！？ アンノウンって、ガジェットじゃないの！！？」

ティアナのデバイス、双銃のクロスミラージュと、スバルのデバイス、ローラースケートのマツハキヤリバーが警告を発し、2人とリイン？は下を見る。

すると、次の瞬間、

「きゃああああああっ！？」

「ティアツ！？」

ティアナの近くの床がひしゃげ、吹き飛ばされる。

打ち上げられたティアナだったが、空中で器用に体勢を整え、スバ

ルの隣に着地する。

「一体何なの……………!?!」

未だ埃に塗れ、見えない空間を睨みつけ、2人は各々の得物を構える。

すると。

埃が晴れ、突然の襲撃者が2人の前に現れた。

「何、あれ……………?」

「ロボット……………?」

襲撃者の姿を目の当たりにした2人が、そう端的な感想を述べる。

濃紺と水色のツートンカラーに、大きく肩を覆う特徴的な装備、そして手には槍を構えている。槍の先からは、桃色の魔力刃が出現していた。

そして何よりも特徴的なのは、頭部を覆うフルフェイスのガンダムヘッドだった。

「へえ、これがレリックってやつかぁ」

いつの間に奪ったのか、まだ封印処理も成されていないレリックを、襲撃者は無造作に弄ぶ。

「それを返してください!」

果敢にも、クロスミラージユの銃口を向けてティアナがそう叫ぶ。

それを面白いものを見たという様子で薄ら笑いを浮かべ、襲撃者は返事をした。

「悪いんだけどさあ、僕らもこいつ狙ってんだよねえ。つーわけで……………」

襲撃者は言いつつ、どこかへとケースを転送する。おそらく、デバイスに収納したのだろう。

そうして、槍を腰溜めに構え。

「こいつが欲しけりゃ、倒してみろよっ!!」

「くっ!」

低い姿勢で、突撃を放った。

迎え撃とうと、スバルとティアナは身構える。

だが。

「! 何っ!?!」

襲撃者の驚愕の音が響くと同時に、槍と鉞が交差して金属音を奏でる。

「やれやれ、間一髪といたところか。君達、怪我は?」

「あ、え、その……大丈夫、です」

突然現れたもう1人の乱入者に戸惑いつつ、彼の背中越しにティアナは答える。

それを余裕の表れととったか、襲撃者は憤りを露わにした。

「てめえ………僕を差し置いて、好き勝手言ってるじゃねえよっ！」

襲撃者は槍を引き戻し、肩の部分の傘を大きく開く。

そこに搭載されていた左右3門ずつ、合計6門のビーム砲がその銃口を男に向け、黄緑のビームを発射した。

しかし。

「バグとはこれしきのものか。案外造作もないな」

銃から横薙ぎに放たれた一閃が、その全てを尽く蹴散らした。

「なっ………」

呆然と声を漏らした襲撃者は、漸く理解した。

目の前の男が、只者ではないということ。

「さあ。来い、アビスもどき」

「………上等だよ………ぶっ倒してやんよっ！………」

鉞と槍が、再度激突した。

第16話「創造者、出動／中編」

「くうっ、凄い数だな……………！」

ナイトメアフレーム、その量産型であるサザランドのフライトタイプを肩の2門のプラズマビーム砲と腰の2門のレールガンで迎撃しながら、龍也はそう毒づいた。

リニアレールへ近づけないよう、防衛線を張って既に数刻。

ナイトメアの数は留まるところを知らず、どこからか次から次へと湧いてくる。

魔法ではないため体力を消費することはないし、魔力も有り余るほど豊富にあるためまだまだ出来ないこともないが、このままでは量に押されてしまう可能性もある。

このままではギリ貧だ。そう思った龍也は、後方の久住へと念話を繋げた。

『ねえ久住さん。これ、どこから湧いてくるのかな？』

『ああ、俺も気になったんで、調べてみた。どうだ、アリス？』

『うむ。今サーチしたところだが、2時の方角に妙な魔力反応を感じた。おそらく？それが、あの？ないとめあ？、だったか？それを生み出している根源だろう』

アリスの話を聞いて、龍也はその方角を見やると、確かにナイトメアの群れは、そこから湧いてきているように見えた。

『……………よし、解った。じゃあ、僕が行く。久住さんはナイトメアの迎撃、お願いできる？』

『やってみよう』

念話を切り、龍也は砲撃を止める。

途端にナイトメアがなだれ込んでくるが、それを龍也は意に介することなく、彼らの合間を稲妻のように駆け抜けていった。

「やれやれ、なんか沢山来たな？」

『そうだな』

龍也が抜けたことで、一気に自分のところにまで迫ってきたサザランドの大群を見据え、久住は静かに息を吐く。

手には、シザーフォームのままのアリス。

既にチャージは完了しており、いつでもも放てる状態だ。

臨界状態の魔力球が鉄の根元で荒々しく滾る。

『敵は多数だ。近接戦闘では抜かれてしまつな』



「ちっ、次から次へと……………！」

『仕方なからう。私達の任はこの場を維持することにある。覚悟を決めるのだ』

「解ってるよ。…………… ったく、損な役回り引き受けちまったかな？」

『クーリングオフは今更不可能だぞ？』

「お前、少し五月蠅いよ！」

どこで覚えたんだよ、そんな言葉！と怒鳴りながら、久住は再び砲撃を放つ。

無駄口を叩きながらも、しかして彼の横を生きて通ることが出来た機体は、何一つとしてありえなかったという。

「くそっ、何なんだよ、お前達っ！」

一方、リニアレールに近い空域では、カオスがシンとフェイトの2人を相手取っていた。

脚に発生させた魔力刃で切りかかるが、それをフェイトは鎌で絡めとり、姿勢を崩したところでシンのビームライフルが火を吹く。

完璧なチームワークで敵を圧倒する様は、？機神？と？死神？の名に相応しい。

「ちっ……いい加減墜ちろよおっ！」

業を煮やしたカオスが、複相ビームを発射するが、あと少しでフェイトを捉えるというところで、今度はシンがその大きな盾で庇った。

そして、巻き起こる軽度の爆発。

「ぐっ……………」

大気を伝わってきた衝撃に、カオスが僅かにその身体をよろけさせる。

なんとか魔力を噴射して、姿勢を制御しようと努めたが。



「あああああつ！」

絶叫を上げ、カオスの機体表面が激しく発光し

やがて、大きな音を立て、爆散した。

「うわあっ!?!」

「く、うう……………」

何が起るのか予測できなかったシンは思わず悲鳴をあげ、フェイトが爆風に耐え忍ぶ。

そして。

先ほどまで男がいた空域には 周囲と同じ、青い空が見えていた。

「まさか、死を選んだなんて……………」

「馬鹿、野郎……………」

おそらく、仲間の情報を渡さないための行動。

同じ組織に属する人間として彼の言葉は理解できないでもないが、あまりにも後味の悪い結果に、2人は苦虫を噛み潰したような顔で俯く。

そして、やや無言の状態が続き。

不意に、フェイトが口を開いた。

「……………行こう、シン。なのは達が待ってる」

「……………はい」

言い知れぬもやもやとした思いを感じながら、金色の閃光と青の機神が、青空を駆けた。

ガジェットという名の恰好の獲物を尽く灰燼に帰す。

ガジェットの下へ2人が到着し、既に30分余り。

既にその数は残り少なく、成果としては、充分過ぎるほどだった。

「そっちはどうだ、なのは？」

「上々だ、よ！」

目の前の木偶を切り裂きながら問う隼人に、同じく彼の背後で、なのはが砲撃を放ちながら答える。

斬撃に、魔力の奔流に、ほぼ全てのガジェットが漸く沈黙し、2人は息を整える。

「これで、やっと終わりか……………」

「そ、そうだね……………」

息を弾ませるなのはに、隼人は考える。

やけに気合の入った数だな、と。

本来この場面でてくるガジェットといえば、なのはとフェイトの2人がかりで悠々と殲滅できる程度の物量ではなかったか。

にも関わらず、この量である。

(やはり、敵側にも既に俺達以外の力が働いていると考えた方がよ

さそうだ。創造者が……或いは、バグか)

バグならばまだ都合がいいが、創造者の場合はやり辛くなりそうだ。

そんなことを考えながら、なのはに声をかけようとした、その時

「隼人君、危ない！」

なのはの声に、咄嗟に振り向き様に剣を振るう。

確かな手ごたえと共に、剣と剣が激しく火花を散らした。

「くっ……………」

「なっ……………」

防いだことに舌打ちする敵に、突然の襲撃に驚愕する隼人。

しばし鏢競り合っていた2人だが、やがてどちらからともなく弾かれるように離れた。

「貴方、何者!？」

なのははそう言って、突然の襲撃者に対し杖型デバイス、レイジン  
グハートを構える。

だがそれに対し、?それ?の正体が何かを知っている隼人は、顔を  
しかめた。

「……………ガイア」

「お前達……………倒すっ！」

どこかで聞き覚えのある高音を放つ黒き機体が、再び隼人へと襲い掛かった。

第16話「創造者、出勤/後編1」（後書き）

（神の黄昏）

神崎「皆さん、本当にお久しぶりです」

リオス「ずっとスランプだったんだもん。仕方ないよ」

エルト「フン、弛んでいる証拠だ」

神崎「……………この対照的なリアクション。どう反応していいやら」

リオス「初めましての方ももしかしたらいらっしやるでしょうか。作者さんの新作の主人公、エルト「クリーバー」君です！」

エルト「皆さん、初めまして。エルトといいます」

神崎「さて、そんなわけで漸く今日、更新することが出来ました！」

エルト「これからはちゃんと更新していけるのだろうか？」

神崎「それは解らない。けど、なるべくそうしていくつもりではいますよ」

リオス「頑張ってくださいね」

神崎「前回感想をくださいました綾崎先生、久住祐治先生、水玉先生。感想、ありがとうございました」

エルト「さて作者。いつになるかも解らん次回はどんな内容だ？」

神崎「いちいち言い方に棘がある件。……………えー、今回はですね、Hagaliaz先生&スバル&ティアナ、綾崎先生&なのは、久住先生&僕の戦いの決着を書きます。まだ見ぬ大罪メンバーがお目見えするかも！」

リオス「へえ」

神崎「それでは次回、『創造者、出動/後編2』にも、」

リオス&エルト「ご期待下さい」

## 第16話「創造者、出動/後編2」

「お前達……………倒すっ！」

ガイアが突撃し、手に持つライフルを数発放つ。

翠色の光条は隼人となのはの間を走り、2人は弾かれるように別々に跳んだ。

「ガイアガンダムとは……………わかってはいたけど、なかなか滅茶苦茶な世界だな、ここはっ！」

言いつつ隼人も魔力球を形成し、砲撃を放つ。

周囲の状況を考慮して、なのはを巻き込まないように加減して放ったが、それでも充分すぎる威力を持っていたらしいそれは、ガイアの盾を軽々と蒸発させた。

「なのは！ 俺が相手を引き受けるから、お前は隙を見てバインドを頼む！」

「うん、解った！」

言うとなのはは早速バインドの構成に取り掛かる。

それを横目に見届けると、隼人は桃色のビームサーベルを抜き放ったガイアを真っ直ぐ見据えた。

「さあ、待たせたな。相手になってやるよ」



設定のその威力は十分な脅威となってスバルとティアナの2人を襲う。

しかしそれを迎え撃つは、2人ではない。

「フンッ！」

戦い慣れしていない2人に代わり、氷川 流が鉞を手に両者の間に割り込む。

初陣となる2人に余計な傷をつけまいと、氷川は鉞を槍と鏢迫り合わせる。

「このっ、さっさと倒れろってんだよ！」

左右に、まるで開いた2枚貝の殻のようになったシールドの内側から左右3本、合計6本のビームが放たれる。

だが、氷川は読んでいた。

光がその砲口から放たれる前に、胸へ手を当てて？氷？の漢神を紡ぎ出す。

それにより顕現するは、氷の壁。

ビームは特殊な力の加護を受けたその壁に阻まれ、相打ち同然に霧散した。

「ちいっ……………！」



れこそがアビスにとって最大の勝利となる。突撃には、一変の迷いもなかった。

アビスは再び槍を腰駄目に構え肉迫する。

しかし、狙いは氷川ではなく。

「そおらっ!」

桃色の刃の切っ先は、真っ直ぐに、後ろに控えているスバルとテイアナへ向かって伸びる。

そのまま槍は、なのはによく似たバリアジャケットを貫いた。

「ヒヤハアツ! 迂闊だねえ。俺がアンタだけを狙うとも思ったあ?」

無惨にも突き殺したと確信しているアビスは、勝ち誇ったように笑う。

だが。それでも氷川の様子は変わらない。

否、むしろそれどころか。

「くっ、はははははははっ……………」

嘲笑すら、浮かんでいた。

「な、何笑ってんだよ!？」

いよいよ気でも触れたかと、気味悪げに睨み付けるアビスの視線も意に介さず、氷川は淡々と事実だけを述べていく。

「お前は幾つか、大きな勘違いをしているようだな」

「何!？」

「まず、1つ目。お前が自分が思っている以上に矮小で脆弱な存在であるということ」

言いながら、氷川は鉞を叩きつける。

咄嗟に受けに回したシールドが根元から切り落とされ、爆散する。

「ぐっ……………」

「2つ目は、己れを雑兵と侮った事」

そして、爆風と炎に苦渋の色を浮かべるアビスへ、間髪入れずに鉞を投げつけ、瞬間的に出現させたもう1つの鉞で斬りかかった。

初撃を受けたアビスの槍が悲鳴を上げて半ばから折れ、2撃目の斬撃がアビスの逆側のシールドを切り落とした。

シールドが爆散した衝撃でアビスが体勢を崩し、その間に本体と分かれた槍の先端が地面へ突き刺さって、魔力刃が消滅した瞬間、完全に落下して乾いた音を立てた。

「そして、最後の1つは……………」

シールドの爆風から影が一陣の風のように突き抜けて、迫る！

「……………未熟は未熟なりに、意地というものがあるということだ！」

「はあああああああああつっ！」

アビスの槍に絶望の表情と共に刺し貫かれていたスバルとティアナの姿が揺らいで消え、正反対の方向から？本物の？スバルが手甲、リボルバーナックルをうならせて突撃した。

シールドを失い槍を失い、自らの身体を支えるバランスすら失って、アビスは成す術もなくスバルの右拳に叩き伏せられた。

装甲越しに尋常でない衝撃が襲い、肺から空気を吐き出してアビスは悶絶する。

そこへすかさず、スバルの後方から姿を現したティアナが、男へバインドをかけた。

「いろいろぶつつけたけど……………なんとかなっただわね」

策が上手くいったことを確認し、安心したようにティアナは溜め息をつく。

正直言えば実戦はこれが初めてであるので、魔力弾の威力については先程戦ったがジェットに対し立証されたとはいえ、幻術や拘束についてはこれが初。

正直どれほどの威力を發揮してくれるのか、全くと言っていいほど解らなかった。

しかし、今はこうして敵を欺き、拘束するには至ったのだから、よしとしようと思う。

「全く、君達も無茶をするな」

事が終わったのを見届け、氷川が2人へ近寄っていきこうとすると

不意に、ティアナが銃を向けた。

「ティアア!？」

「……………何のつもりだい？」

驚愕するスバルと、訝しげに眉を顰める氷川。

銃口が鋭く光り、氷川の胸へ向けてその獠猛な牙を突き立てる。

「助けていただいたことには感謝しています。しかし、貴方には重要参考人として、同行していただかねばなりません」

そう言つて、じつと銃口を突きつけたまま毅然とした態度をとるティアナに、思わず氷川の頬が緩む。

初出勤で、よくぞここまでの威勢がはれたと。

馬鹿にしているのではない。初陣の2人に見れば、かなりの賛辞と言えるだろう。

だが。

「悪いが、まだ君達に同行する時ではない。ここらでお暇させていただけようか」

言い、氷川が取り出したのは、何の変哲もない紙1枚。

しかしそれこそが彼の武器であり戦いの得物であることを知らない2人は、それを呆然と見るのみ。

ぱつと広げ、中心に描かれた文字 墨で豪快に描かれた？

鳥？の字から山吹色の光が渦を巻き、やがて墨で出来た鳥が現れ宙を舞う。

「ではな」

ひらひらと手を上げ、去っていく氷川の姿に2人が我に返ったのは、上空に待機し状況の推移を見守っていたリインフォース？が到着した後だった。

「くっ、そっ……………」

フリーダムガンダムの蒼き翼で真っ直ぐにナイトメアフレームの発生源へと近づいた龍也は、そのあまりの物量の多さに辟易していた。無論、先程とは違って機体は全て久住の方に出来るだけ受け流してはいるが、それもあくまでも？出来るだけ？である。

その全てが龍也をむざむざ通すわけもなく、襲い来る敵を時にはビームサーベルで斬り、時にはビームライフルやウイング部のプラズマビーム砲で打ち抜きながら、少しずつ前へと進んでいく。

『龍也』

「久住さん？」

少しずつしか進めない現状に苛立ちながらまた1回、トリガーを引いてビームを打ち出す龍也に突如、久住から通信が入った。

『そっち、まだ終わらないか？』

「残念ですけど、敵の数が凄くて……………」

『こっちも凄いいことになってるぞ。なるべくなら早く終わらせてくれるとありがたいんだが』

「そうしたいのは山々なんですけど……………」

話しながら、敵が撃ってきたバズーカを旋回して引きつけ、頭部に備え付けられたバルカン砲、CIWSで迎撃する。

まともにそれを受けたバズーカの弾は爆散し、その煙をドーナツ状に裂いて現れた翠色をしたビームが、バズーカを放った張本人であるナイトメアに直撃して鉄屑と化した。

「このとおり、取り込み中だし……っ！」

そう、再び近寄ってきた機体を撃ち落しながら、おどけたように言ってみせる。

実際は、そんな余裕もあまりないのだけれど。

すると、久住は何か思案するような様子で沈黙した。

その背後で、彼のコントロールする複数の魔力球が火を吹き、複数の火線が敵を粉碎する。

思考しながら敵を薙ぎ払う、自分にはおそらく出来ないだろう熟練した技を、まるで既に何年も戦ってきたかのようにさも軽くやってみせる久住に、龍也は舌を巻いた。

尤も彼とて数ヶ月前にこちらへ飛ばされたばかりなのだが、少なくとも撃ち落しながら話すだけで精一杯な自分とは大きな開きがある。

暫く考え込んでいた久住は、やがて考えが纏まったのか顔を上げた。

『……………龍也』

「はい？」

いい考えでも浮かんだのか。

そう期待して聞き返す龍也に、久住は唐突に告げた。

『その場から退避しろ。今すぐに』

「……………は？」

あまりにも脈絡のない勧告に、思わず間拔けな声で龍也は聞き返した。

「その場から退避しろ。今すぐに」

『……………は？』

一言だけつげ、向こう側の返事も待たずに久住は通信を切った。

今のやり取りの間だけでも、周囲に敵が溜まってしまったため、それを一掃するためだ。

「そら、落ちろっ！」

シザースフォームのアリスの根元から、もう何度目か解らぬ砲撃を放ち、固まって展開していたナイトメアを纏めて蒸発させる。

それにより出来た僅かな隙を利用して、久住はアリスをがっしりと構え、自身の周囲に魔力球を集めていく。

『あれをやるつもりか？』

「ああ」

『そうか。だがいいのか？ あノ龍也という小僧、巻き込んでしまつやもしれぬが』

アリスの言う？あれ？というものは、どうやらとてつもないものよつで、彼女の声音からは前線の龍也を巻き込んでしまうことへの憂慮が含まれている。

だが、久住は「大丈夫でしょ」、と気楽にも笑った。

「この程度で落ちるよつじゃ、少なくともバグとは戦えないだろ。警告もしたしな」

『あれで伝わったのかどうか甚だ疑問なのだが……………』

「堅いことは言いつこなしだ」

そう飄々と言いながら、久住はアリスへ魔力を集中させていく。

否、アリス本体だけではない。

自身の周囲に展開させた魔力球にも光が集束していき、やがて臨界する。

「行くぜ……………」

そして久住は、アリスを持っていた左手を離し、胸へ押し当てる。

そこに浮かび上がったのは、時計を模した紋章。

その紋章が急速に回転し、6時を差したところで止まった。瞬間、溢れる魔力は瞬時に行き渡り、各魔力球の大きさが格段に膨れ上がっていく。

『半分開放か。それだと魔力はSSSランクに留まって、時間も10分に限定されるか?』

「充分だ。サポート頼むぜアリス！」

『了解した』

魔力球に溜まっていた魔力が、アリスに充填されていく。



ようだ。

魔力が目に見えるほど多く持っていていかれたのと、少し熱い程度で、身体にもさほど影響はなさそうである。

粗方薙ぎ払ったし、よほど運よく逃れられた機体でも、数機であればアリスの演算部を少し拝借する程度で撃退できる。

『龍也、終わったぞ。後はそっちでなんとかしろ。以上』

一方的に念話をして一方的に切ると、久住は機動六課のものと見られるヘリへと向かった。

「……………め、滅茶苦茶だ」

久住から退避しろと言われ、その後訳も解らないまま空域を離脱していた龍也は、その直後に現れた超巨大な砲撃に度肝を抜かれていた。

漸く我に返った龍也が発したのが上記の言葉であり、その砲撃の威力を端的、且つ簡潔に示す言葉でもあった。

「……………ライザーソードも真っ青だな、アレは」

『マスター、ただ今の久住様の砲撃に、敵の大部分は反応途絶。今が好機と思われます』

「そっか。よし、行くよ！」

『了解！』

バーニアを吹かせ、一気に加速するフリーダムガンダム。

そんな彼のカメラアイに、やがてある一つの構造物が飛び込んだ。き

「あれか……………」

急速にスピードを落とし、？それ？の目の前で滞空する。

結果から言えば、それとは巨大な球状のエネルギー体であった。

そのエネルギーの中から、ナイトメアが生産され、あれだけの大部隊を生み出すに至っていたのだろう。



なのはと隼人の戦いは、状況のみをとれば隼人達に分があった。

しかしガイアも、どこにそれほどの力が残っているのかとばかりに何度でも立ち上がり、向かってくる。

既に装甲の各所は爆散してショートしており、何時全てが木っ端微塵となってもおかしくないというのに。

(こいつ、恐怖を感じないのか!?)

本気を出せばこれくらい、隼人なら造作もなく薙ぎ払うことが出来るだろう。

だが、それが出来ない。

彼女の執念に吞まれかけている隼人には、本気で彼女を切ることが出来ない。

隣のなのはもそれが解っているから、敵の突撃は全て彼女が防いでいた。

「お前達……………なんでええええつ！」

業を煮やしたガイアは激昂し、変形して襲い掛かってくる。

人の体としてはありえない方向に足が曲がり、四足歩行獣の姿へと成るが、全く痛みを感じないのか。ガイアはうめき声1つ発することもなく、背部へ展開されたウイングに生えたビーム刃で突撃した。

「くっ……………」

「隼人君、下がって！」

素早く隼人とガイアの間に割り込み、なのははプロテクションを張る。

それに弾かれたガイアは空中で変形を解きながら器用に態勢を整え、軽々と着地した。

「す、すまん」

「いいよ。でも……………」

「ああ。本当に奇妙だ……………」

シン・アスカのデータを見ていた2人には解る。

目の前の彼女が所謂？ガンダム？であり、デバイスによりそれを再現しているのであろうことは。

だがそれはあくまでも？再現？である。彼女のように、人の関節や人体構造を無視した変形などありえない。

シンのインパルスですら、原作の劇中で行っていた胴体分離などの技は使えないというのに。

「出来れば捕まえて、情報を聞き出したいところだが……………」

捕獲というのは、本気で殺しにくよりもよほどの腕前が必要となる。

それが生け捕りであれば尚更。

それが解らない2人ではないが、敵の情報はぜひともほしいところだった。

「はあああああああつー！」

「「っ!?!」」

判断する暇を、ガイアは与えてはくれなかった。

ビームサーベルを手に突撃してくる。

すかさず構えるのはだったが、今度は隼人が前へ出た。

(これ以上傷つけるわけにはいかないっ！)

「隼人君っ!?!」

次の瞬間、隼人の脇腹を桃色の刃が貫く。

それになのはは悲鳴を上げるが、隼人はむしろガイアの手をがっつり掴み、固定した。

「!?!」

「こうしときゃ……逃げられないよなあっ!」

構える右手に光る剣。

その剣の刃にみるみる内に漲っていくオーラに、ガイアは暴れるもビームサーベルは彼女の腕ごとがっしりとロックされており、抜け出すことが出来ない。

「霸王………一閃!」

次の瞬間。

戦いの終わりを告げる爆発が、天高く昇った。

第16話「創造者、出動/後編2」(後書き)

〔神の黄昏〕

神崎「今回は少し増量したぜ！ 最新話の投稿だ！」

リオス「今回は皆さん、大活躍だったね」

神崎「ラモン先生、水玉先生、笑う男先生は出せなかったけどね！  
まあ、展開だから仕方ないとも思うけど」

リオス「3箇所で戦いが起こってたわけだけど。結局一番活躍したのは誰なんだろう？」

神崎「うーん、甲乙つけがたいけど……やっぱり、能力を使って大活躍だった久住先生じゃないかな」

リオス「作者さん、元ネタ読んでないから凄く不安なんだよねこれ」

神崎「そうなんだよ！ もういつクレームが来るかどきどきものですよー！」

リオス「まあ……知らない中ではよくやったんじゃないかと思う」

神崎「……そう言ってくれると助かる。さて、皆様！ 次回は少し本編をお休みしまして、何か番外編を描こうとおものですが、何がいいでしょうかね？ 関係者の皆様に案をいただきたく思います」

リオス「以前の会議で出ていなかったネタでも大歓迎です。これだというものを感想板などでお教えください」

神崎「ちなみに、温泉ネタと媚薬ネタはまだ使い時ではないので却下の方向でお願いします」

リオス「2つ共、ある程度キャラが揃っている状態でないと使えないもんね」

神崎「聖王教会の人もないと使えないネタだからね……。さすがにファーストアラートが終わったばかりのこの状況では、六課を訪問させるのは少しだけ違和感があるわ……………」

リオス「そういうわけで、アイディアお待ちしてますー」

神崎「では次回、番外編へ」

リオス「ご期待下さい」

## 第17話「創造者、里帰り／前編」

いきなりの、しかも激動の初任務から暫く経った。

漸くこの隊舎での生活にも慣れてきたという頃。

そんなある日の朝、久住 祐治はもそもそと己のベッドから這い出  
した。

寝ぼけた目を擦りながら、軽く支度をして廊下へ出る。

まだ幾らか寝ぼけているのか目は虚ろで、あっちへふらふら、こっ  
ちへふらふらと壁にぶつかりながら、やっとこさ洗面所へ向かい、  
顔を洗う。

管理局、とりわけフォワードの訓練のある機動六課の朝は早い。

後少しもすれば、訓練場から威勢のいい掛け声が聞こえてくるはず  
だ。

そんなことを寝ぼけた頭で考えながら、久住は一通りの身支度を済  
ませると、再びふらふらと歩き出した。

呆れたことに、未だ頭は半分が夢の世界から戻ってきていないらし  
い。

そんなふらつく身体で彼が次に向かったのは、医務室。

昨夜、ふと自分を呼び止めた医務官という名のその部屋の住人、シ  
ヤマルに、薬品整理を手伝ってほしいからと、朝に医務室に来て欲

しいといわれていたのだ。

頭は寝ぼけていて、部屋に彼のデバイスであるアリスを置き忘れるほどだというに、それだけはきつちりと頭から離さないでおいらしい。

しっかりものなのかいい加減なのか、どっちつかずな男である。

そんなことを言っている間に、彼の姿は医務室の前にあつた。

後は、そのドアを開けるだけ。

そうして、久住は眠気眼でドアの開閉スイッチに手をかけ、ドアを開け放ち。

「ちわー。言われたとおり来た……ぜ……」

瞬間、目を有り得ないくらいに見開いて固まった。

「……………」

「……………」

ドアのあるスペースを挟んで向こう側に見えるのは、間違いなくシヤマルその人の姿。

しかして、その格好はいつもの彼女のように白衣に包まれてはいない。

否、それどころか、服というものを一切纏っていない。

かろうじて下着が大切な部分を覆い隠してはいるが、久住のような男性がお目にかかっていい姿とは到底言い難い。

そこには、以前聖王を崇め祭る教会に属する何処ぞやの騎士が遭遇したものに似たシチュエーションが、繰り広げられていたのだった。

「……………  
-っ！！！！-」

瞬間、何が起こったのか解らずきよとんとしていた彼女の顔が、まるで林檎か何かのように、みるみるうちに真っ赤に染まっていくのを見て、久住は思った。

(……………終わった、な)

次の瞬間、貫くような悲鳴が隊舎中に響き渡った。

目など、とつに覚めるほど

強烈な。

第17話「創造者、里帰り／前編」

「ふわぁ……………おはようございますー……………って、うわ。どうしたんですか、その顔？」

早朝のハブニングから数時間後。

欠伸を噛み殺しながら食堂へ入ってきた龍也がまず見たのは、掌の形がくつきりと見えるほどの、見事に真っ赤なスタンプを頬に施された、久住の姿だった。

「あ、ああ。いろいろあつてな。驚かせてすまん」

「え、ええと……………」

吃驚した、というよりは、何がどういろいろあつてその事態になったのかを猛烈に訊いてみたい気分の龍也だったが、藪蛇になりそうなので保留にしておくことにした。

しかしながら、それをそのまま放っておく気にもなれず。

「あの、大丈夫ですか？ 医務室行った方が……………」

「い、今は駄目だ。今はあそこには、鬼がいるから。いや、鬼なんて生ぬるい。もっとこう、魔王みたいな……………」

どうやら、この一言も地雷の1つだったらしい。

何やら恐怖に打ち震える久住に、慌てて龍也は話題を切り替えた。

「ま、魔王といえば。あのイベント、そろそろですよね?」

「……………ん? あ、ああ。そうらしいな」

あのイベント。

この作品の原作を知る方には今更説明するまでもないであろう、?  
あの? ホテルを発端とした事件である。

おそらく、彼ら創造者が始めて対面する山場の1つとなるう。

「まあ、まだ地球での事件も起こっていない状況だ。実際に起こるのは、もう少し先だろうがな」

「ですね。それまでに、いろいろと対策を練っておかないと」

彼らの知る顛末では、多くの人が傷つく事件。

しかしながら、その事件によって、多くの成長が生まれたのもまた事実である。

すれ違いによる認識の齟齬など、現実を生きる人間にやら誰にでもあることだ。

それを、ただ傷つきたくない一心で全てなかったことにしようなどというのは、現実を知らない甘えた考えに過ぎない。

その？事件？というのが、まさしくそんな実を孕んでいるのだ。

故に、そう簡単に片付けていい問題ではない。

未来を知る彼らだからこそ、やっていいことがあり、また彼らだからこそ、やってはいけないこともある。

それを、弁えなければならない。

この世界が壊れるか否か、それすらも、今は彼らに委ねられているも同義なのだから。

「ま、何にせよまずは地球への任務だ。あの狸がいつ明かしてくるのか解らないが、準備だけはしておこうじゃないか」

「それもそうですね。じゃあ、僕は戻って荷造りしてきます」

言って、龍也はトレイに乗った空の食器を整える。

「食つの速っ!?!」

「あはは、よく言われるんですよね」

目の前で話していた久住でさえも気付かない神速。

おそらくこの速さに勝てるのは、大食いで有名なナカジマ姉妹くらいのもではなからうか。

久住にそう思わせるまでに、彼が食事に要した所要時間は短かった。



「はい、今日の早朝訓練はここまで！」

「「「「ありがとうございますー！」「「「「

一方、龍也が食堂で久住に弄られていたその頃。  
訓練場では、ちょうどフォワード陣の早朝訓練が終わったところだった。

威勢よく返事を返すフォワードの4人に満足げになのはが微笑んでいると、ちょうどその時、別の方向から剣戟を示す金属音が響いてきた。

「うわぁ……………隼人さん、今日も扱かれてるみたいですね」

「そうだねえ」

スバルの言ったとおり、その剣戟の音が示すのは天道 隼人の訓練が今尚行われていることである。

六課にいる創造者の中で、飛べないのは隼人だけ。

久住と修斗は飛行魔法をマスターしているし、龍也はガンダムやフライトユニット付のナイトメアフレーム、飛行能力を持つライダーの力を使えば自在に飛行することが出来る。

が、彼はどれも該当しない。

無論、飛べはしなくても彼の場合、その膨大なる魔力とそれを遺憾なく威力に変換する技があるのだから、陸戦魔導師としてはオーバースペックな存在には違いない。

だが、今後激化するであろう、同じくオーバースペックなバグを手取る戦いにおいて、飛べないというのはいざという時に致命的になりかねない。

そう考えた久住と修斗は、先にこの世界へ来ていた先輩として、六課在任の他の魔導師へ、彼の特訓を依頼したのである。

そして、その彼の相手に選ばれたのが

「同じ剣同士だし。凄く張り切ってたんだよね、シグナムさん」

「大丈夫でしょうか……………なんだか、凄い爆音とか聞こえてくるんですけど」

「うーん……………」

エリオの問いに、腕を組んでなのはは考える。

そうして、言っている傍から彼女らの近くに隼人が放った流れ弾らしき魔力弾が着弾し、小さなクレーターを形成した。

シグナムのデバイス、両刃剣のレヴァンティンに弾かれてもしたのか、彼女の変換資質である炎を微弱に纏ってのものだ。

その爆風を受けながら、なのはとフォワードが完全に硬直する。

「大丈夫……なんじゃないかな。……………たぶん。きつと」

「……………丸投げしましたね、なのはさん」

未だに硬直から解放されないまでも、やっとのことで口だけは動かしたティアナの言葉を流しながら、なのはは隊舎に戻る  
否、避難するように促したのだった。

バトルマニアという名の火の粉が、こちらに降りかからぬ内に、と。

「はいはいつと……おお、龍也じゃん」

騎士カリムとの楽しいティータイムを過ごした後、本来の用件であるラモンの部屋をノックすると、悪戯な笑みを浮かべたラモンが出迎えた。

「どうも。ご無沙汰してます」

「ほんとご無沙汰。どうだ、飛行魔法はものになったか？」

「あ……ええと……」

言いよどむ龍也に、ラモンは苦笑いしながら肩を叩く。

「そうか。ま、確かにちょっと前まで一般人だった俺たちが急に空飛べー、なんて言われてもすぐ出来るもんじゃないよな」

「せっかく教えていただいたのに………面目ないです」

がっくりと肩を落とす龍也に、ラモンは「気にするなよ」と今度は背中を叩いた。

「で、今回は何の用？」

「ああ、そうでした。ラモンさんに会いにきたんです」

「俺に？……ああ、そうか。資料渡す約束してたな。まあ、まずは入って」

「失礼しまーす」

招かれるまま、龍也はラモンの部屋へ足を踏み入れた。

内装はいかにも教会の建物らしく、どこか荘厳としたつくりとなっていた。

前に行ったことのある、カリムの寝室にどことなく似ている。

同じ屋根の下にあるのだから、当然といえば当然かもしれないが。

それでも、細かい間取りなどは違うのかと勝手に想像したりもしていたが、そうでもないらしい。

奥にベッドがあり、窓が2つほど設置されていて、カリムの部屋と違うところといえば、化粧台の有無くらいのものだ。

促されるまま席に座り、彼が持ってきた資料を閲覧した。

「なるほど、やっぱりあのオークションですか……………」

「まあな。その日は俺も、ロツサと一緒にアグスタを張り込むことになるが」

「あーあ。ただでさえ面倒なことになるところなのに、なんでこう面倒ごとが集中するんでしょうね」

「それは……俺に聞かれても困る、かな」

苦笑するラモンに「そうですよね」と苦笑し返しながら、資料を読んでいる間にラモンが入れてくれた紅茶を口にする。

さすが、シャツハと一緒にカリムの補佐をしているだけのことはあって、茶葉の選定にセンスが感じられた。

「上手く……いきますよね？」

「さあ。それは解らないが……まずは俺達に与えられた役割をこなそう。まずはそれから、だろ？」

「……………ですね」

来るべき戦いに向け、束の間の日常を過ごす、創造者達。

その翌朝、六課の前線メンバーは地球へ飛んだ。

第17話「創造者、里帰り/前編」(後書き)

〔神の黄昏〕

神崎「いやー、空けちゃった&短くて申し訳ない(滝汗)」

リオス「いやー、じゃないよもう。何やってんのさ」

神崎「いやいや、面目ない(汗) さて、そんな久々の更新ですが、理由はそれほど複雑なものではなく、単に4月に始まった新生活といますか、新しい生活リズムにようやくと慣れてきまして、執筆のリズムというか、プランが立てられるようになりましたので、書けるようになったわけです」

リオス「具体的には？」

神崎「土日に近い、木・金の辺りで企画作品を書き上げることになりました。陽だまりスタジオと交互に展開していきたいと思います」  
w

リオス「つまり来週は……陽だまりスタジオ？」

神崎「そうなるね。ただ、来週のように連休が重なる場合はおそらく時間もそれなりにとれますので、もし予定より他が早く書き終わればその分だけ予定を前倒しして書く可能性も充分ありますが」

リオス「なるほどね。……さて。今回は、ちょっとした日常編というわけだね？」

神崎「そうなりますね」

リオス「久住先生、哀れな……………」

神崎「確か、こんな感じのサービシンのOKが出ていたと思うので……。とりあえず、いろいろとすみませんでしたw」

リオス「でも、確か今回は番外編とか言ってたっけ？」

神崎「そのつもりで、既に冒頭は少し書いてあつただけど……。誰からもリクエストがなかったので、結局本編に切り替えました」

リオス「えええー……………（汗）」

神崎「まあ、いずれやるのは決定ですけどねw……………気は進まないけども」

リオス「ああ、そういえば番外編の内容って……………」

神崎「どれをやっても、僕が弄られるという罫。あれが、そんなに皆は僕が弄られるところが見たいか！ そんなに僕はMに見えるのかっ！？」

リオス「ぼ、僕にあたらないでよ……………（汗）」

神崎「さて、そんな妙なテンションのまま、次回は！ いよいよ創造者を含む六課陣が地球へ！ ドラマCD編へ突入します！」

リオス「他作者様のものを、見よう見まねで頑張ります」

神崎「では次回、『創造者、里帰り／中編』に、」

リオス「ご期待下さい」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0572/>

---

8人の創造者

2011年10月6日14時19分発行